

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第187集

# 上ノ平遺跡

第二東名No.104・105地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市－2（第2分冊）

2008

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第187集

# 上ノ平遺跡

第二東名No.104・105地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市-2(第2分冊)

2008

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 例　言

1. 本書は、静岡県掛川市寺島字上ノ平に所在する上ノ平遺跡（第二東名No.104・105地点）の発掘調査報告書である。この報告書は2分冊で構成されており、本冊は「第2分冊」である。
2. 本冊の執筆は下記のとおりである。  
株式会社ジェネック：第6章第1～3節  
パリノ・サーヴェイ株式会社：第6章第4節  
田村義太郎：第5章、第7章（編集担当）
3. 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。空中写真の撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は当研究所写真室が実施した。
4. 遺物番号は、掲載遺物について種類・揮因の別に問わらず、とおし番号を付している。
5. 観察表にある土色表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2000年版）に基づいている。
6. 本書にある図表は、調査で測量・実測したもののほか、下に記した各種地図を使用しているものがある。その他に使用した出典などは、必要に応じて各図中に記している。  
国土地理院発行の地形図（縮尺2万5千分の1）  
国土地理院発行の地形図（縮尺5万分の1）  
掛川市役所発行の東遠広域都市計画図（縮尺5千分の1）  
中日本高速道路株式会社横浜支社掛川工事事務所管轄（作成時は日本道路公団静岡建設局掛川工事事務所管轄）の第二東名高速道路掛川地区幅広設置測量（縮尺千分の1）
7. 本冊の頁数は、第1分冊とは独立して付けている。ただし、章や図・表の番号は、第1分冊からの連番とする。
8. その他の事項は第1分冊に順ずる。

# 目 次

## 例 言

第5章 遺 物 .....	1
第1節 土 器 .....	1
第2節 石 壁 .....	11
第3節 玉類など .....	13
第6章 自然科学的分析 .....	77
第1節 土壌ブロックのCTスキャン分析と炭化米のDNA分析 .....	77
第2節 花粉分析 .....	80
第3節 プラント・オパール分析 .....	85
第4節 炭化米の種類同定およびC14年代測定・種子の同定 .....	88
第7章 まとめ .....	95

## 写真図版

## 抄 錄

### (第1分冊)

第1章 調査に至る経緯
第2章 遺跡の位置と環境
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第3章 考査の方法と経過
第1節 調査の体制
第2節 現地調査
第3節 資料整理・報告書作成
第4章 遺 構
第1節 概 要
第2節 住居跡
第3節 墨立柱建物跡
第4節 土坑・不明遺構
第5節 方形周溝墓

## 写真図版目次

### カラー図版

- 図版1 北からの遠景  
図版2 1 全景(南西から)  
2 中央・西部の全景(北東から)  
図版3 1 SB49～51(齊湊を伴う住居跡)周辺(西から)  
2 SH111(布覆りの孤立柱跡跡)(南東から)  
図版4 1 SZ01・02(方形周溝型)(南から)  
2 赤影のある土器片  
3 玉類
- 白黒図版
- 図版5 測定区全景(合成)  
図版6 1 開墾区西側造塗草む部(南側)  
2 SB07・SD04～06(北から)  
図版7 1 SB11・SB12(西から)  
2 SB15・SD18～20(南東から)  
図版8 1 SF16・SD11・S2・SH85・86(北から)  
2 SB18(南から)  
図版9 1 SD24遺物出土状況(南から)  
2 SD24動物出土状況(東から)  
図版10 1 SB23・SB25・26(東から)  
2 SB26～31・SD30～33(東から)  
図版11 1 SB26・31・SD30～33(南から)  
2 SB27炭化米出土状況(南から)  
図版12 1 SB37・SD43～45(南から)  
2 SD43遺物出土状況(東から)  
3 SD45遺物出土状況(南から)  
図版13 1 SB38・40・46・47(北東から)  
2 測定区南西部(南東から)  
図版14 1 SB42・SD49(南から)  
2 SB42喷塗山状況(東から)  
図版15 1 SB49～51・SD66～59(北西から)  
2 SB49～51・SD66～59(南西)  
図版16 1 SD57遺物出土状況(東から)  
2 SD57遺物出土状況(東から)  
3 SD57遺物出土状況(東から)  
図版17 1 SB54・56・SD70・73・74(南から)  
2 SB54・56・SD70・73・74(東から)  
図版18 1 SB55・SD61(同から)  
2 SB69・70・SD84・85(北から)  
図版19 1 SB82・SD87(南西から)  
2 SB87・SD91(東から)  
図版20 1 SB89・SD97～100(四から)  
2 SD100遺物出土状況(西から)  
3 SD100遺物出土状況(北から)  
図版21 1 SB90・SD96(北西から)  
2 測量区北端部(南西)  
図版22 1 SB119・SD116～120(南から)  
2 SD120遺物出土状況(南から)  
3 SD120遺物出土状況(西から)  
図版23 1 SB113・SD121(南東から)  
2 SB126・127・SD123・124(北から)  
図版24 1 SB163・164・SD125(南東から)  
2 SBC1(東から)  
図版25 1 SB30・03(西から)  
2 SB04～06(南西から)  
図版26 1 SB10(東から)  
2 SB10炭化柱脚出况(東から)  
図版27 1 SB13・14(東から)  
2 SB29床面塗出状況(同から)  
図版28 1 SB34床面塗出状況(北西から)  
2 SB43(東から)  
図版29 1 SB44遺物出土状況(北西から)  
2 SB47(東から)

- 図版30 1 SB53(北西から)  
2 SB55(南東から)  
図版31 1 SB59(南東から)  
2 SB62(南東から)  
図版32 1 SB67(西から)  
2 SB67炭化柱脚出状況(西から)  
図版33 1 SP67炉窓穴内土墨出土状況(西から)  
2 SB64(南から)  
3 SB65(北東から)  
図版34 1 SB71(西から)  
2 SB72床面塗出状況(西から)  
図版35 1 SB73・74(北から)  
2 SB76(東から)  
図版36 1 SB75～79(南東から)  
2 SB81(南西から)  
図版37 1 SB86(南から)  
2 SB88(南東から)  
図版38 1 SB94(南西から)  
2 SB95・96(東から)  
図版39 1 SB97(西から)  
2 SB106(北から)  
図版40 1 測定区北東部(南西)  
2 SB114～117(北から)  
図版41 1 SB118～120(南東から)  
2 SB118遺物出土状況(南から)  
3 SB118遺物出土状況(東から)  
図版42 1 SB122(北から)  
2 SB128～130(北から)  
図版43 1 SB133・134(北から)  
2 SS135～137(東から)  
図版44 1 SB138(北から)  
2 SB139床面塗出状況(東から)  
図版45 1 SB143(東から)  
2 SB143炭化柱脚出状況(北から)  
図版46 1 SB145～151(東から)  
2 SB155・156(南から)  
図版47 1 SB157・158(南から)  
2 SB160～162(南から)  
図版48 1 SH01～05(西から)  
2 測定区北西部(南西)  
図版49 1 SH17～21(南東から)  
2 SH23・25～27(北から)  
図版50 1 SH45～47・50・51(南から)  
2 SH49・49(南から)  
3 SH56～59(南から)  
図版51 1 SH60・61(南から)  
2 SH66(南から)  
図版52 1 SH72～75(南から)  
2 SH77～80(北から)  
図版53 1 SH81(北西から)  
2 SH88・89(北西から)  
3 SH82・83・SD77・78・80(北から)  
図版54 1 SH82(南東から)  
2 SH98(南から)  
図版55 1 SH111(南から)  
2 SH111炭化柱脚出状況(北東から)  
3 SH111土層断面(東から)  
図版56 1 SH118～120(北から)  
2 SH141・143・144(東から)  
図版57 1 SH127～135(西から)  
2 SH127～135(北から)  
図版58 1 SH146・147(北から)  
2 SH148(北から)

国版59	1 SH150・183 (庶から)	国版68	1 SD93暗渠部分土層断面 (東から)
2 露天区南東部 (軽微)		2 SD28灰陶鍋底残出状況 (西から)	
国版60	1 SH155・156 (雨から)	3 SD97遺物出土状況 (南東から)	
2 SH159・161 (北から)		出土上器 I (縹文)	
国版61	1 SH166~168 (北から)	出土上器 2 (弥生~古墳)	
2 SH169 (北から)		出土土器 3 (弥生~古墳)	
国版62	1 SH176~180 (北から)	出土土器 4 (弥生~古墳)	
2 SH187 (北から)		出土土器 5 (弥生~古墳)	
国版63	1 調査区北部 (削減)	出土土器 6 (弥生~古墳)	
2 SZ01・02 (雨から)		出土土器 7 (弥生~古墳)	
国版64	1 SZ01遺物出土状況 (北から)	出土土器 8 (弥生~古墳)	
2 SZ02:遺物出土状況 (北から)		出土土器 9 (弥生~古墳)	
3 SZ01遺物出土状況 (南から)		出土土器 10 (弥生~古墳)	
4 SZ02:遺物出土状況 (西から)		出土土器 11 (弥生~古墳)	
国版65	1 SF21:遺物出土状況 (北東から)	出土土器 12 (弥生~古墳)	
2 SF22:遺物出土状況 (東から)		出土上器 13 (弥生~古墳)	
国版66	1 SF01半切状況	出土土器 14 (弥生~古墳)	
2 SF02半切状況		出土土器 15 (弥生~古墳)	
3 SF04半切状況		出土土器 16 (弥生~古墳)	
4 SF03:遺物出土状況		出土土器 17 (弥生~古墳)	
5 SF15半切状況		出土土器 18 (弥生~古墳)	
6 SF16半切状況		出土土器 19 (弥生~古墳)	
7 SF14 (東から)		出土土器 20 (弥生~古墳)	
国版67	1 SX01半切状況 (西から)	出土土器 21 (弥生~古墳)	
2 SX05:遺物出土状況		出土上器 22 (弥生~古墳)	
3 SX04 (東から)		出土土器 23 (弥生~古墳)	
4 SX04:赤土層断面		出土土器 24 (弥生~古墳、その他)	
5 SX06:遺物出土状況 (北から)		出土石器 1	
6 SX07 (東から)		出土石器 2	
7 烧き場跡:遺物出土状況 (東から)		出土石器 3 (ガラス質の漆、玉類)	

## 挿図目次

第258回	出土土器 1 (縹文上器) .....	14	第283回	出土土器 31 (弥生土器・土師器) .....	44
第259回	出土土器 2 (弥生土器・土師器) .....	15	第285回	出土土器 32 (弥生土器・土師器) .....	45
第260回	出土土器 3 (弥生土器・土師器) .....	16	第290回	出土土器 33 (弥生土器・土師器) .....	46
第261回	出土土器 4 (弥生土器・土師器) .....	17	第291回	出土土器 34 (弥生土器・土師器) .....	47
第262回	出土土器 5 (弥生土器・土師器) .....	18	第292回	出土土器 35 (弥生土器・土師器) .....	48
第263回	出土土器 6 (弥生土器・土師器) .....	19	第293回	出土土器 36 (弥生土器・土師器) .....	49
第264回	出土土器 7 (弥生土器・土師器) .....	20	第294回	出土土器 37 (弥生土器・土師器) .....	50
第265回	出土土器 8 (弥生土器・土野等) .....	21	第295回	出土土器 38 (弥生土器・土師器) .....	51
第266回	出土土器 9 (弥生土器・土師器) .....	22	第296回	出土土器 39 (弥生土器・土師器) .....	52
第267回	出土土器 10 (弥生土器・土師器) .....	23	第297回	出土土器 40 (弥生土器・土師器・須恵器など) .....	53
第268回	出土土器 11 (弥生土器・土師器) .....	24	第298回	出土石器 1 (丸) .....	54
第269回	出土土器 12 (弥生土器・土師器) .....	25	第299回	出土石器 2 (石藏) .....	55
第270回	出土土器 13 (弥生土器・土師器) .....	26	第300回	出土石器 3 (石鑿・石錐・石芯) .....	56
第271回	出土土器 14 (弥生土器・土師器) .....	27	第301回	出土石器 4 (スクレイパーなど) .....	57
第272回	出土土器 15 (弥生土器・土師器) .....	28	第302回	出土石器 5 (石斧・石鍬など) .....	58
第273回	出土土器 16 (弥生土器・土師器) .....	29	第303回	出土石器 6 (鐵石) .....	59
第274回	出土土器 17 (弥生土器・土師器) .....	30	第304回	出土石器 7 (鐵石・磨石) .....	60
第275回	出土土器 18 (弥生土器・土師器) .....	31	第305回	出土石器 8 (鐵石・石皿など) .....	61
第275回	出土土器 19 (弥生土器・土師器) .....	32	第306回	出土石器 9 (鐵石など)、出土玉類、ガラス質の漆 .....	62
第277回	出土土器 20 (弥生土器・土師器) .....	33	第307回	サンブルA~Cの位置 .....	62
第278回	出土土器 21 (弥生土器・土師器) .....	34	第308回	炭化米を含む断面のスキャナ画像 .....	63
第279回	出土土器 22 (弥生土器・土師器) .....	35	第309回	切断面のフィルム写真 .....	63
第280回	出土土器 23 (弥生土器・土師器) .....	36	第310回	出土燒化器の2 CCDデジタル顕微鏡 .....	63
第281回	出土土器 24 (弥生土器・土師器) .....	37	第311回	上ノ子遺跡の花粉・塵子 .....	64
第282回	出土土器 25 (弥生土器・土師器) .....	38	第312回	プランツ・オバールの顕微鏡写真 .....	67
第283回	出土土器 26 (弥生土器・土師器) .....	39	第313回	上ノ平遺跡の炭化材 .....	69
第284回	出土土器 27 (弥生土器・土師器) .....	40	第314回	上ノ平遺跡の炭化材2・罹変遺体 .....	72
第285回	出土土器 28 (弥生土器・土師器) .....	41	第315回	上ノ平遺跡全休区 .....	93
第286回	出土土器 29 (弥生土器・土師器) .....	42	第316回	縄文時代に関する全体概要 .....	95
第287回	出土土器 30 (弥生土器・土師器) .....	43			

第317図	古代の可能性が高い建物跡の分布	97
第318図	住居跡の分類	99
第319図	扇形住居跡・横円形住居跡の主な出土土器	100
第320図	方形住居跡の主な出土土器	101
第321図	軽矢周溝をもつ建物跡、幅広周溝をもつ 壁穴住居跡の主な出土土器	102
第322図	幅広（無溢）周溝をもつ建物跡の主な 出土土器	102
第323図	縦広（有溢）周溝をもつ建物跡の主な 出土土器	103
第324図	住居跡の分布1	106
第325図	住居跡の分布2	107
第326図	獨立柱建物跡等の分布1	108
第327図	獨立柱建物跡等の分布2	109
第328図	各種住居・建物等の時期的傾向	110
第329図	中・東遼江の弥生時代無落分布	112

## 挿 表 目 次

第6表	遺物観察表（土器）	63
第7表	遺物観察表（玉類・ガラス質の漆）	74
第8表	遺物観察表（石器）	75
第9表	花粉分析結果	83
第10表	プランツ・オパール分析結果1	86
第11表	プランツ・オパール分析結果2	86
第12表	放射線元素年代測定	90
第13表	層年校正結果	90
第14表	樹種同定結果	90
第15表	種実同定結果	90



選  
物

## 第5章 遺 物

### 第1節 土 器

#### 1. 繩文土器

縄文土器の出土は調査区西部に集中し、とくにD・Eの9・10グリッドからの出土が多い。ただし、残存率の高い土器の出土はなく、小破片で占められている。

1~12の多くは、加曾利E3式のあたりに併行するものと判断できる。15などは、曾利II~III式の系統に位置づけできる。16~24の多くは、加曾利E3式に併行する東海系（呪煙系）の土器片である。14については、それ以前の東海系の可能性がある。26~28は北屋型式、29は曾利IV・V式の可能性が指摘できる。いずれも散在的に出土した小破片であり、詳細な復元や検討は難しい。しかし、全体的に縄文時代中期中葉～後葉の土器群として把握することはできる。（註1）

#### 2. 弥生土器・土師器

本遺跡出土遺物の内、最も多いのが弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけできる土器（弥生土器・土師器）である。以下、出土遺構ごとに出土土器についての概要や特徴を示す。なお、土器編年に基づいて示される時期については、該当する弥生土器（主に菟川式）の研究（中嶋1988、岩本1995、鈴木敏1996、佐藤・荻野谷・模原2002など）や古式土師器の研究（鈴木一2002、鈴木敏2002）によるものである。

##### （1）住居跡出土土器

SB02・04・06・07・09出土土器（31~40） いずれの住居跡も、図化できた出土土器片は少ない。SB02には上げ底状の底部片などが出土しており、弥生時代後期前葉に位置づけできる可能性がある。SB06出土の底部片（35）も、上げ底状になる可能性がある。一方、SB04やSB07の壺底部は平底である。壺口縁部片（37）などを含めて、弥生時代後期中葉～後葉に位置づけできる可能性が高い。38については、摩滅が著しいために文様が消失している可能性もある。

SB10出土土器（41~47） 残存率の良い土器が比較的多く出土している。46の壺は縄身で、脣部上半の比較的広い範囲に縄文が施されている。47の底部はやや上げ底状になる。これらは、弥生時代後期前葉～中葉に位置づけることができる。

SB12・13出土土器（48~53） いずれの住居跡も、図化できた出土土器片は少ない。さらに、50・51はSB12の排水溝からの出土であり、SB11やSD24から流入した可能性もある。52は短頸の壺、53は上げ底状の底部片である。SB13出土土器は弥生時代後期前葉～中葉に位置づけできる可能性が高い。

SB15・16出土土器（54~81、188・189） SB15は遺物出土数が決して少ない方ではないが、出土土器の破片化と摩滅が著しい。高环の接合部や壺の肩に羽状剥突が多用されていることから、概ね弥生時代後期後半に位置づける可能性が高い。SB16は、図化できた出土土器片が少ない。弥生時代後期前葉もしくは古墳時代初頭（古式土師器）に位置づけできる要素は見当たらず、全体的に弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づける可能性が指摘できる。

**SB18出土土器 (86~187)** 多くは局溝 (SD24) からの出土であり、重複するSB20などから流入した土器片も混在している可能性がある。台付壺・高杯・鉢と大小の壺がある。台付壺については、刻みを伴う口縁部、球形に近い胴部、短い台部を伴うものが多い。88の口縁部には刻みを伴わない。87・88の肩部には、横方向のハケ調整が認められる。96の接合部には、粘土帶が巻かれている。高杯は、不明瞭な段状の肩曲を伴う脚窓 (105・106)、折り返しを伴う口縁部 (107・108) が認められる。接合部には、羽状刺突が1段めぐるもの (109・110) がある。105は摩滅が著しく、接合部の文様は観察できない。107の口縁部には刻みがめぐるが、108の口縁部は無文である。111は小型の鉢であり、口縁部に折り返しを伴う。

壺は出土数が多く、規模や形態の差異も認められる。規模については、123・124のように極小さなものから141・145のような小型壺、さらに、151のような比較的大きなものまである。底部は横ね平底で占められるが、小破片の中に上部底状のものがある。胴部は、下膨れの形状のもので占められる。123・140以外は胴部下半に稜を伴う。頭部は、112・113だけが短頭、その他は細い頸から外反して口縁部に至る。口縁部は、折り返し口縁が最も多いため、比較的大型の壺には複合口縁も多く認められる。小型壺である145だけは単純U縁である。文様については、肩の羽状刺突・結節縦文・口縁部の櫛彫文・網文などが多く認められる。文様が認められない壺も少なくないが、摩滅のために消失した可能性もあり、本来より文様が施されなかった壺がどれほどあったかについては、判断しかねる。以上のようなSD24 (SB18) 出土土器は、一部に古い要素をもつ破片も含まれているが、多くは弥生時代後期後葉～末葉（もしくは古墳時代初頭）の中に位置づけできるものと判断できる。

**SB20・SD23出土土器 (82~85)** ともに出土数は少ない。SB20出土土器には、1段の羽状刺突がめぐる高杯 (83) や折り返しの壺の口縁部 (84) などがあり、弥生時代後期中葉のあたりに位置づけできる可能性が指摘できる。SD23は堅穴住居跡の排水溝である可能性が高い。しかし、出土した縞文の豫された受口状口縁 (85) は、SB20出土土器より占い可能性が指摘できる。

**SB21・22・23出土土器 (190~199)** SB21・22は、岡化できた出土土器が少ない。弥生時代後期の壺の口縁部や壺の底部片があるが、詳細な時期を特定することは難しい。

SB23からは、住居跡と周溝から比較的多くの土器が出土している。壺の口縁部には、折り返し口縁、複合口縁、内湾気味に大きく開く口縁部がある。壺の頭部～胴部が残る198では、頭部下端に横筋状文、その下部に羽状刺突・櫛彫彌字文・波状文が認められる。199は、接合部に粘土帶を巻いて指頭痕をめぐらせた台付壺の台部である。これらは弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけできるものと判断できる。

**SB26~31出土土器 (200~252)** SB26~28においては、周溝から比較的多くの土器が出土している。SB26周溝 (SD33) の出土土器には、頭部下端の櫛刺突文や洞部上半の縞文などがある壺の破片 (243・244)、台付壺の破片 (240・241) が認められる。SB27からは古式土師壺の高杯片 (200) などが出土しており、その周溝 (SD32) からは台付壺や大小の壺の破片が出土している。大型の壺は折り返し口縁を伴うもの (230・231) が多く、肩部の羽状刺突文やU縁部内面の結節縦文が残るもの (234・235) もある。SB28の周溝 (SD31) からは、台付壺や壺の出土が認められる。壺には多段の羽状刺突文を伴う肩部 (216)、円形浮文を伴う端部を内に折り返した複合口縁 (214) などがある。SB27出土土器には古式土師器の出土もあり、菊川様式の土器を含めて概ね弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の中に位置づけることができる。SB26・28出土土器は、弥生時代後期後葉のあたりに位置づけできる特徴が認められる。

SB29~31からの出土土器は少なく、SB30・31出土土器は極小さな破片に限られる。SB29からは台付壺の破片や壺の折り返し口縁、櫛彫横縦文や扇形文のある肩部、羽状刺突文がめぐる高杯の接合部などのほか、不明品 (252) の出土も認められる。ただし、SB29はSB27に切られていることから、SB27に伴

う遺物が混在している可能性がある。總じて、弥生時代後期の中葉以降のものと把握することはできる。

SB33・34・36・38出土土器 (253~257) いずれも出土土器が少なく、小破片に限られる。壺の口縁部 (253) や折り返しを伴う高坏の口縁部 (254) があり、弥生時代後期の土器群である可能性は指摘できるが、それ以上の詳細を特定することは難しい。

SB37出土土器 (275~306) 周溝 (SD43~45) から多くの上層が出土している。SD43からは、台付壺 (275・276) や壺などの出土が認められる。壺には折り返しを伴う口縁部片 (279) と平底の底部片 (280)、棒状刺突文のある胴部片 (277) と柳描文のある胴部片 (278) がある。281については、器形から羅頬の壺ではなく、鉢もしくは碗状を呈する可能性が指摘できる。SD44からは、壺の底部片と頭～胴部片の出土が認められる。底部は平底である。胴部は下膨れの形状を呈するが、肩が張ってやや球形に近い。頭部は直立し、外反して口縁部に至る。頭部下端には横線文がめぐり、その下に貼り付けの円形浮文、肩部には調文が観察できる。円形浮文は、4 方向に5個ずつ配置されている。SD45からは最も多くの土器が出土しており、台付壺・壺・高坏が認められる。台付壺には、口縁部に刻みがめぐるもの (284・287) とめぐらないもの (286) がある。284の肩部には、横方向のハケ調整が認められる。壺には、内透気窓に開く口縁部片、棒状浮文のある複合口縁部片などがある。底部は全て平底である。高坏には、足跡の不明瞭な脚踏部片 (306) と細い接合部片 (305) がある。306は薄川様式の土器であるが、305は古式土器である可能性が指摘できる。

全体的に弥生時代後期中葉以降に位置づけできる土器群であるといえるが、SD45出土土器は後期後葉以降に位置づけでき、古式土器の出土から古墳時代初頭にまで至る可能性も指摘できる。なお、切り合い関係ではSD43が最も古く、SD45が最も新しいと判断できている。

SB39・40・42・43出土土器 (258~274、330~332) SB39・40およびその周溝 (SD47) からは、台付壺・高坏・壺の破片が比較的多く出土している。壺には、短く聞いて刻みがめぐらない厚手の口縁部を伴う破片 (260)、刻みがめぐり、肩に横方向のハケ調整が認められる破片 (262) などがある。台部には短小なもの (265) が混じるほか、接合部に指痕痕がめぐるもの (263) もある。壺には、胴部上半に結節文が観察できる破片 (268)、平底の底部片 (269・270) がある。概ね弥生時代後期後葉～末葉に位置づけることができる。

SB42からは、口縁部に刻みがめぐる壺、折り返しを伴う壺、平底の壺底部などが出でている。弥生時代後期の中葉以降のものと判断できるが、最新段階に至るような特徴は認められない。SB43には壺の底部片と片口の鉢の口縁部片の出土が認められる。出土数が少なく詳細を特定することはできないが、概ね弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づける可能性がある。

SB44出土土器 (307~327) 住居跡の床面上において、多くの土器がまとまって出土している。数個体の台付壺、壺、高坏があるほか、鉢が2個体出土している。

台付壺は、台部によって4個体を確認することができる。308の口縁部は残存状態が悪く、307のように刻みがめぐる可能性も否定できない。肩部に横方向のハケ調整を施すものはない。壺は、刻みのめぐる折り返し口縁部片 (316)、棒状浮文と繩文を伴う受口状口縁部片 (317)、平底の底部片 (318) のほか、頭部以下が残る中型壺 (315) が出土している。315は、細頸・下膨れの胴部を持ち、頭部下端に横線文、頭部上半の広い範囲に繩文が施されている。底部は上げ造状を呈する。

鉢は、口縁部の外側と端面に純文が施されたもの (320) と無文のもの (319) とがある。摩滅の差異の影響もあるが、口縁部と体部との境の継続、ミガキ調整などは320の方が明瞭である。高坏は、口縁部によって5個体を確認することができる。いずれも筒状の坏部を伴い、口縁部と体部との境には、内面に明確な肩折綫を伴う。腹部は、細長い脚柱と大きく眉曲する縫部 (325) を伴うものが主であるが、326だけは台付壺に類似する台部を伴う。口縁部には、折り返しを伴わずに端面下端に刻みがめぐるもの

の（324）と、折り返しを伴って縁面や内面に縞文を施したもの（321・323・325）が認められる。前者の接合部には三角突帯がめぐる。後者の接合部には、無文（325）のものと横縞文（押圧横縞文か）がめぐるもの（323）がある。

以上の土器群は、弥生時代後期前葉に位置づけできる特徴を多くもつ。

SB46周辺・SB47出土土器（334・335・328・329） SB47からは折り返しを伴う壺の口縁部片と胴部片、SB46周辺（SD53）からは壺の底部片と刻みのめぐる壺の口縁部片が出土している。いずれも小破片であり、弥生時代後期の土器である可能性は高いが、詳細な特定は難しい。また、SB46周辺（SD53）出土土器については、SB46には伴わず、SB49～51の周溝から流入してきた遺物である可能性もある。

SB49～51出土土器（333、336～420） 各住居跡および周溝から土器が出土している。出土量は周溝の方が圧倒的に多い。

SB49からは壺の底部片、周溝（SD56）からは高坏・壺・壺の破片が出土している。341は鶴状口縁の高坏であり、折り返した口縫端面に斜格子文、脚部との接合部には脚刺突がめぐる。壺部外面にはミガキ調整が認められるが、上部にはハケ調整が残されている。

SB50の周溝（SD58）からも、各器種の破片が比較的多く出土している。壺は、比較的小型の台付壺で占められており、口縁部には刻みがめぐる。高坏には、文様のない折り返し口縁部片（352）が認められる。口縁部と体部との境には、内面の肩折縫と外縫の輪積み（接合）痕が認められる。壺には、高坏と同様の折り返し口縁部片（353・361）のほかに、受口状の口縁部片（355）がある。肩には三角突帯がめぐるもの（356・357）と羽状刺突文（354）があめぐるものがある。底部は全て平底である。これらの中には、弥生時代後期の中葉以降に位置づけできるもの（354など）と、前葉に位置づけできるもの（356・357など）がある。遺構の切り合いから、SB50はSB49よりも新しい住居跡であることがわかっている。したがって、後期前葉の土器については、SB51によって切られた古い時期の住居跡などから流入したものと判断できる。なお、SD52出土の337～339は、SB49・SB50のいずれかに伴う可能性がある。SD52がどちらの住居跡に属する排水溝であるかは不明であり、土壙の特徴からも特定することは難しい。

SB51からは少數の土器（333）、その周溝（SD59）からは多量の土器（364～420）が出土している。SB51出土の333は口縁部に刻みを伴わない台付壺である。SD59出土の台付壺（363～384）の中には、口縁部に刻みがめぐるものと刻みを伴わないものがある。また、胴部や台部に大小の差があることがわかり、363や376のような明らかな小型品も認められる。365・368の肩には横方向のハケ目が観察できる。374の接合部だけには指頭圧痕がめぐる。

385～415は、SD59出土の壺である。大型品が比較的多いが、397のような小型品もある。口縁部には折り返し口縫が多い。大きく外反して開く385は無文であるのに対して、さほど外反しない386・387には刺突文・斜格子文が施されている。399だけは複合口縫に復元できる。肩部には突帯を伴うものと伴わないものがある。肩部の文様は羽状刺突文が最も多く、それに鶴嘴横縞文・扁形文・円形浮文などが合わせる場合が認められる。ただし、395・396など摩滅が著しいものが多く、全ての文様が観察できたとはいえない。389・390の柄部には、縞文が羽状に施されている。389では頸部の縱方向のミガキ調整、胴部下半のミガキ調整も観察することができる。底部は平底で占められているが、木葉痕が確認できるのは415だけである。

416～420は、SD59出土の高坏である。圓化できたのは脚部のみである。胎土や形状などから、418だけは古墳時代の土師高坏の紐折脚、その他は菊川様式の中に位置づけできる高坏であると判断できる。419・420の接合部には羽状刺突文がめぐる。416・417には認められないが、壓滅のために消失している可能性もある。416・417・420は、細い接合部からやや聞く形状を呈する。416は脚幅まで残存する短めの脚部であり、外縫の不明瞭な段と内縫の肩折縫を介して脚部に至る。

全体的にみると、概ね弥生時代後期中葉～末葉の中に位置づけることができるが、SD58（SB50周溝）には古い時期（弥生時代後期前集）、SD59には新しい時期（古墳時代）の遺物も混在している。前者は、より古い住居跡（SB48）などからの流入・混在が考えられるが、後者についての具体的な流入過程は特定し難い。SD59上層から山茶碗（947）も出土していることから、長期に渡ってSD59の場所が墳塚になっていたと推測することができる。SB49～51の先後関係については、遺構の切り合いからSB49が最も古く、SB51が最も新しいことがわかっている。弥生時代後期中葉～末葉の中で建て替え・拡張しながら營まれたと把握することができる。

SB52～56、62・64出土土器（421～450） SB52・53・56・62・64は、出土土器が少ない。SB52出土土器には櫛刺突がめぐる壺の唇部片、SB56出土土器には三角突帯を伴う壺の肩部片、SB62・64出土土器には棒状浮文が配置された壺の複合口縁が認められる。SB52出土土器は弥生時代後期中葉以降、SB56出土土器は弥生時代後期前葉頃、SB62・64出土土器は後期中葉前後に位置づけることができるが、住居跡の時期を示すとは限らない。SB55は、これらより多くの土器が出土しており、壺・壺・高坏を確認することができる。しかし、いずれも小破片に限られており、出土土器のみから住居跡の時期を詳細に特定することは難しい。

SB54およびその海溝（SD73・74）からは、やや多くの土器が出土している。SB54（住居跡）の出土土器は小破片に限られる。台付壺の胴部や台部のほか、平底の底部片、壺面と内面に繩文が施された折り返し口縁といった壺の破片が認められる。周溝の出土土器には、いくつか残存の良い個体が存在する。423は、口縁部と調節部中位に欠損のある壺である。頸部下端に押圧横線文、その下には羽状刺突文がある。胴部最大径が下寄りにあり、明確な腹を伴う。436は、錐状口縁の高环の坏部である。口縁部には折り返しを伴うが、刻みなどの文様は認められない。接合部に櫛刺突がめぐることがわかる。これらは、概ね弥生時代後期中葉～後葉に位置づけることができる。

SB67・68（451～472） SB67は焼失した住居跡であり、比較的まとまった土器の出土があった。台付壺（451～457）は、全ての口縁部に刻みがめぐる。肩部外面に横方向のハケ彫刻は認められない。454の胴部下寄りに横方向のハケ調整を観察することができる。接合部は比較的細く、粘土帶などの補強も認められない。壺（458～467・471）は、大きく開いて折り返しを伴う口縁部、細い頸部と下膨れの胴部をもつものが多い。底部には平底と上底状のものがある。460・461の胴部上半には繩文が施されている。なお、469は上記したような壺ではなく、碗形を呈する可能性があるが、特定はできない。470は錐状口縁の高环片である。以上の土器群は、概ね弥生時代後期前葉に位置づけることができる。

SB68からの出土遺物は少なく、図化できたものは底部片だけである。

SB71～76・81出土土器（473～489） これらの住居跡からの出土土器は、決して多くはない。SB71からは三角突帯がめぐる壺の肩部片（475）、SB81からは上げ底状の壺の底部片（489）の出上が認められ、弥生時代後期前葉に位置づける可能性がある。SB72出土の高坏（480）などは後期中葉に下る可能性もあるが、積極的に後期後葉以降に位置づける出土土器はない。

SB82出土土器（490～502） 住居跡の周溝から、比較的多くの土器が出土している。台付壺には刻みのない口縁部（491）などの破片、高环には羽状刺突文がめぐる接合部片（494・495）がある。壺は、受け口状の口縁部、太めで直立せずに内傾する頸部、平底の底部などが認められる。文様には、口縁部外面の斜格子文や肩部の羽状刺突文が認められる。490は、壺と同様の腮部から屈折を介して短い口縁部に至る破片である。各種の特徴から、弥生時代後期中葉～後葉に位置づけることができる。

SD88・97・99、SB88・89出土土器（503～515） SD88（住居の周溝）やSB88の周溝（SD93）からは、台付壺などの小破片が出土している（503～508）。SD97・99（住居の周溝）からは、羽状刺突文や赤彩のある壺の胴部片（511・512）、内傾する短い頸部と内湾して開く口縁部の壺の破片（510）なども認めら

れる。絶じて弥生時代後期後葉～末葉のものと把握できるが、少ない出土遺物から遺構ごとの時期を詳細に特定することは難しい。

SB89の周溝（SD100）からは、上記の遺構より多くの土器が出土している。台付壺（513）と肩部に輪節繩文が施された壺（514・515）が認められる。壺の口縁部には、受口状の複合口縁（514）と外反して開く折り返し口縁（515）がある。以上のような壺の特徴などから、弥生時代後期末葉のあたりに位置づけることができる。なお、遺構の切り合い関係においては、SB89（SD100）がSD97・99より新しいと把握できる。

SB95・96、99～102、104、165出土土器（516～534）いずれも遺物の出土量が少なく、SB165以外の出土土器は小破片に限られる。刻みのめぐる壺の口縁部（519）、壺や高环の折り返し口縁部（520・526・527）、平底の壺の底部（518・522～525）などが認められる。いずれも弥生時代後期の中に位置づけできることはわかるが、これらから各遺構の時期の詳細を特定することは難しい。

SBI65の周溝（SD115）からは、壺・壺の小破片のほかに小型壺（530・531）の出土が認められる。直立する壺の頸部（532）や上げ底状の壺の底部（534）の出土もある。弥生時代後期中葉のあたりに位置づけたいが、周溝からの少数の出土であり、確実に住居に伴うとはいえない難い。なお、遺構の切り合いからSBI65はSB110より古いことが把握できている。

**SB110出土土器（535～628）** 幾重にも切り合う各周溝（SD116～SD120）から、多くの土器が出土している。なお、切り合い関係からSD116→SD117→SD118→SD119→SD120という変遷が認められている。

SD116の出土土器（536～547）には、台付壺の台部片の他に壺や高环の破片も認められる。高环には、羽状刺突文がめぐる接合部、外面の弱い段と内面の屈折線を伴う脚根部が認められる。壺には、内傾する頸部や羽状刺突がめぐる肩部、平底の底部が認められる。概ね弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけることができる。541は古式土器の高环であり、より新しい遺構からの混在と判断したい。

SD117の出土土器（548～566）にも、各種の破片が認められる。台付壺には、端面に刻みがめぐる短い口縁部をもつ小型壺（548）のほか、低い台部片（556）や厚く粘土を巻いた接合部片（551）などもある。高环には、羽状刺突文がめぐる接合部片（558）や、折り返し口縁を伴う深めの外部片（556）などがある。壺には、折り返しを伴う口縁部片（563）や下垂形の脚根部片（560・561・564）、平底の底部片（562・565・566）などがある。560・561は小型の壺であるが、SD115（SB165）出土の530・531とは異なって継長の器形を呈する。564には文様が観察できないが、摩滅のために消失している可能性がある。ただし、突帯や貼り付け文は本来よりなかった可能性が高い。これらは、概ね弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけることができる。

SD119の出土土器（567～578）には、口縁部に刻みが認められない台付壺（567・568）や平底の壺などが認められる。572は小型の壺であり、経長の算縫玉に近い形状を呈する。573は、内済気味に大きく開く口縁部、非常に短い頸部を伴う壺であり、肩部や口縁部内面に結節繩文が施されている。574の肩部には多段の羽状刺突文がめぐる。主に台付壺と573・574の特徴から、概ね弥生時代後期後葉～末葉の中に位置づけることができる。

SD120の出土土器（579～628）には、他よりも多くの台付壺や壺の破片、高环片がある。台付壺には接合部片が多く、厚く粘土を巻いたものも少なくない（579・581・588・590）。599は他の多く（592など）と異なっており、刻みのない短い口縁部をもち、器壁はやや厚い。高环には、羽状刺突文がめぐる接合部（601）や外面の段と内面の屈折線を伴う脚根（604）といった菊川様式の破片がある一方、細い接合部から柄へと大きく開き、円形の透孔が認められる古式土器の高环片（602・603）も認められる。

壺（605～628）には、他に比べて良好に残存するものが多い。ただし、全体を復元できるものはなく、摩滅が著しい場合が多い。口縁部には厚い折り返し口縁部（605）、薄い折り返し口縁部（606・607）、棒

状浮文を伴う受け口状口縁（609）、複合口縁（608・610・611）がある。厚い折り返し口縁（605）には、壺面の刻みと内面の結節縞文・円形浮文が観察できる。薄い折り返し口縁部の606・607は細い頸部を伴うが、複合口縁の610・611の頸部は比較的太い。607・610の肩には突起だけが認められたが、刺突文などの文様が摩滅によって消失している可能性がある。612の肩には結節縞文、613や小型壺の614には撃刺突文がめぐる。頸部は下膨れ形、底部は横ね平底で占められている。以上のようなSD120出土土器は、概ね弥生時代後期末葉の前後に位置づけることができる。上げ底状の底部片（617）など古い時期のものについては、重複する別の遺構から流入した可能性も考慮する必要がある。

SB113～116出土土器（629～640）いずれの住居跡も、決して多くの土器が出土しているわけではない。壺や台付壺の小破片の出土で占められており、出土遺物のみから各遺構の時期の詳細を特定することは難しい。ただし、壺の底部が全て平底であることなどから、総じて弥生時代後期中葉以降のもので占められていると推測することはできる。さらに、SB113出土土器については、刻みがめぐる短頸壺の折り返し口縁部や刻みがめぐる壺の口縁部があり、弥生時代後期の菊川様式の中で位置づけることができる。その一方で、SB115の出土土器は、円形透しがめぐる円錐形の高环の脚部（638）などといった古式土器型が主体となり、古墳時代前期のものとして把握することができる。

SB118・120出土土器（641～658）SB118からは、残存が比較的良好な高环（643）と壺（644）が出土している。高环（643）は、口縁部から脚部の肩折部までが残存する。口縁部は折り返しを伴う鈍口状口縁であり、内面に縞文、折り返しの下面には刻みがめぐる。口縁部内面の段は明瞭である。接合部には三角突帯がめぐり、撃刺突文が施されている。肩部のミガキ調整、脚部のミガキ調整とハケ調整の残存などが良好に観察できる。壺（644）は、外反して開く口縁部の下半と細長く直立する頸部、頸で肩で下膨れ形の胴部が残存する。内面では底部付近のハケ調整、外面では胴部上半に広く羽状に施された縞文、肩部にめぐる円形浮文、胴部下半に施された横方向のミガキ調整を認めることができる。円形浮文について、摩滅のために配置などの確定はできないが、等間隔に全周していた可能性が高い。これらは、弥生時代後期前葉～中葉に位置づけることができる。

SB118に隣接するSB120からも、比較的多くの土器が出土している。646～650は台付壺であり、口縁部は刻みのない「く」字の口縁が主体となる。648の口縁部は端部が内湾、端面が内傾する。刻みがめぐる649の口縁部も、壺部が内湾する。647・648は、口縁部から明瞭な肩折を介して肩の張る胴部に至る。胴部には横方向に近いハケ調整が行われている。651は小型器台の脚柱部、652は菊川様式の高环の脚部である。壺（653～656）には、平底の底部片以外に脚部付近の破片（653）がある。結節縞文がめぐる肩部から、なだらかに内傾する頸部につながる。口縁部とは肩折を介しており、外反する口縁部に至るものと復元できる。657は小型の鉢である。弥生時代後期の鉢のような口縁部に至る肩折ではなく、全体に丸い形状を呈している。これらSB120出土土器の多くは、古墳時代前期に位置づけできる古式土器型である。653は菊川様式の中でも最新段階のものであり、同様の時期に併行するものとして把握できる。一方、652は明らかに古い時期の土器片であり、他の遺構からの流入などを考慮する必要がある。

SB122・126・128～130出土土器（659～674）いずれの住居跡も、土器の出土量は少ない。SB122出土土器には、球形に近い腹部などの台付壺（659～661）、肩の結節縞文（無筋）と下部の赤彩が観察できる胴部（662）や平底の底部（663）といった壺の破片が認められる。SB126およびSD124（周溝）出土土器には、刻みがめぐる壺の折り返し口縁（664）、平底の底部（666）、高环の脚柱部（665）がある。高环の脚柱部（665）は、本遺跡周辺地域の上墻様式ではないものである。SB128出土土器には台付壺の台部（667）、SB129出土土器には小型高环か器台の接合部（669）、端面や内面に結節縞文（無筋）を施した壺の口縁部（670）などが認められる。いずれにおいても、菊川様式の最新段階のものや古式土器型が含まれていることから、概ね古墳時代前期に位置づけることができる。

SB133、136～138、140・141出土土器(675～683) これらの住居跡においても土器の出土量は少なく、小破片に限られる。刻みがめぐる壺の口縁部片(675)や折り返しを伴う壺の口縁部(677・679・680)がある。いずれも弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけできるものであるが、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。

SB144～146、150出土土器(684～688) これらの住居跡も土器の出土量は少なく、小破片に限られる。SB144出土の壺の口縁部片(684)は、非常に短い内湾気味の口縁部であり、腹部から明瞭な屈折を介して開き、刻みはめぐらない。SB146出土の高环の脚部(687)は、縦い接合部から開きながら縫部に至る。以上は古墳時代前期の古式土壺器に該当するものである。SB150出土の壺の脚部(688)は、結節繩文が観察でき、菊川様式の最新段階に該当する可能性もある。SB145からは刻みのある壺の口縁部片(685)などが出土しており、弥生時代後期の中に位置づける可能性が高い。しかし、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。

SB155・156・158・159・163・164出土土器(689～699) これらの住居跡も土器の出土量は少なく、小破片に限られる。SB156からは刻みがめぐる壺の口縁部(690)や内面に縄文が観察できる壺の折り返し口縁(691)、多段の羽状刺突文がめぐる壺の脚部(692)などが出土している。壺の折り返し口縁はSB163出土土器にも、羽状刺突文がめぐる壺の脚部はSB164出土土器にもある。これらは概ね弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけることができる。しかし、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。切り合う住居跡からの流入なども考慮する必要がある。

## (2) 据立柱建物跡出土土器

全部で190点を数える据立柱建物跡の内、50個近くの建物跡の柱穴から、図化できる土器の出土があった。第1分冊の第4章第3節にて、建物規模や桁行の間数から建物跡を分類している。図化できた土器の出土率は大型建物跡に該当する3A・2Aが高いが、出土数は桁行2間の中型建物跡(2B・2C)が最も多い。

この出土土器には、柱の裏込め土に混在したものと柱痕等の中に流入したものがあると想定することができる。遺構の状態を考慮する限りにおいては、多くは前者に該当すると推測できる。また、柱穴規模が最大クラスのI(第1分冊第4章第3節を参照)の建物跡では、6割以上に図化できる土器の出土があり、IIでは4割弱、IIIでは2割、IV・Vでは1割以下となる。土器片出土が柱穴全体の大きさに左右されることから、柱底に土器片が流入する場合の方が少ないと判断できる。以上から、これら土器の多くは出土した建物跡よりも古い時期のものであると推察することができる。

図化した出土土器(700～753)には壺と壺が多く、高环は3点のみ(703・715・720)である。壺は台付壺で占められ、口縁部には折り返し口縁(710)や刻みがめぐる口縁(752)もあるが、刻みのない口縁部が比較的多い(731・746・748・750)。刻みのない口縁部は桁行2間の中型建物跡(2B)と布壺器のSH111からの出土である。高环は、刻突文がめぐる接合部片(703・720)と刻みがめぐる折り返し口縁部片(715)があり、大型(2A・3A)の建物跡とSH66から出土している。

壺の口縁部には、広口・短頸の713・730や内湾しながら開く単純口縁の721の他に、外反しながら開く折り返し口縁が多い(704・706・727・735・736・742・747・749など)。折り返しを伴う口縁部の中には、内面に縄文や結節繩文、端面に縄文や横刺突などがあるものがある。壺の底部は全て平底である。文様のある壺の胴部片は、肩に横線文と羽状刺突がめぐる711だけである。これら壺の多くは、桁行2間の中型建物跡(2B・C)からの出土である。

SB133、136～138、140・141出土土器(675～683) これらの住居跡においても土器の出土量は少なく、小破片に限られる。刻みがめぐる壺の口縁部片(675)や折り返しを伴う壺の口縁部(677・679・680)がある。いずれも弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけできるものであるが、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。

SB144～146、150出土土器(684～688) これらの住居跡も土器の出土量は少なく、小破片に限られる。SB144出土の壺の口縁部片(684)は、非常に短い内湾気味の口縁部であり、腹部から明瞭な屈折を介して開き、刻みはめぐらない。SB146出土の高环の脚部(687)は、縦い接合部から開きながら縫部に至る。以上は古墳時代前期の古式土壺器に該当するものである。SB150出土の壺の脚部(688)は、結節繩文が観察でき、菊川様式の最新段階に該当する可能性もある。SB145からは刻みのある壺の口縁部片(685)などが出土しており、弥生時代後期の中に位置づける可能性が高い。しかし、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。

SB155・156・158・159・163・164出土土器(689～699) これらの住居跡も土器の出土量は少なく、小破片に限られる。SB156からは刻みがめぐる壺の口縁部(690)や内面に縄文が観察できる壺の折り返し口縁(691)、多段の羽状刺突文がめぐる壺の脚部(692)などが出土している。壺の折り返し口縁はSB163出土土器にも、羽状刺突文がめぐる壺の脚部はSB164出土土器にもある。これらは概ね弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけることができる。しかし、少ない遺物から住居跡ごとの時期の詳細を特定することは難しい。切り合う住居跡からの流入なども考慮する必要がある。

## (2) 据立柱建物跡出土土器

全部で190点を数える据立柱建物跡の内、50個近くの建物跡の柱穴から、図化できる土器の出土があった。第1分冊の第4章第3節にて、建物規模や桁行の間数から建物跡を分類している。図化できた土器の出土率は大型建物跡に該当する3A・2Aが高いが、出土数は桁行2間の中型建物跡(2B・2C)が最も多い。

この出土土器には、柱の裏込め土に混在したものと柱痕等の中に流入したものがあると想定することができる。遺構の状態を考慮する限りにおいては、多くは前者に該当すると推測できる。また、柱穴規模が最大クラスのI(第1分冊第4章第3節を参照)の建物跡では、6割以上に図化できる土器の出土があり、IIでは4割弱、IIIでは2割、IV・Vでは1割以下となる。土器片出土が柱穴全体の大きさに左右されることから、柱底に土器片が流入する場合の方が少ないと判断できる。以上から、これら土器の多くは出土した建物跡よりも古い時期のものであると推察することができる。

図化した出土土器(700～753)には壺と壺が多く、高环は3点のみ(703・715・720)である。壺は台付壺で占められ、口縁部には折り返し口縁(710)や刻みがめぐる口縁(752)もあるが、刻みのない口縁部が比較的多い(731・746・748・750)。刻みのない口縁部は桁行2間の中型建物跡(2B)と布壺器のSH111からの出土である。高环は、刻突文がめぐる接合部片(703・720)と刻みがめぐる折り返し口縁部片(715)があり、大型(2A・3A)の建物跡とSH66から出土している。

壺の口縁部には、広口・短頸の713・730や内湾しながら開く単輪口縁の721の他に、外反しながら開く折り返し口縁が多い(704・706・727・735・736・742・747・749など)。折り返しを伴う口縁部の中には、内面に縄文や結節繩文、端面に縄文や横刺突などがあるものがある。壺の底部は全て平底である。文様のある壺の胴部片は、肩に横線文と羽状刺突がめぐる711だけである。これら壺の多くは、桁行2間の中型建物跡(2B・C)からの出土である。

### (3) 土坑・不明遺構出土土器

SF21出土土器（754～779）上坑から出土した土器群であり、出土状況から一括りが高いと判断できる。台付壺は、口縁部には押引刷突文がめぐるもの（754）と無文の「く」字口縁（756・757）とがあり、肩部は球形に近く（755・756など）、台部は低い傾向（759・760・762など）にある。766～769は小型の高杯や壺台の脚部片であり、細い接合部から縁へと広がる形状を呈し、円形の透孔をもつもの（766・767）もある。その一方で、770は菊川様式の特徴をもつ高杯の鋸状口縁の可能性が高い。壺は、肩部が球形のもので占められている。口縁部には、梅状浮文のある受口状の複合口縁（771）や内面に結節繩文のある折り返し口縁（772）が認められる。773の肩には結節繩文、口縁部内面には赤彩が認められる。以上は、古式土器壺と菊川様式の最新段階に位置付けができるものとがあり、総じて古墳時代前期前半に位置づけることができる。

SF07・08・12・17・19出土土器（780～785）各土坑から少數の土器片が出土している。図化できたものは全て壺であり、底部は平底で占められる。肩部の文様は観察できないが、781については摩滅のために消失した可能性もある。少なくとも、突帯はめぐらない。壺形の特徴から、總じて弥生時代後期後葉以降のもので占められると判断することができる。

SF22出土土器（786～796）小破片で占められるが、比較的多く出土している。壺には、「く」字状の無文の口縁部片（786）とS字状に復元できる口縁部片（788）などがある。壺には、折り返し口縁（792）や刺突がめぐる肩部片（793）などがある。792の折り返し口縁は、SF21出土の772と同様に折り返し部が下垂する。これらは、概ね古墳時代前期に位置づけることができる。

SX03～06、09～11出土土器（797～810）SX03からは縱長の算盤玉形を呈する壺の肩部（797）、SX04からは細い接合部から大きく開く小型高杯か壺台の脚部片（798）、SX06からは壺の底部～肩部（805）が出土している。805は摩滅・劣化が著しく、文様などは全く観察できない。図化した形状についても、変形したものと示している可能性がある。SX09～11からは、台付壺の接合部や壺の底部（806・810）、折り返し口縁（809）などの小破片が出土している。798は古式土器壺であり、古墳時代前期に位置づけることができる。797については、特徴の近い土器がSB110の周溝から出土しており（561・572）、弥生時代後期末葉のあたりに位置づける可能性がある。その他については、時期の詳細を特定することは難しい。

SX05からは、比較的多くの土器片が出土している。799はS字状口縁の壺の破片である。肩の横ハケは施されない可能性が高いが、摩滅が著しく消失している可能性もないとはいえない。粘土帶を巻いて指頭痕をめぐらせた台付壺の接合部（800）、低く大きく開いた台部（801）などもあるが、明らかに菊川様式に該当するという破片はない。古墳時代前期の土器群として位置づけることができる。

### (4) 周溝墓出土土器

SZ01出土土器（811～847）周溝から多くの土器が出土しており、残存の比較的良好ものが含まれている。台付壺・鉢・壺の各種が認められるが、図化できたものには壺と台付壺が多い。図化できた土器のうち、明確に高杯であるといえるものはない。

台付壺は、口縁部に刻みのめぐらないものが多い（811～813）。814の口縁部には刻みがめぐるが、疎である。813は口縁部と肩部とで外面ハケ調査の方向が異なり、両者間の彫曲はやや鋭い。その一方で、811・812・814の足部は鈍く、外面ハケ調査における口縁部と肩部との差異も明確でない。台部には比較的高いもの（817）と低いもの（816・818）とがあり、接合部に粘土を厚く巻いて指頭痕をめぐらせたもの（819・822）も認められる。823・824は、折り返し口縁を伴う大型の鉢である。体部のつくりは壺の肩部下半と共通する。823の口縁部は屈曲して開き、広口の短頸壺に類似する。824の口縁部には片口

を伴う。822は高杯の脚部の可能性があるが、摩滅などのために判断し難い。

壺は、平底の底部と下膨れ形の肩部のもので概ね占められるが、大・中・小の違いがある。口縁部は、大型品には折り返し口縁（825）と複合口縁（827・833）、小型品には内湾気味に聞く單純口縁（834）が認められる。口縁部の文様が観察できるものはない。肩部については、大・中型品には羽状刺突文がめぐるものが多く（828・830・832・833）、そこに段・押圧横線文・結節罫文などが伴う場合（828・830・832）がある。小型品には結節罫文が施されたもの（834）がある。826・831などは摩滅が著しいために文様が消失している可能性があるが、829・835などは本來より文様のなかった可能性がある。胴部最大径付近には横方向の磨き調整が観察できるものが多いが、中位以上にはハケ調整が残るもの（831・832・835・837）がある。

以上のような台付甕・鉢・壺の諸特徴から、SZ01出土土器は概ね弥生時代後期末葉のあたりに位置づけることができる。

SZ02出土土器（848～855） SZ01に比べると遺物量は少なく、出土土器の残存も悪い。台付甕の低い台部、非常に低く脛部に至る穂が不明瞭な高杯の脚部、押圧横線文と刺突がめぐる壺の肩部や罫文と折り返しを伴う口縁部などが認められる。これらの諸特徴から、概ね弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の中に位置づけることができる。なお、遺構の切り合い関係においては、SZ02はSZ01よりも新しいことがわかっている。

#### （5）遺構外出土土器

表土除去や流土削除の際にも多くの弥生土器や古式土師器の破片が出土しており、伴う遺構が特定できないものも少なくない。その中で、図化できたものは856～933である。残存の良いものではなく、多くは小破片である。いずれの特徴も、遺構出土土器の中で示すことのできるものであり、871・925のように弥生時代後期前葉に位置づけできるものから、861・886・931・932・933のような古式土師器までがある。古式土師器は調査区東部からの出土が多い傾向にある。

### 3. その他の土器

表土・流土や遺構の覆土の上層からは、古墳時代後期以降の土器の出土も認められた。934～936は古代の土師器である。いずれにも赤彩が認められるが、934・935は褐色で砂粒の多い粗い胎土であるのに対して、936の胎土は白く細かい。須恵器には环蓋（937）、环身（940）、甕（938・939）の破片がある。环蓋は古墳時代終末期、环身は奈良時代のものと判断できる。

941・943・944は灰釉陶器であり、胎土などは滑ヶ谷産のものに類似している。これらについては、概ね11世紀代の中に位置づけることができる。942・945・949は、東邊江（金谷）産のものに類似した胎土・色調をもつ山茶碗であり、概ね12世紀前半のあたりに位置づけることができる。947・950も12世紀前半のあたりに位置づけできる山茶碗であるが、胎土などは渥美・湖西産のものに類似する。951～955は、調査区西部の搅乱からまとまって出土したかわらけである。いずれも外反する体部と糸切痕が残る底部を伴う。（註2）

## 第2節 石 器

### (1) 石 鑓

石鑓は、半分以上が残るものを図に掲載した。全て打製の石鑓であり、未製品を合わせて54点ある。図は、横ね基部の抉りが深いものから頗り並んでいる。抉りの深いもの(956など)は鎌身長の3割程になるが、0割(抉りのないもの)まで様々であり、抉りの度合に密度があるわけでもない。大半は、四基無茎に分類されるものである。平基として把握できるのは、抉りが鎌身長の1割以下となる990~999のあたりとなる。1000は凸基無茎、1001は有茎の石鑓である。1006~1009は凹基無茎もしくは平基の未成品であるが、980~999の中にも製作途中のものが含まれている可能性がある。

**四基無茎・平基** 同じ四基無茎や平基の石鑓であっても、長:幅の比率や側縁のラインにおいて様々なものがある。長さと幅の比率においては、横ね1:1に近いもの(956・968・970・980・985など)から、長さが幅の1.5倍以上になる細長いもの(963・965・976・978・979・992など)まである。側縁ラインにおいては、直線的なもの(957・958・965・976など)から大きく膨らむ(ふくらの張る)もの(969・979・980など)まであり、さらに、弧状に凹むものも少數ある(975・977)。なお、962・972・978・986・987・989などは先端部付近の側縁が弱く抉れしており、先端が強調されている。

大きさについては、幅0.9cm程度のものから幅が2cmを超えるものまであり、形態に間わらずに様々である。石材は、凝灰岩・シルト岩・黒雲石が多く、頁岩・瑪瑙・安山岩などが数点ずつある。形態や大きさとの明確な相関関係はないが、傾向として、短めで大きめのものには凝灰岩や頁岩が多く、細長いものには黒雲石やシルト岩が多いことが指摘できる。なお、未製品とした1006~1009の石材は、凝灰岩とシルト岩である。加工は両面に細かい調整を施しているものが主体となるが、二次調整が側縁加工のみになるもの(979・996・997・999・1005など)もある。また、大型品を中心に二次調整の粗いものがある一方、細長いものを中心にして精緻な二次調整を施したもの(965・966など)もある。

**凸基無茎・有茎** 1000は凸基無茎の石鑓である。シルト岩製の小型品であり、側縁が直線的な短めの形態を呈する。先端付近の側縁が弱く抉られしており、先端が強調されている。1001は有茎の石鑓であり、石材は凝灰岩である。鎌身部は細長く、五角形に近い形状を呈する。左右の側縁中央に突出部があり、側縁は上下に別れてそれぞれ弱く抉れている。基部も弱く抉れる。この有茎石鑓については、形態的特徴から縄文時代の石鑓ではなく、弥生時代後期の打製石鑓である可能性も指摘できる。

**出土位置と時期** 石鑓の出土位置は、大半が調査区西部にあり、遺構内外の堆積土中や住居跡の床面構築土から出土している。とくに調査区南西隅部に集中しているが、調査区西部の西縁~南縁には落し穴などの縄文時代の遺構(SP01~18)が分布しており、その範囲に石鑓出土の集中が認め重なると把握することができる。すなわち、石鑓の多くについては、縄文時代の落し穴などに隠されている可能性が指摘できる。なお、縄文土器片が多く出土したSB60付近においては、石鑓の出土が少なかった。居住と狩猟などの場の違いが影響している可能性が考慮される(第7章、第316図)。

そうした一方で、弥生時代後期の集落に伴う打製石鑓が含まれている点も指摘することができる。有茎の1001については、先述のとおり弥生時代の石鑓である可能性が指摘できるが、石鑓集中範囲から離れた場所で出土しており、出土位置においても縄文時代の石鑓群とは異なることがわかる。958・965・984・986・988・1000・1002・1009も、縄文時代の遺構や石鑓の集中範囲から外れた場所で出土しており、これらに弥生時代の石鑓が含まれている可能性はある。965・1002については、975・976などとともに整った長三角形の形態が特徴的であり、他の多くとは異質である。その内の3点は黒雲石製、1点は瑪瑙・玉髓製である。

## (2) その他の石器

石錐・石匙・スクレイバー・複形石器・石核 1010はシルト岩製の石錐、1011は蝶形石匙、1012～1014は横形石匙である。1011と1014はシルト岩製、1012は頁岩製、1013は砂岩製である。1014の刃には強い磨耗痕がみられる。1015～1018は、削器や搔器といった様々なスクレイバーである。これらにも、頁岩・砂岩・シルト岩が用いられている。1019は、緑色の凝灰岩製の複形石器である。1020は頁岩の石核であるが、縁辺に細かい剥離が連続しており、二次調整もしくは使用による痕跡の可能性が指摘できる。

これらの出土は調査区西部に多く、中央部出土は1012（石匙）、東部出土は1020（石核）だけである。遺構内外の堆積土中や住居跡の床構築土からの出土である。調査区西部においては、西寄りに比較的多いものの、石錐の集中範囲との重なりは浅い。

石斧・円盤形石器・石錐 1021・1022は、ホルンフェルス製の打製石斧である。1021は完形であるが、1022は基部が欠損しており、刃部には顯著な磨耗が観察できる。1023・1025は側平面刃石斧、1024は蝶形の石器であるが、いずれも凝灰岩の磨製石器である。1023の刃は中央で84°、両側で83°である。1024の刃は62°である。1026・1027は凝灰岩製であり、大型磨製石斧の基部の可能性が高い。1028は砂岩製の周囲に剥離のある円盤形の石器、1029～1032は、楕円形の薄い小蝶の両端に打ち欠きのある石錐である。

円盤形石器は調査区南西隅部からの出土である。石斧の出土は調査区西部にかたよるもの、必ずしも石錐集中範囲内とは限らない。むしろ、調査区西部の中央やSB53・55といった、集中範囲外の石器出土との重なりが目立つ。磨製石斧だけではなく打製石斧についても、弥生時代後期の集落との関連を含めて考慮する必要がある。石錐の出土は、明らかに石錐の出土傾向と異なる。形態的には縄文時代の石錐の特徴を伴うが、弥生時代のものであっても問題ないと考える。いずれにおいても、遺構内外の堆積土中や住居跡の床構築土からの出土である。

敲石・磨石・砥石・石皿・台石 1033～1040は端部に敲打痕のある敲石である。1036は閃綠岩、その他は砂岩の礫である。1033・1035は球形に近いが、多くは細長い形状を呈する。敲打痕は、両端に認められるものが多く、加えて側面にも認められるものがある。1038と1040は、両端と側面2方向の計4ヶ所に敲打痕がある。1039・1036の敲打痕は、凹みが比較的浅い。トチの実などの比較的やわらかいものを対象とした可能性が指摘できる（註3）。1034・1040には彼然が認められる。

1041は、緑色片岩礫を用いた敲石である。端部は欠損、側面に敲打痕が認められる。全体的に磨耗が顕著である。着装による磨耗である可能性、大型の磨製石斧の転用である可能性が考慮される。1042は、凝灰岩の敲石である。大型の磨製石斧を転用した可能性があり、折れた断面には磨耗が認められる。

1043～1054は、磨石・砥石・石皿・台石の類である。1043・1044（ともに磨石）は凝灰岩、他は砂岩である。古墳時代前期の土坑（SP21）から出土した1048は、三方の側面に研磨が認められ、比較的整った方台形を呈している。その他は不整形なものが多い。磨面は、非常に滑らかで光沢を帯びたもの（1046など）や、深く凹んだもの（1050・1051など）がある一方、磨耗のわざかなもの（1052）もある。1047には、断面V字の溝が認められる。工具などの刃の研磨によるものとは観察できない。より小型の砥石などをつくるため、石材を分割しようとした可能性なども考慮される（註4）。

敲石・磨石・砥石・石皿・台石の出土位置は、石錐のようなかたよりや集中ではなく、調査区全体に対して分散している。他の種類の石器に比べると、住居跡の周囲内に検出された遺物群中からの出土や、床面直上からの出土（1039・1044・1049・1051・1052）が多い。敲石については、SD59やSD117といった比較的大きな住居跡の周囲からの出土が多い。砥石・石皿などは、調査区西部では住居跡の周囲と調査区中央付近、調査区中央～東部では窓穴住居跡からの出土が多い。なお、1045と1046は出土位置が比較的近いことから、組み合わさる可能性が指摘できる。

## 第3節 玉類など

### (1) 玉類

1055は、SB113の覆土中から出土した鉄石英の管玉である。径0.3cm弱と細く、濃い赤褐色を呈する。片側の端部が欠損している。1056～1060はガラス小玉であり、1056は埴物跡の柱穴中から、1057・1058・1060は各住居跡の床面上から、1059は住居跡覆土中から出土している。1056だけが濃青色であり、その他は水色を呈する。いずれも丸味が強く、形態の歪みが認められる。

### (2) ガラス質の滓

不透明なガラス質の小さな塊が、少數出土している。これらは基本的に土が高温によって変化したものであり、ガラス製品の製作によるものとは限らない。

形状は、球形に近いもの（1064・1065）や針状のもの（1066）もあるが、基本的には不整形であり、形態に意図はないものと把握できる。色調は、明るい緑色を呈するもの（1062・1064・1066）と黒に近い青緑色を呈するもの（1061・1063・1065）とがある。いずれも不純物（土砂）を多く含み、1061などは縮状になっている。気泡は、黒に近い青緑色を呈するものの方に多く認められる。

これらは、周溝墓や住居跡の周溝などから出土している。1064は住居の床構築土中からの出土である。まとまった出土や分布のかたよりは認められない。

### (3) 骨片

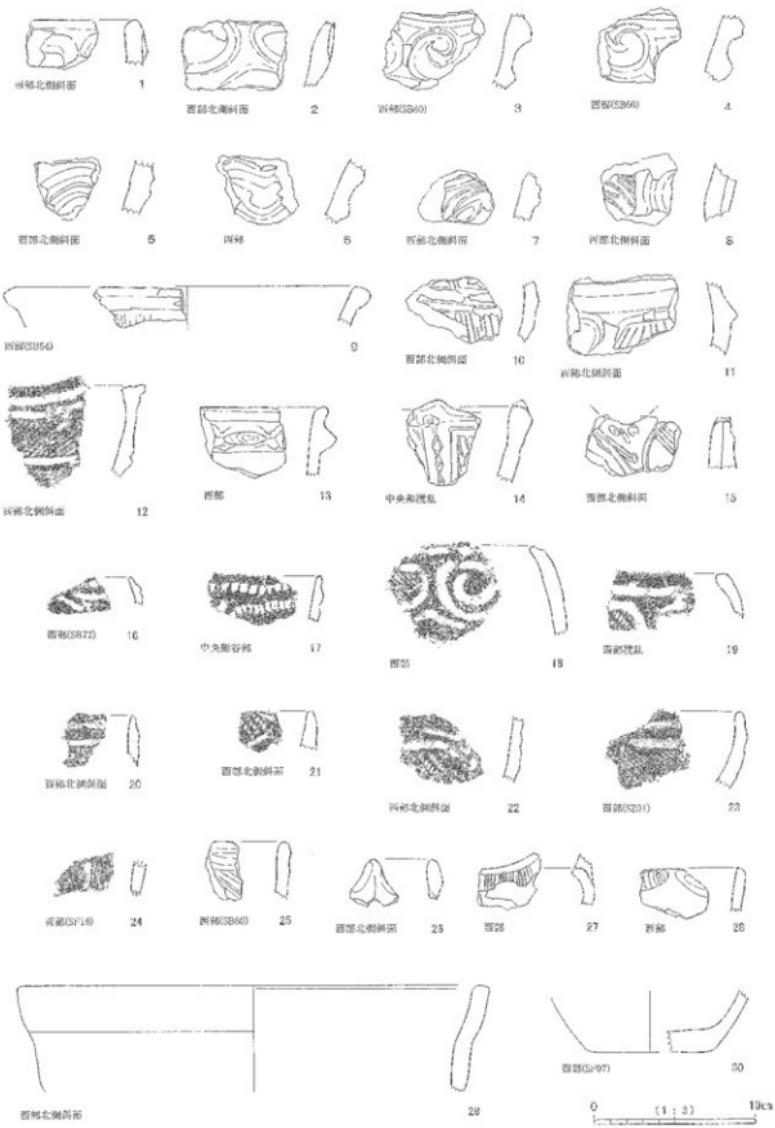
各種遺構から骨片が出土しているが、極小さな破片や粉状のものばかりであり、何の骨か鑑定できる状態のものはない。

#### 註

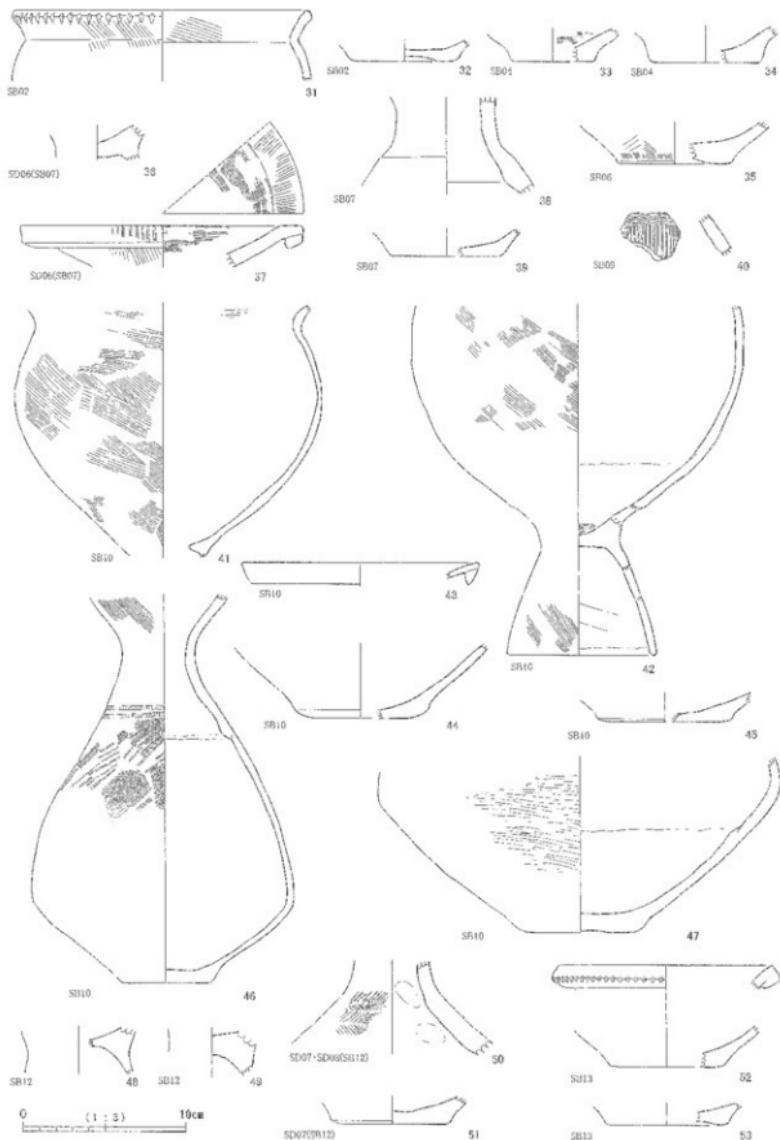
- 1 戸田哲也氏（玉川文化財研究所）より簡文上器にかかる御教示をいただいた。
- 2 松井一明氏（袋井市教育委員会）より灰陶陶器・山茶碗・かわらけにかかる御教示をいただいた。
- 3 株式会社アルカより御教示いただいた。
- 4 藤三田佳男氏（文化庁）より御教示いただいた。

#### 参考文献

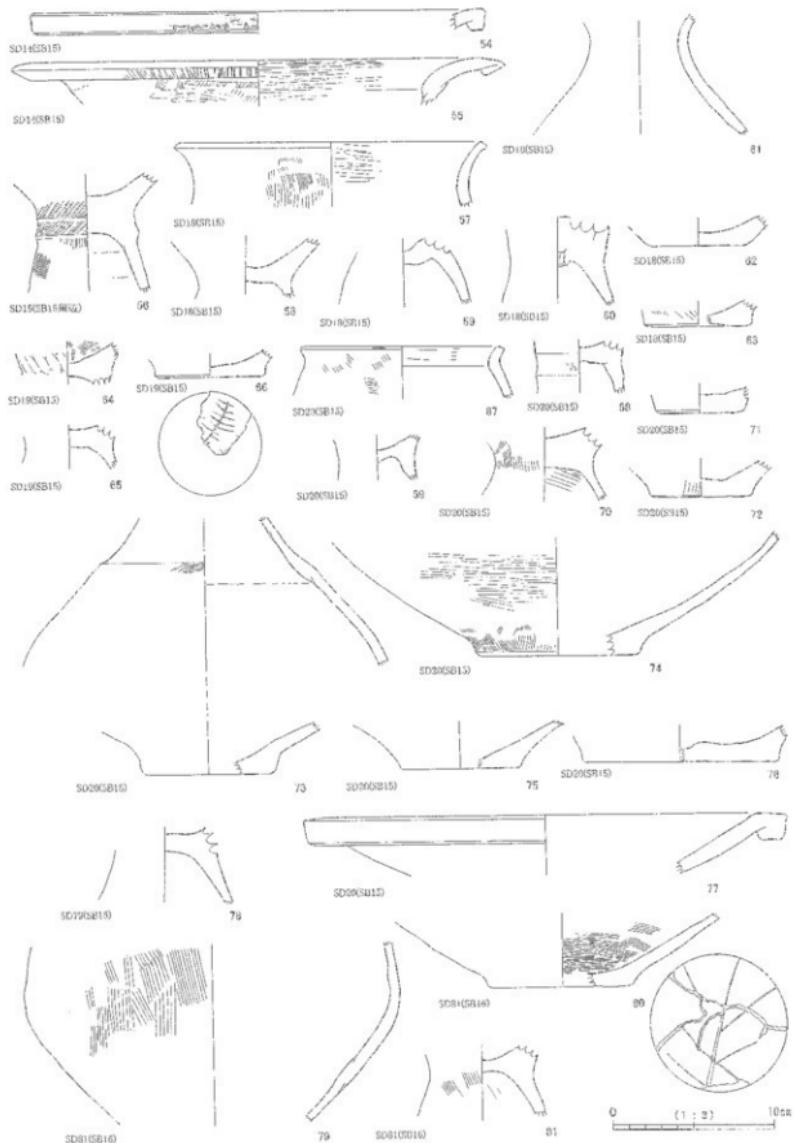
- 岩本 崇 1995 「菊川式土器における縦耳上との問題」『財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究会設立10周年記念論文集』  
佐藤由記男・荻野谷正宏・櫻原和大 2002 「遠江・豊河地域」『赤生土器の様式と場所』東海編』木耳社
- 鈴木一有 2002 「古墳時代前期にかかる問題」『桓武西宮遺跡』浜松市文化協会
- 鈴木敏則 1996 「遠江・豊河（愛知）」「YAYI」『赤生土器を語る会』
- 2002 「西遠江の古式」『静岡一場町版』平野吉郎先生追贈記念論文集「東海の路」
- 中嶋都夫 1988 「いわゆる「菊川式」と「旗張式」の再検討」『板橋』2  
1997 「東海東部の古式土器」『慈西東史研究』13
- 松井一明 1989 「窓口古墳群と清ヶ谷古墳群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の歴史遺跡』静岡県  
教育委員会
- 1993a 「遠江における計茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25
- 1993b 「東海道城のかわらけ縦耳上について」『久野城IV』袋井市教育委員会
- 1995 「古墳時代前半土器」『板垣遺跡-遺物・縄糸編-』袋井市教育委員会



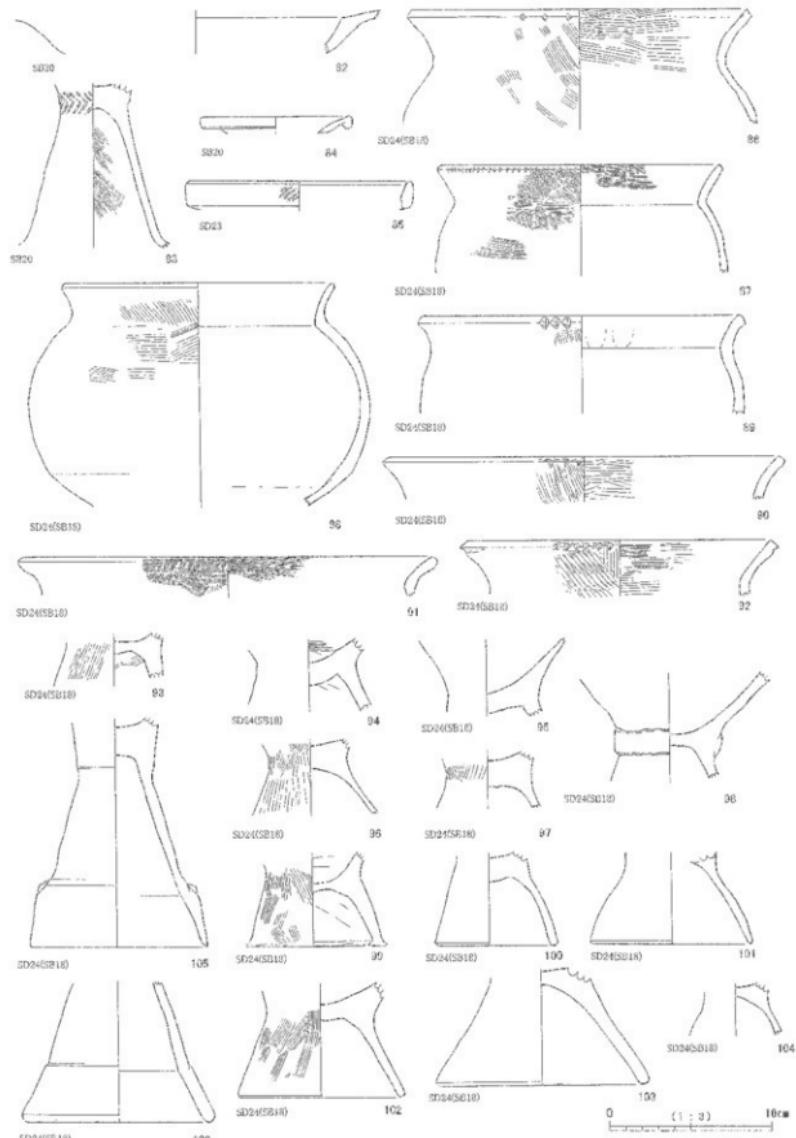
第258圖 出土土器 1 (繩文土器)



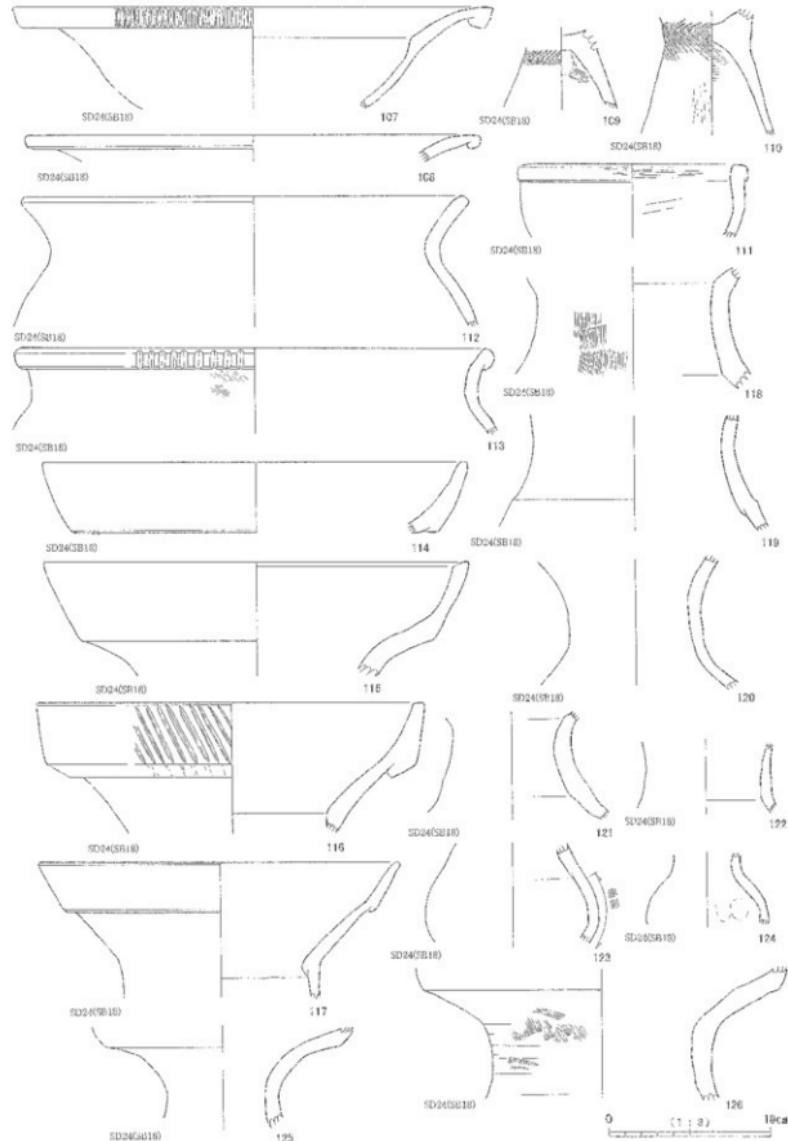
第259図 出土土器 2 (弥生土器・土師器)



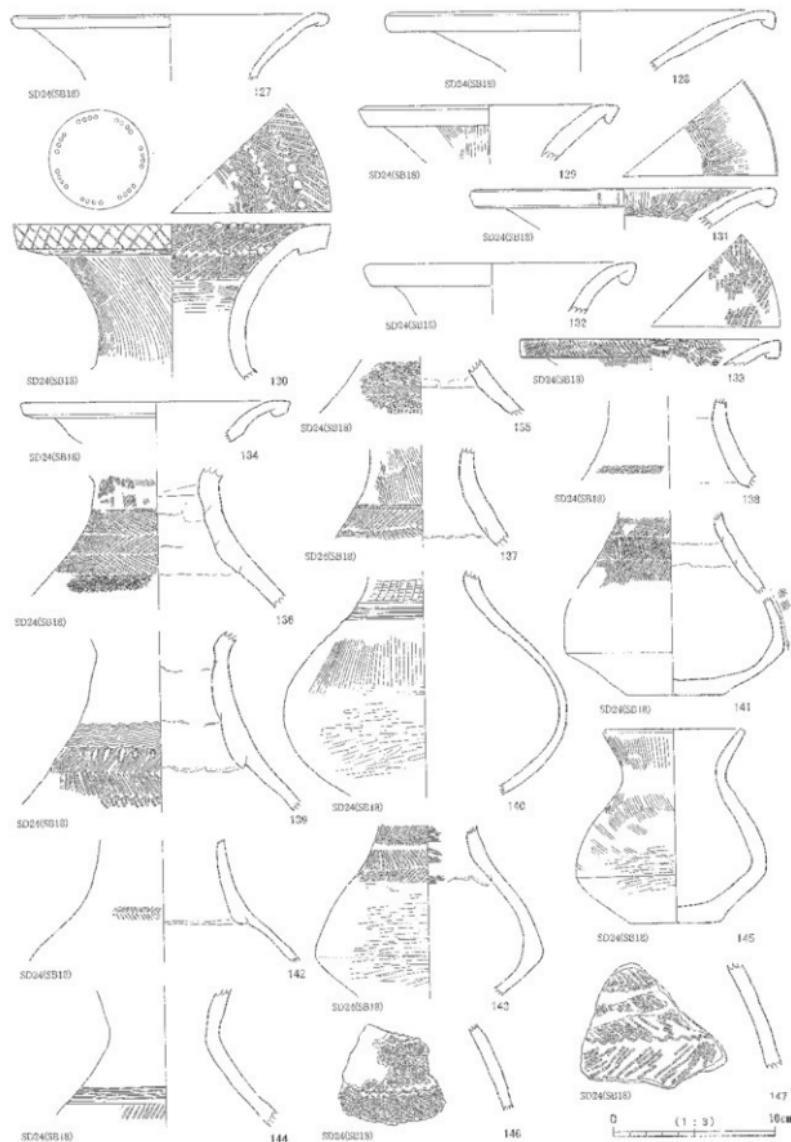
第260圖 出土土器 3 (弥生土器・土飾器)



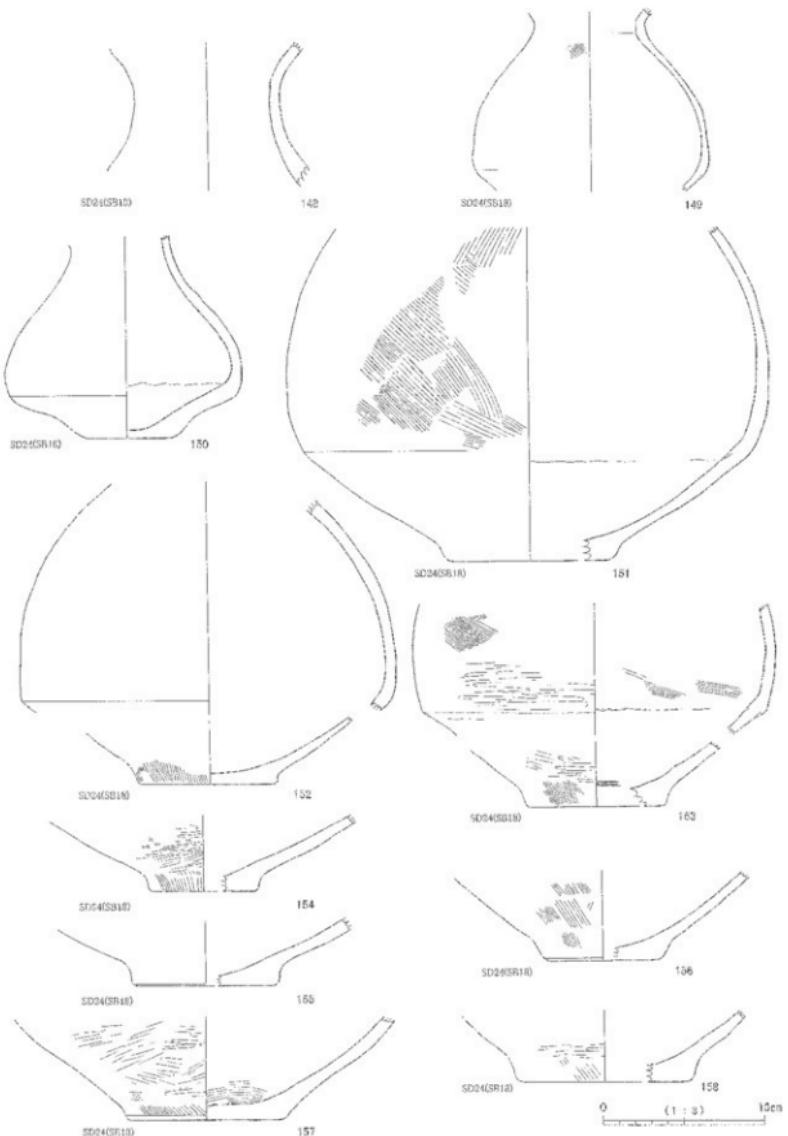
第261図 出土土器 4 (弥生土器・土筋器)



第262図 出土土器5 (弥生土器・土師器)

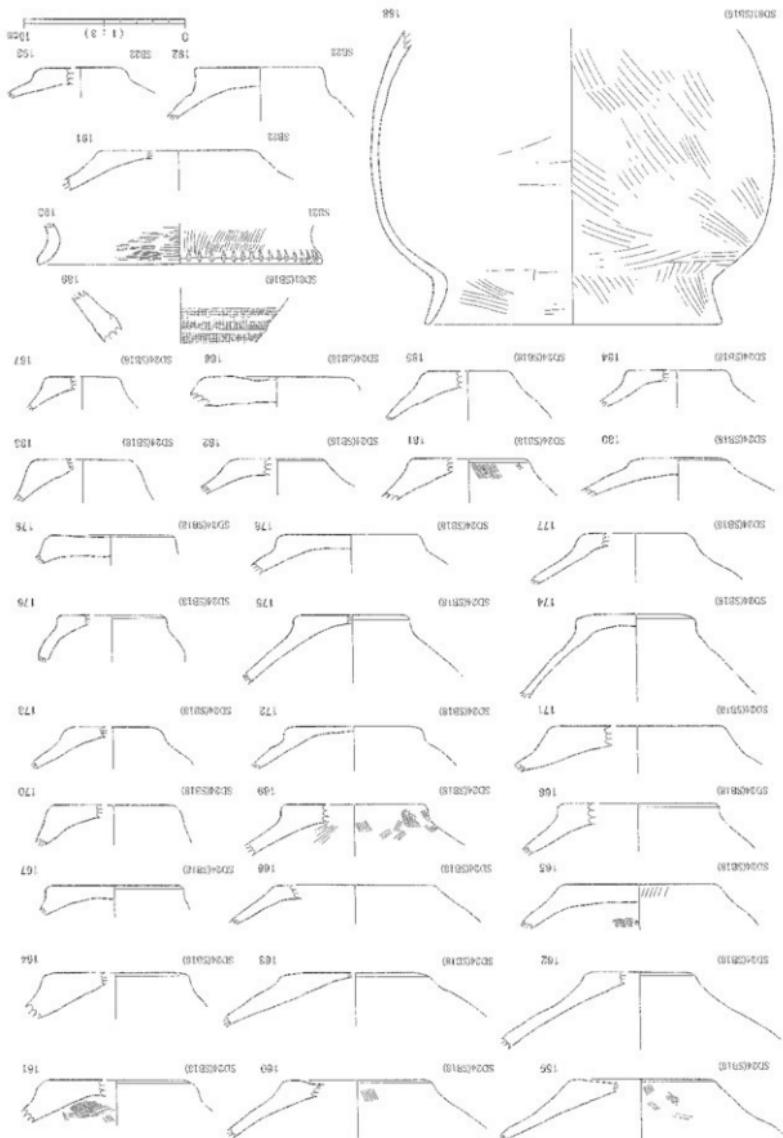


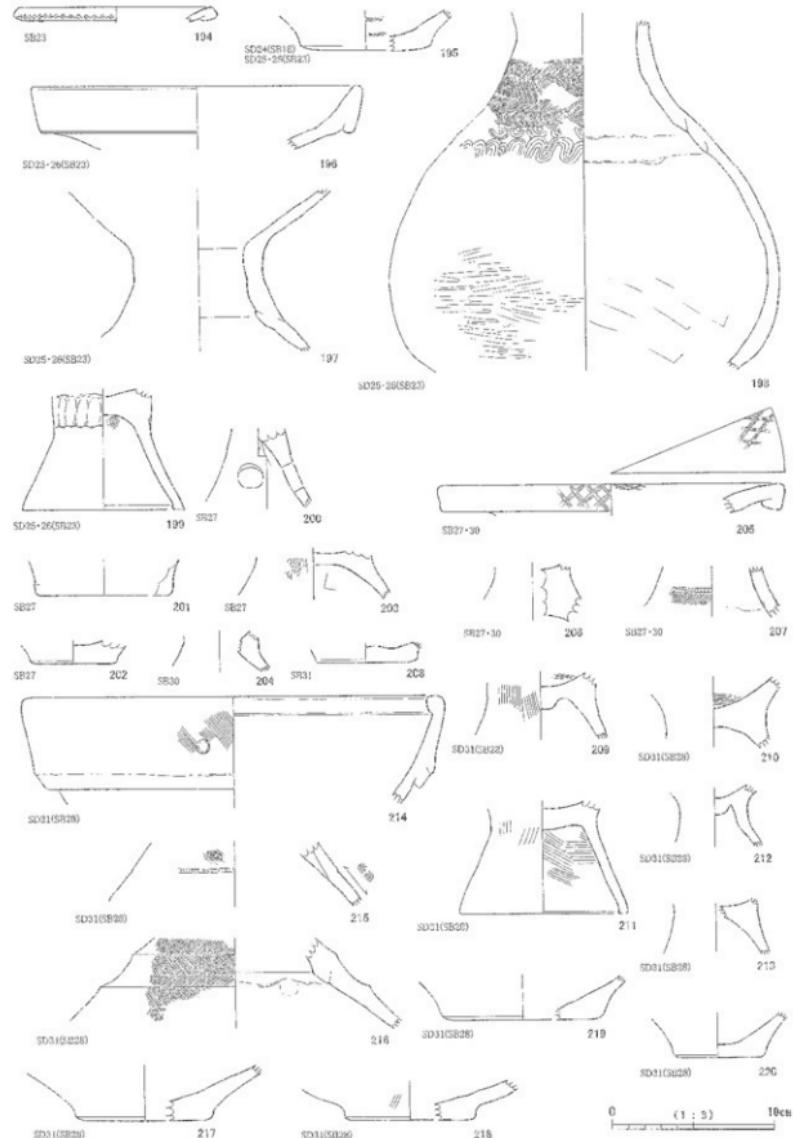
第263図 出土土器 6 (弥生土器・土師器)



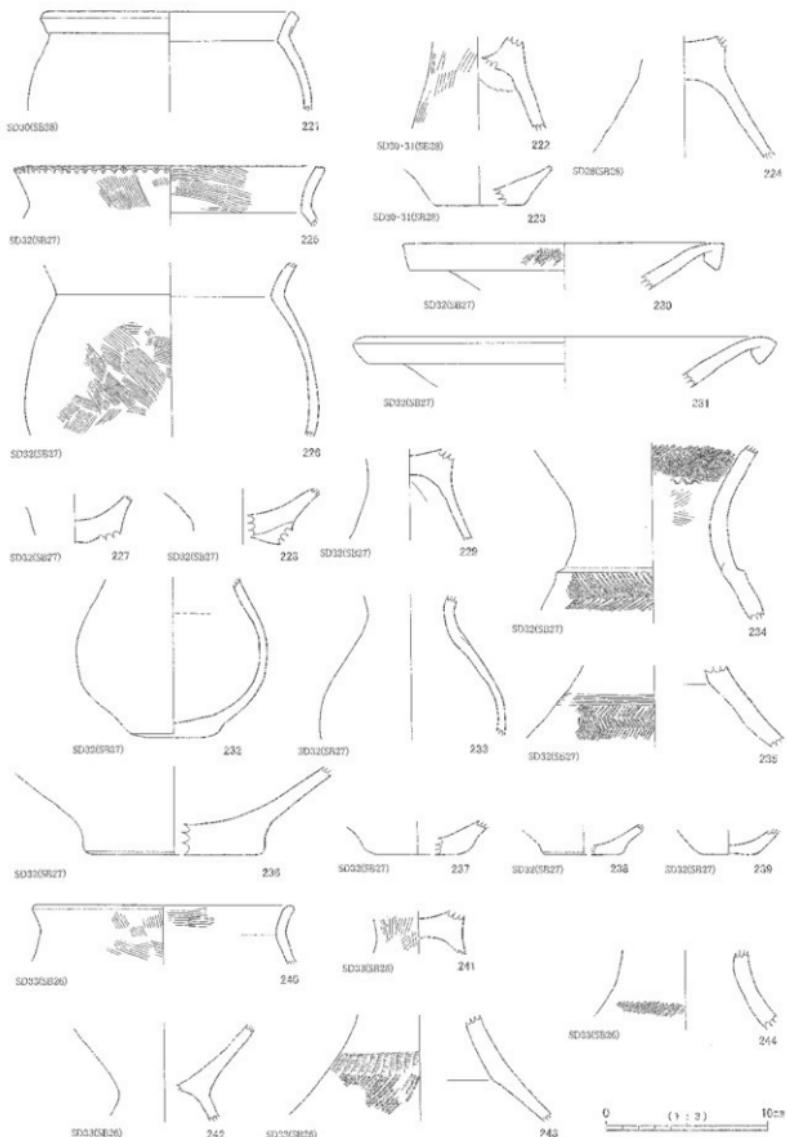
第264図 出土土器7 (弥生土器・土崩器)

图265图 出土玉器 8 (玉生玉器·玉饰)

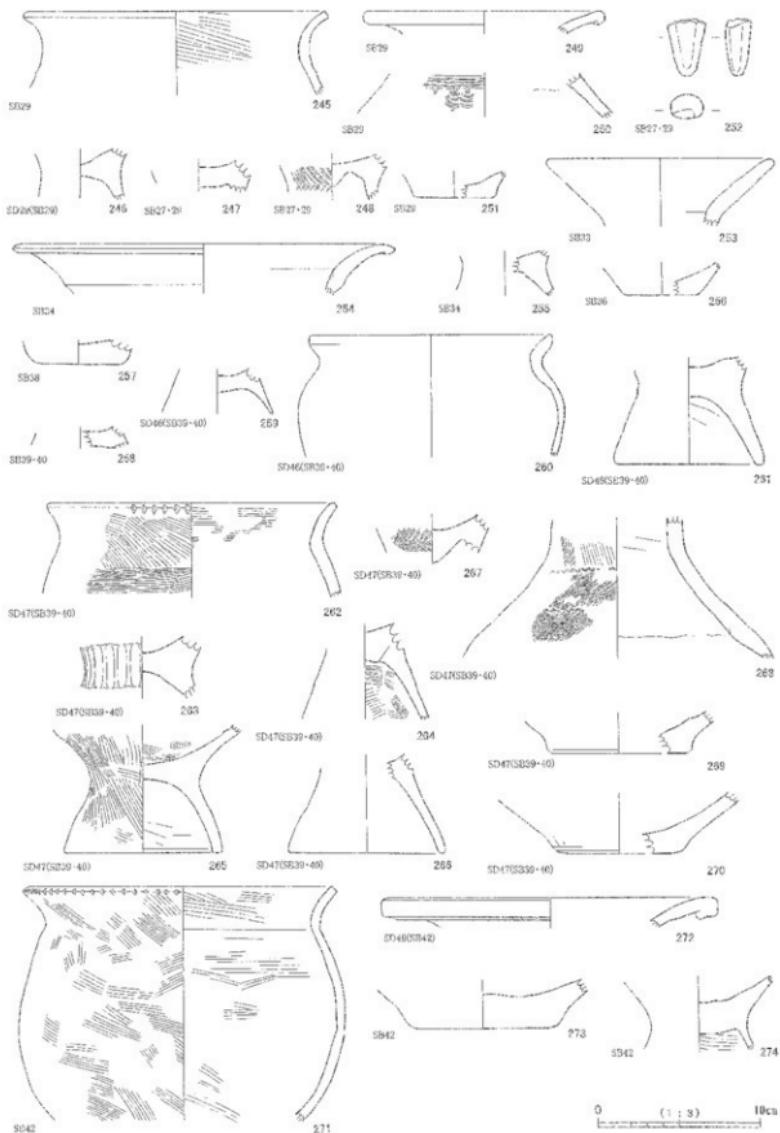




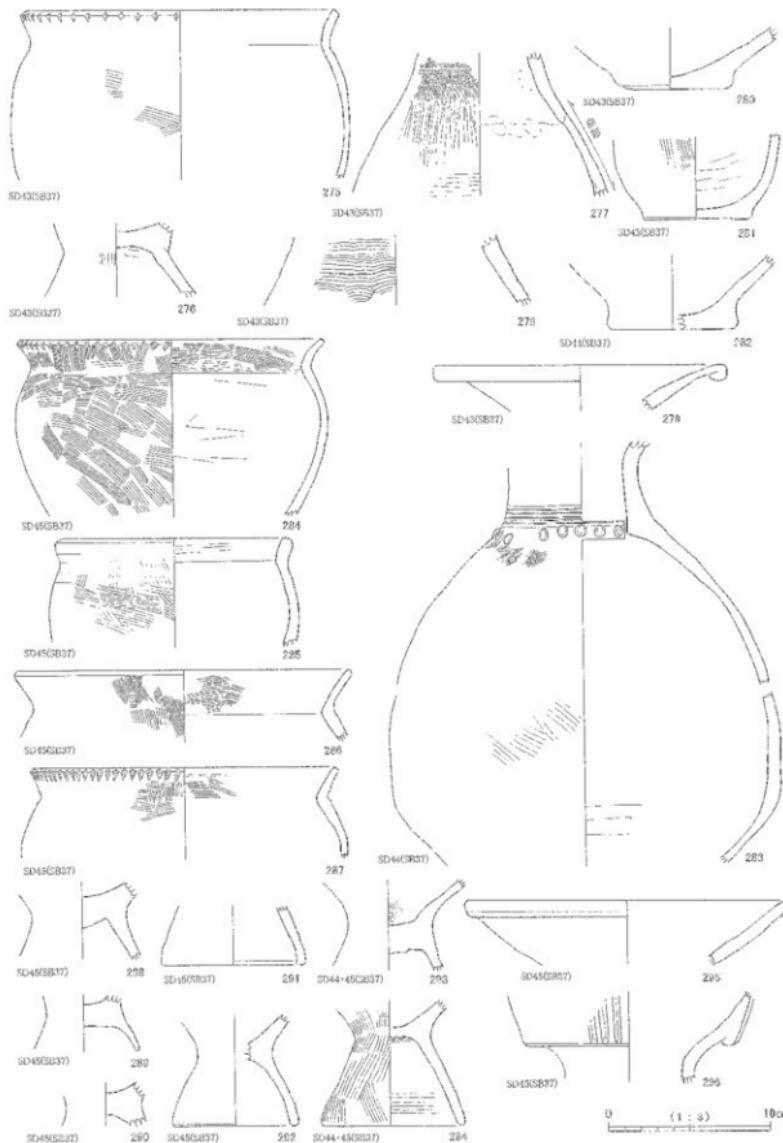
第266図 出出土器9（弥生土器・土師器）



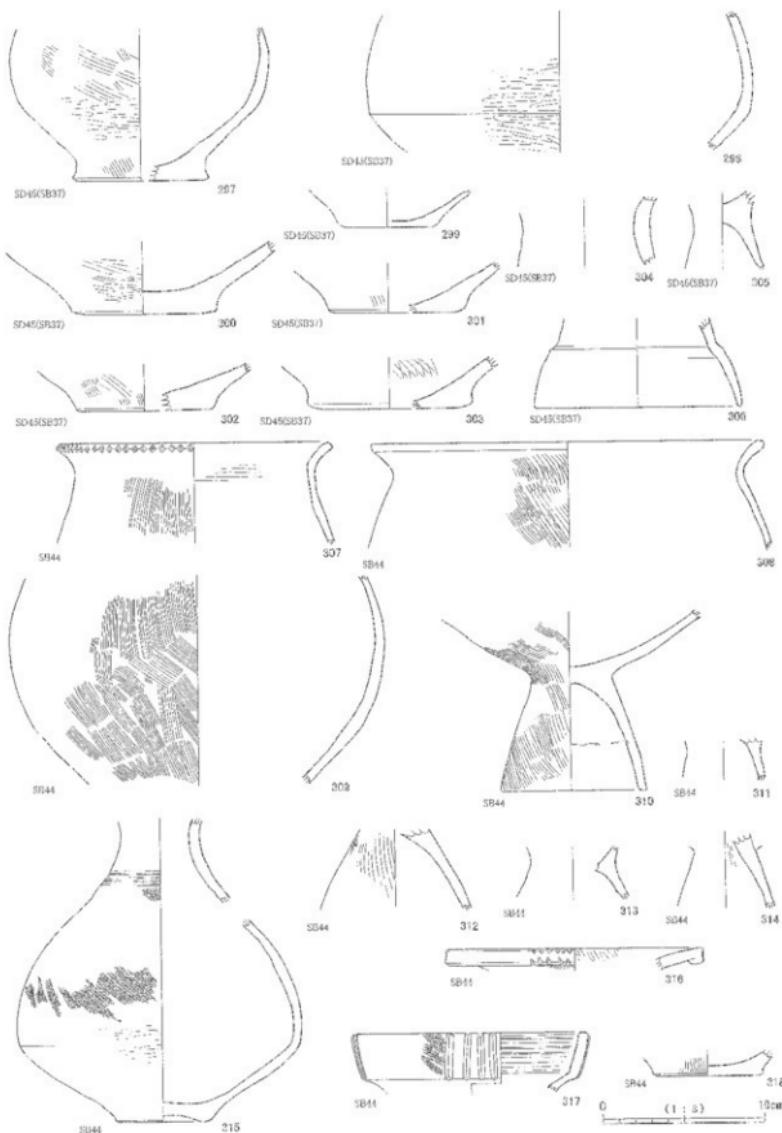
第267圖 出土土器10 (弦纹土器・土筒壁)



第268圖 出土土器11(弥生土器・土師器)

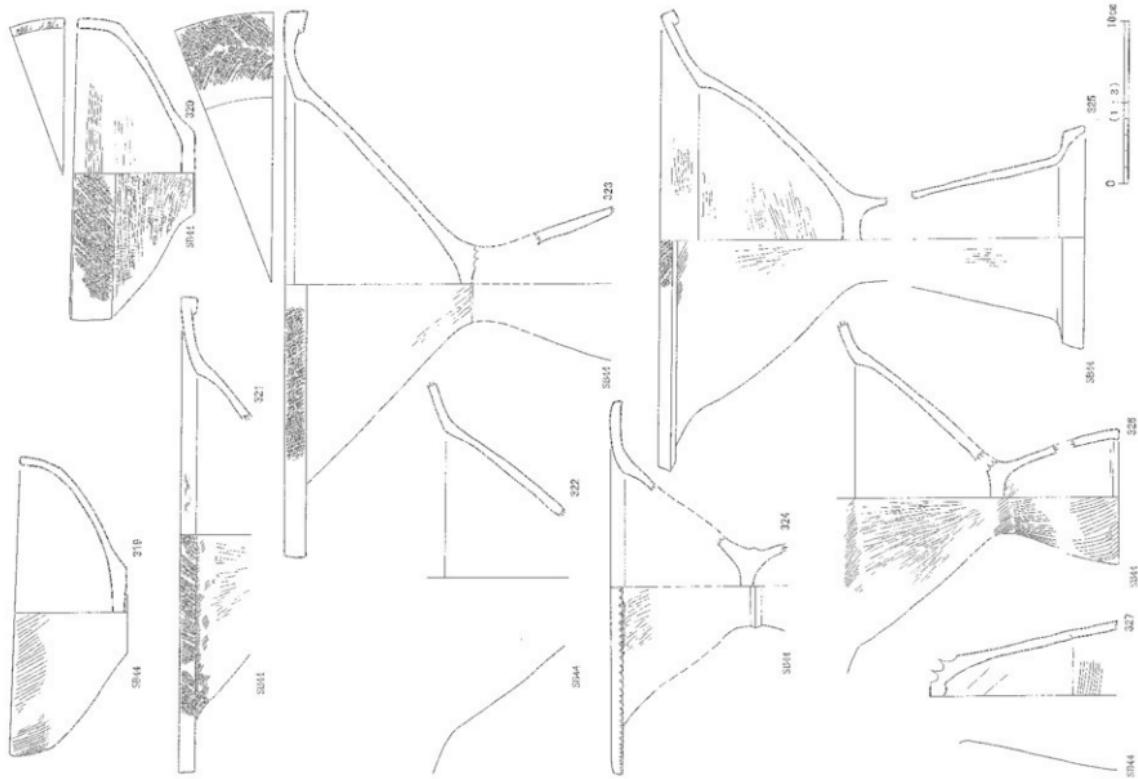


第269図 出土土器12(弥生土器・土器器)



第270圖 出土土器13 (弥生土器・土師器)

第271圖 出土器物14 (陶生土器・土師器)



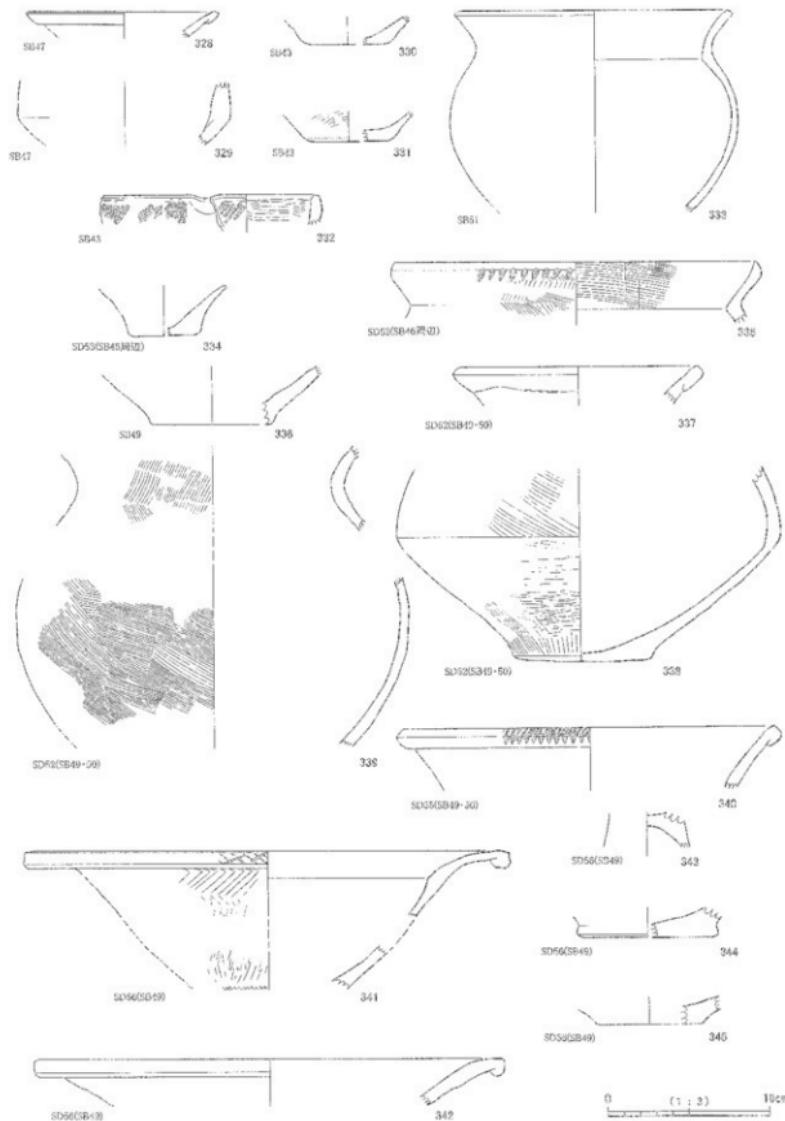
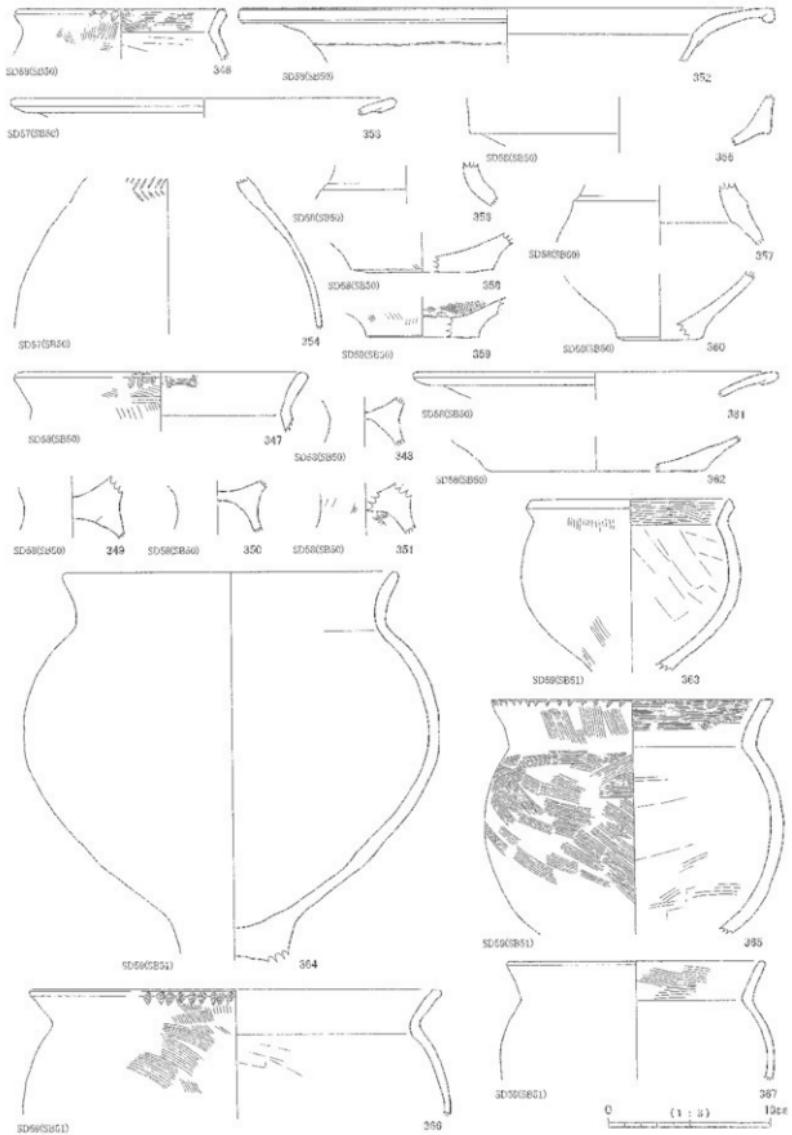
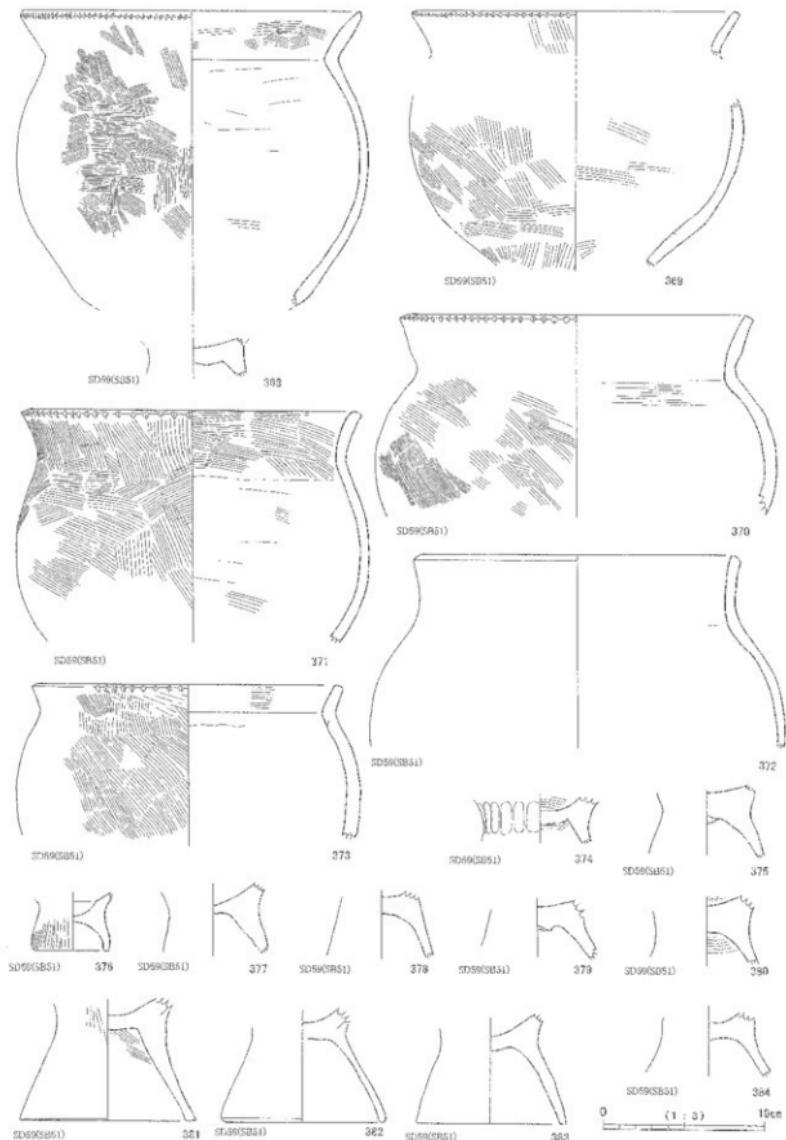


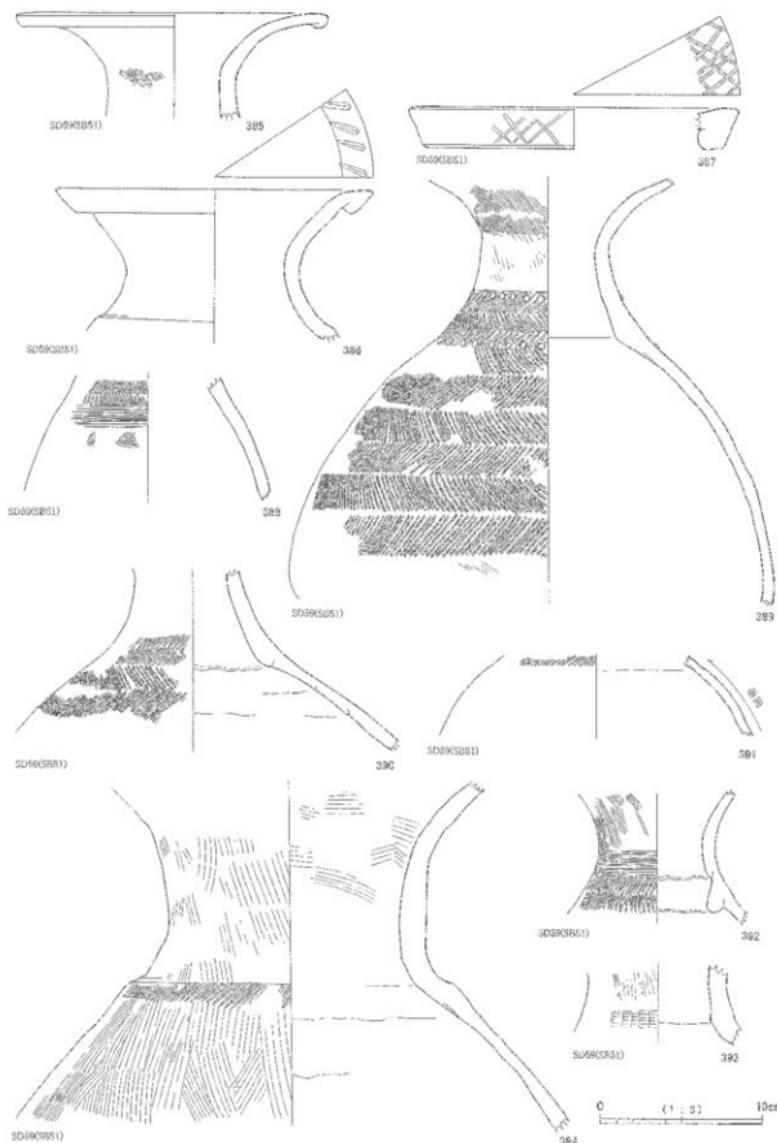
图272 出土土器15(弥生土器・土師器)



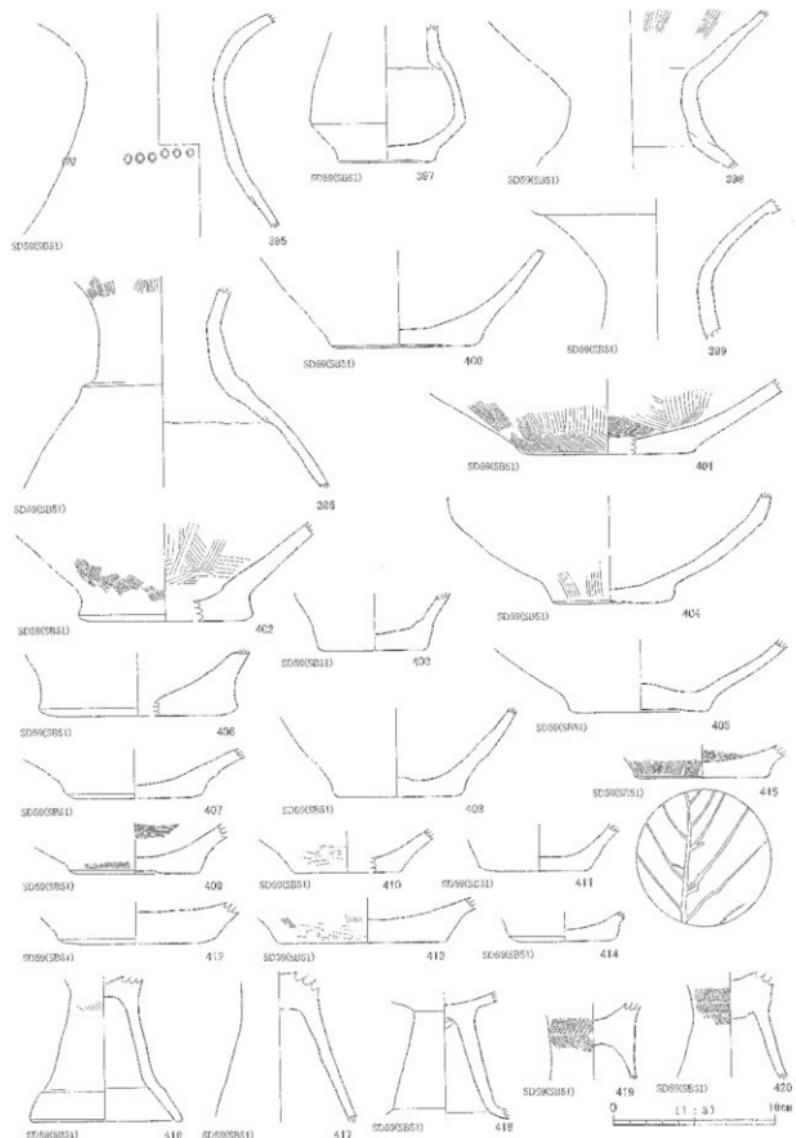
第273圖 出土土器16 (宜正器・土師器)



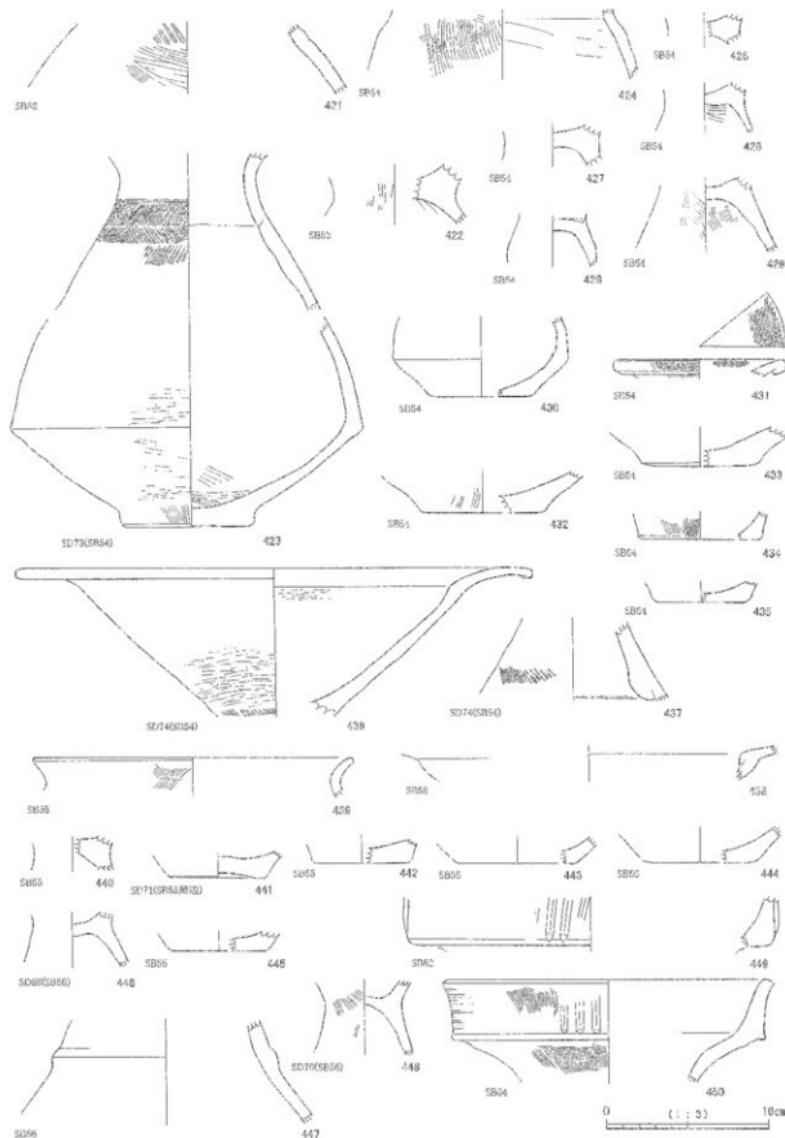
第274図 出土土器17 (弥生土器・土師器)



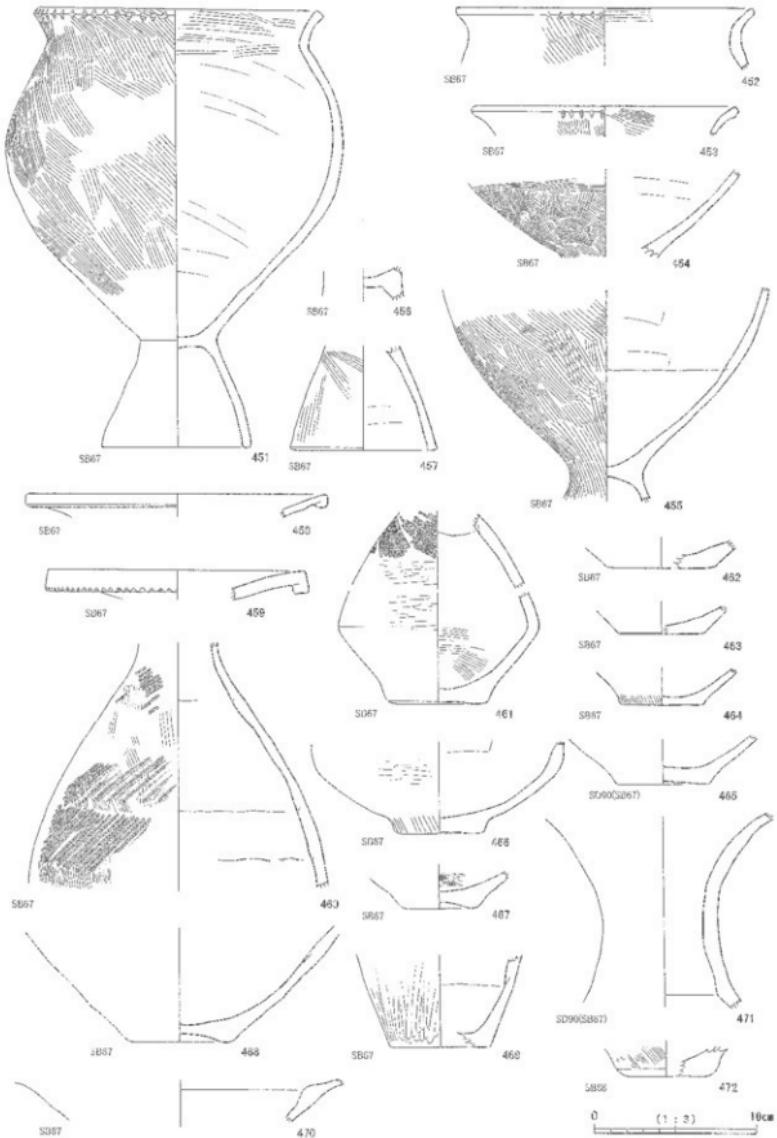
第275図 出土土器18(弥生土器・土師器)



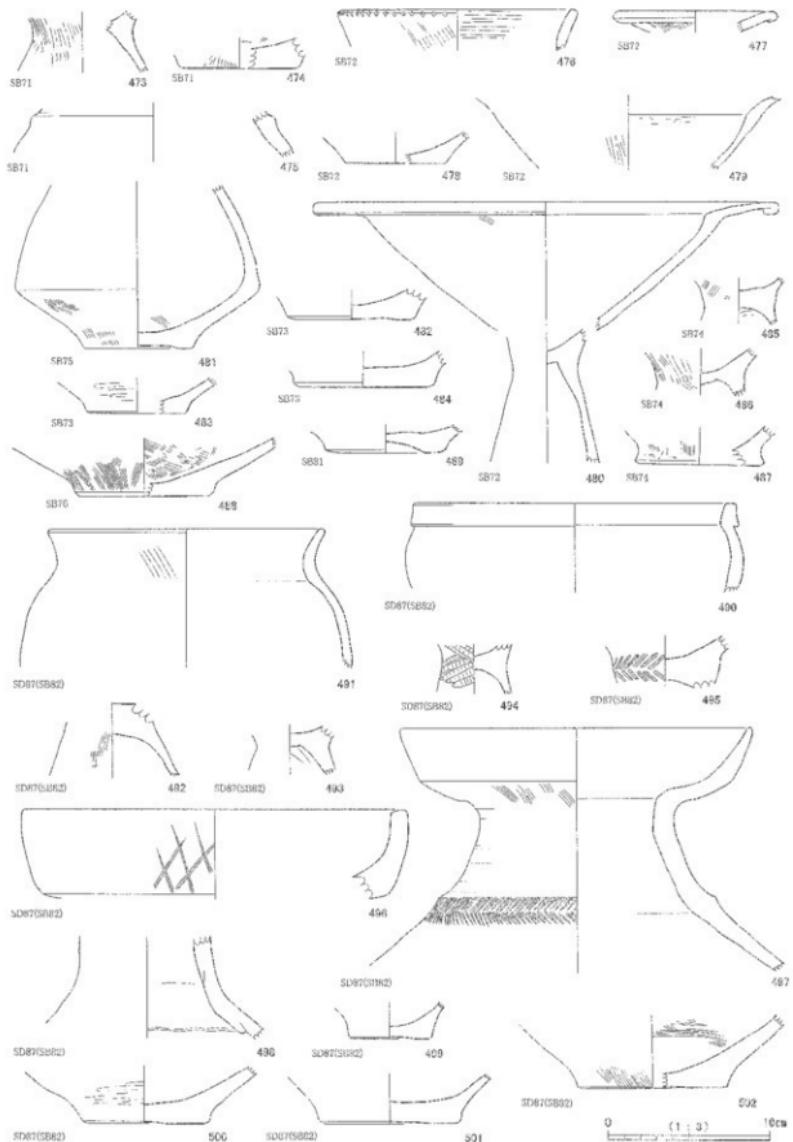
第276図 出土土器19(弥生土器・土師器)



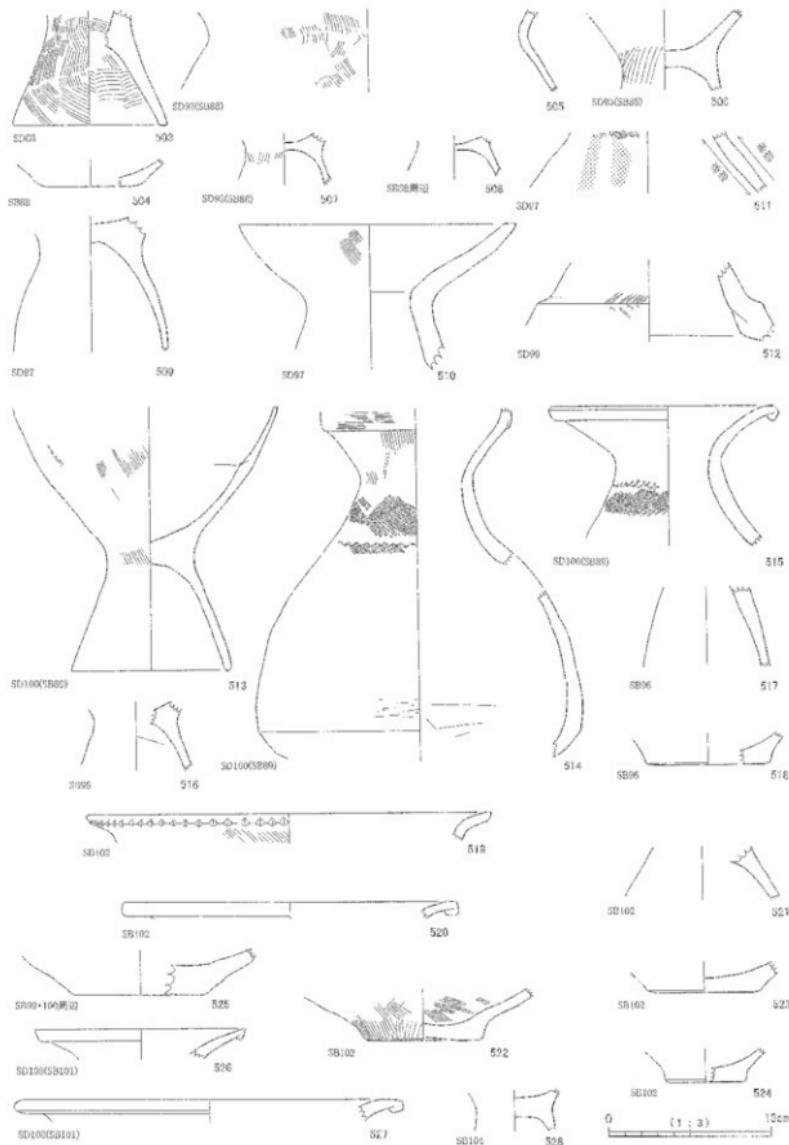
第277図 出土土器20 (赤生土器・土器器)



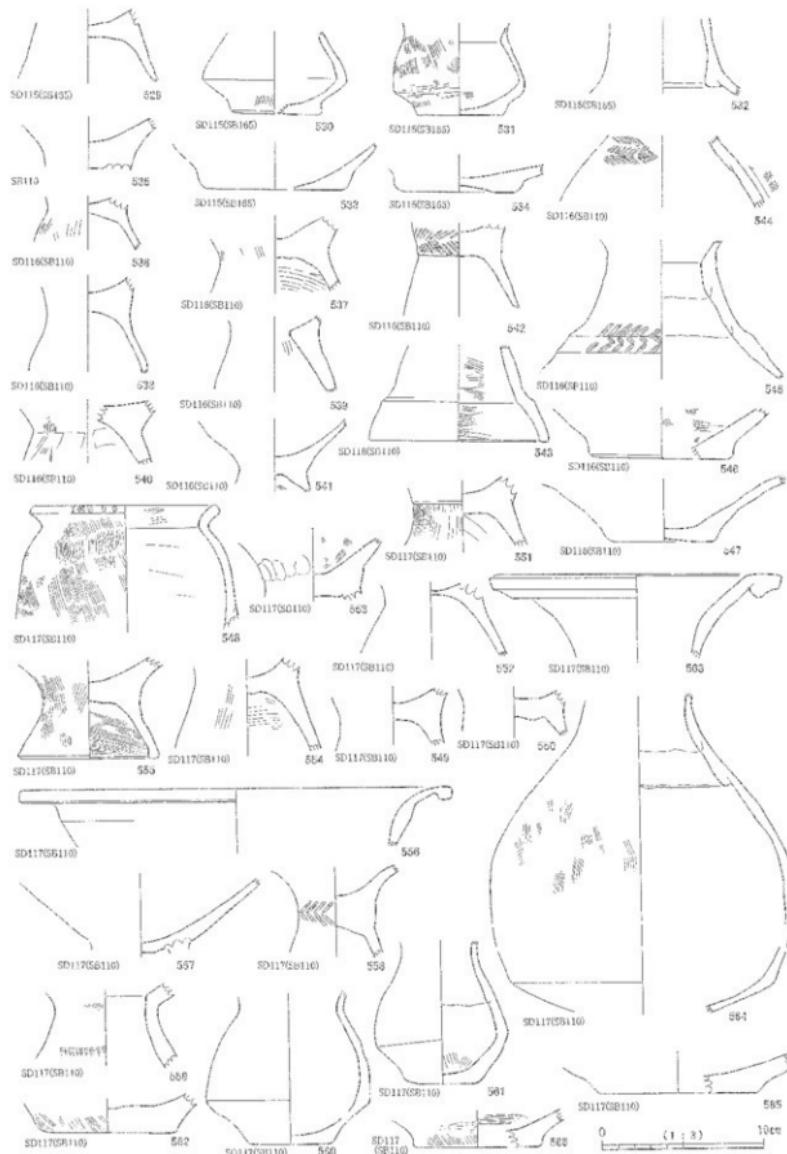
第278圖 出土土器21 (弥生土器・土師器)



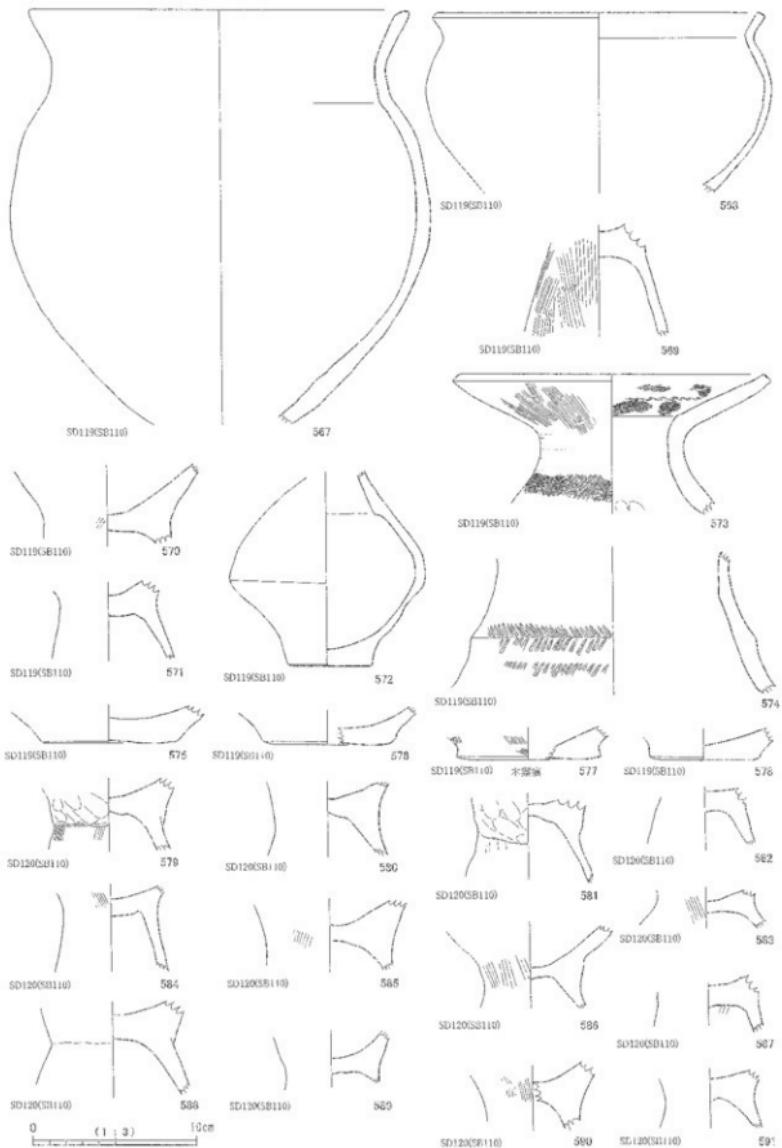
第279図 出土土器22(弥生土器・土師器)



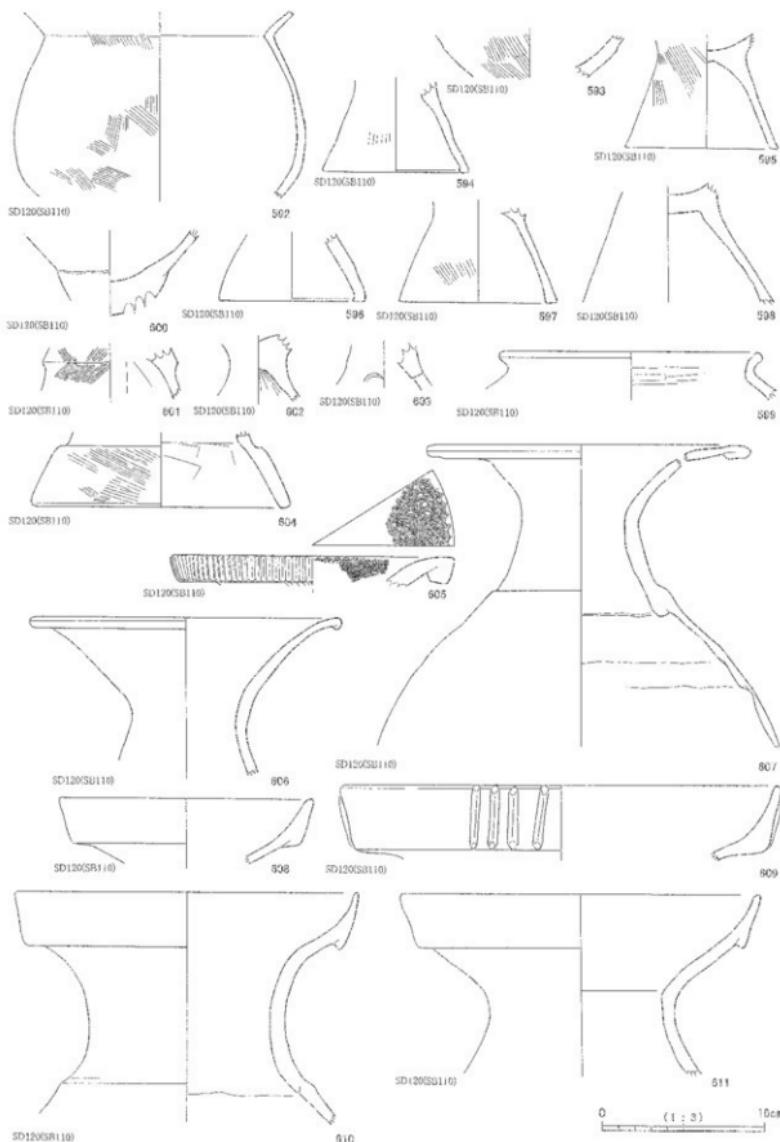
第280圖 出土土器23(弥生土器・土師器)



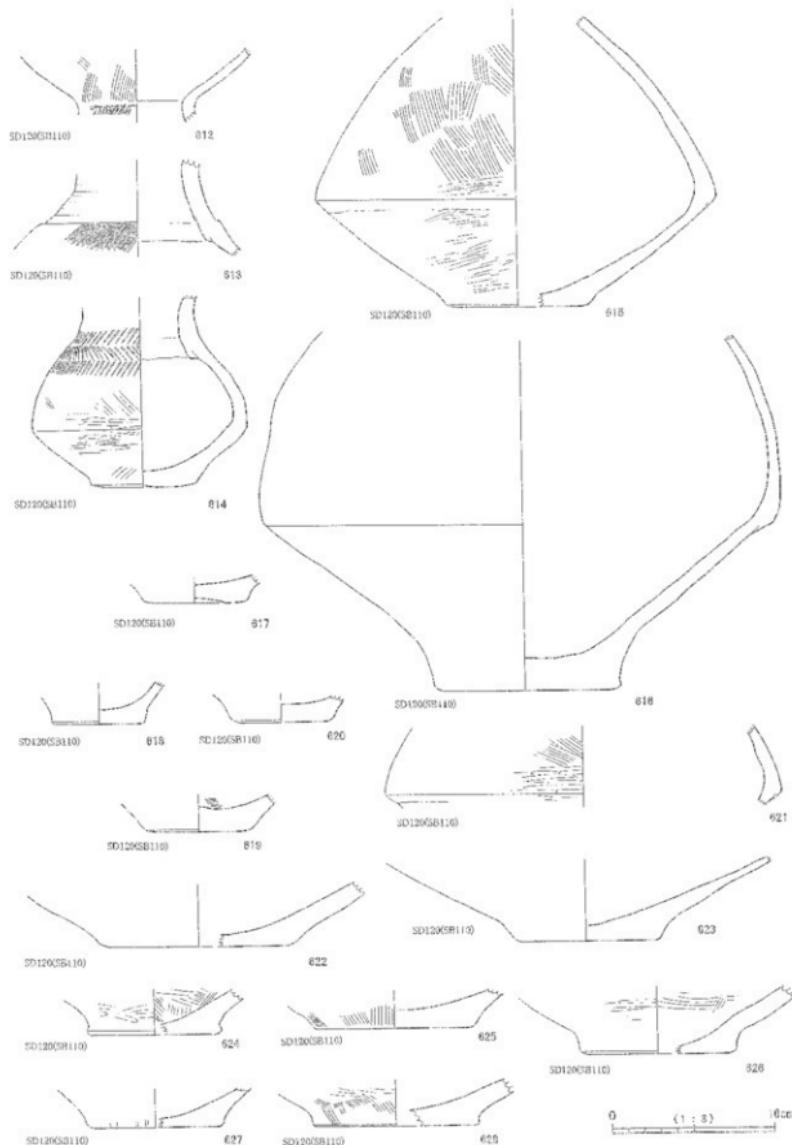
第281図 出土土器24(弥生土器・土器)



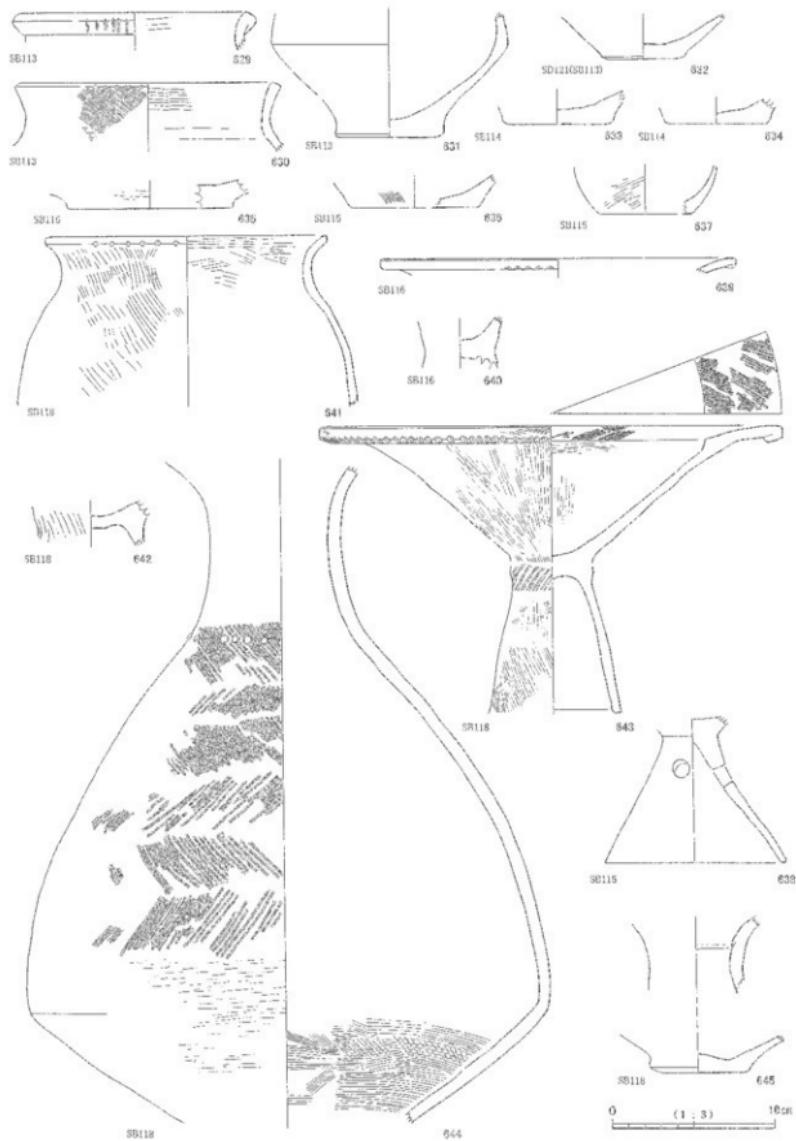
第282図 出土土器25(弥生土器・土偶器)



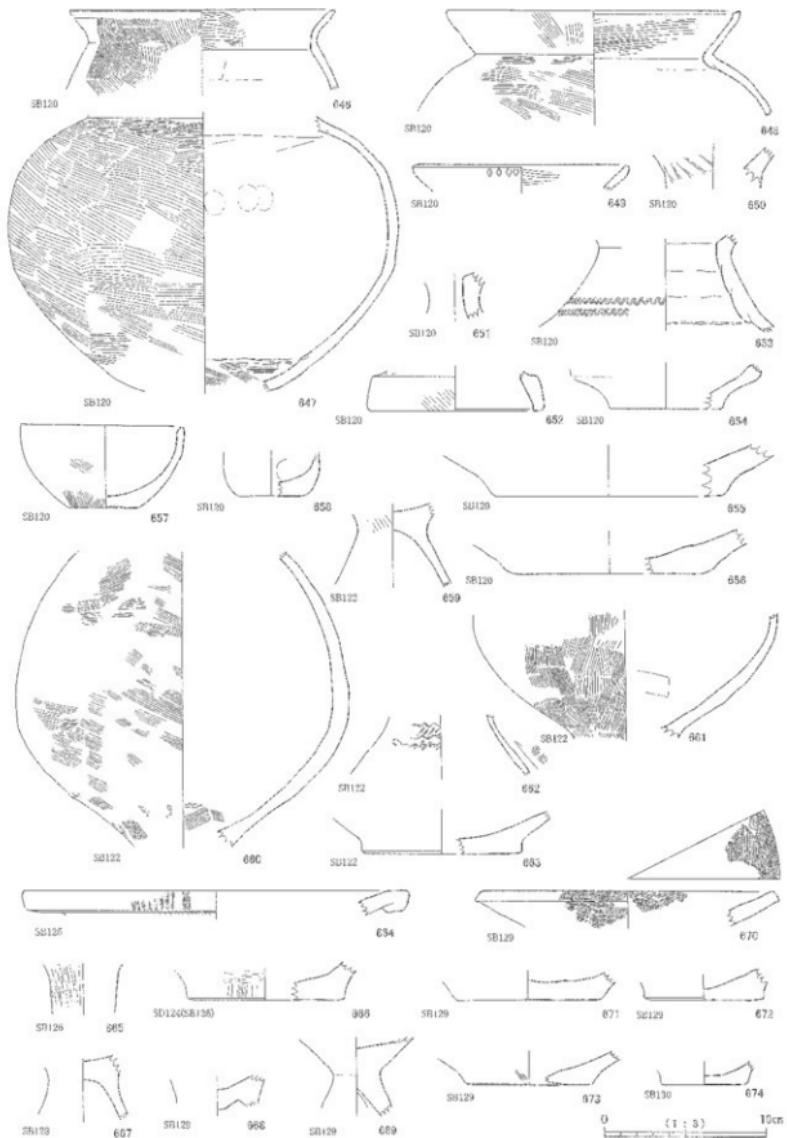
第233図 出土土器26(弥生土器・土師器)



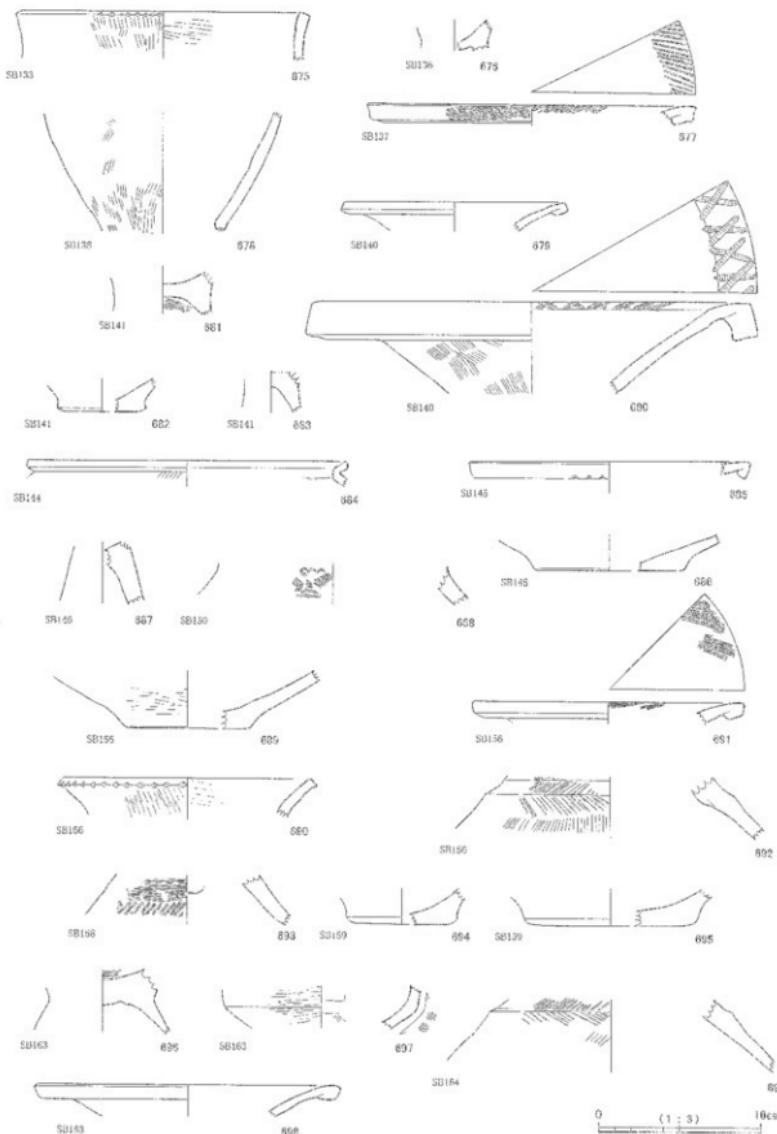
第284図 出土土器27 (弥生土器・土師器)



第285圖 出土土器28 (弦纹土器・土质器)

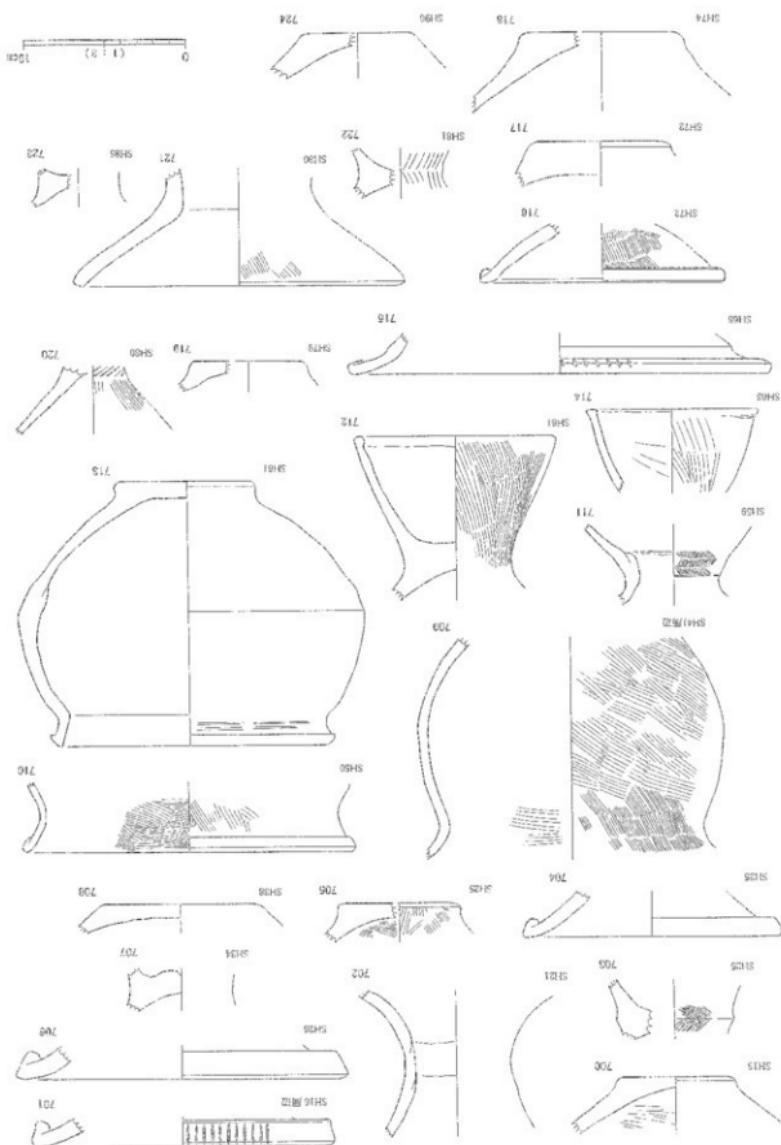


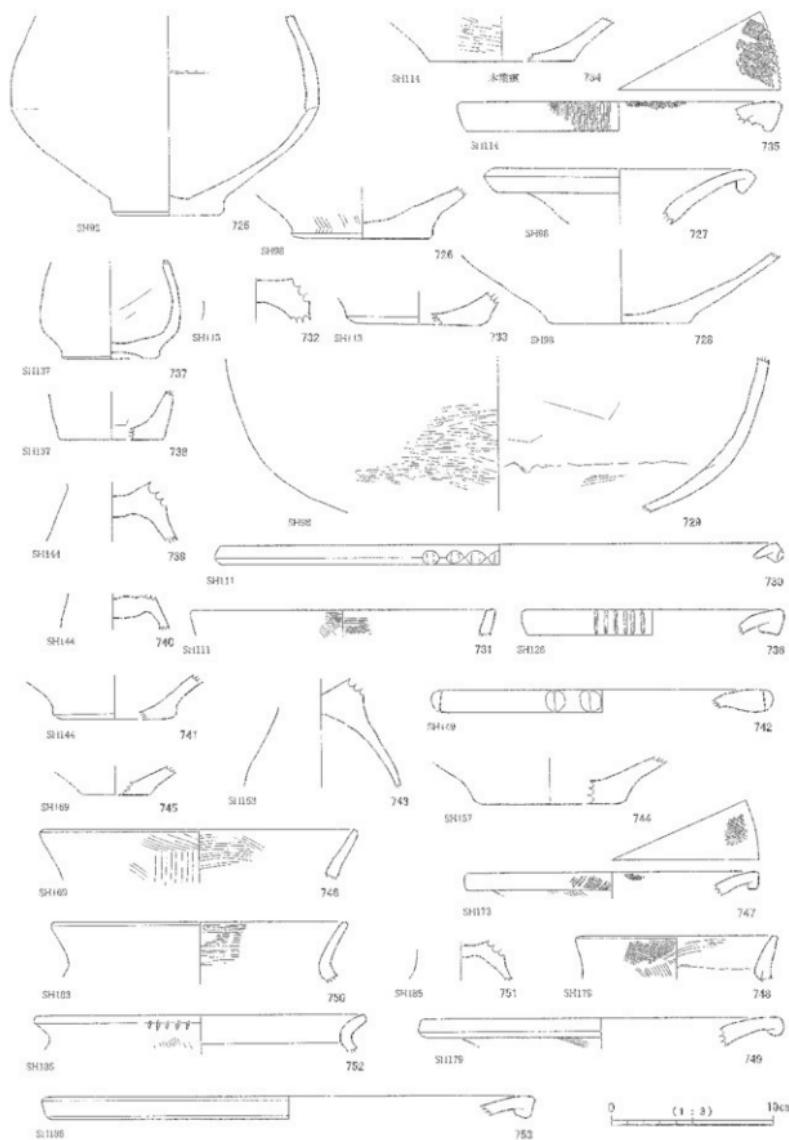
第286図 出土土器29(弦状土器・土偶器)



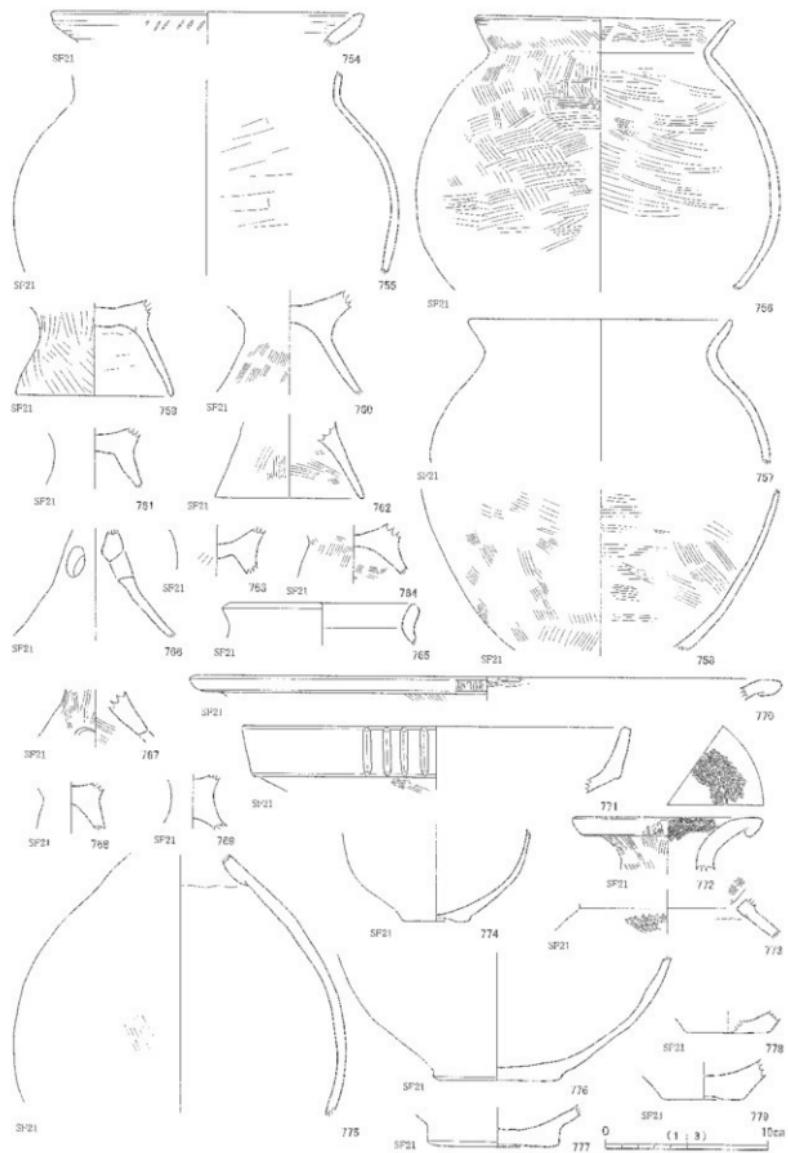
第287圖 出土土器30 (弦生土器・土師器)

第266圖 出土器物31 (漆生土器・土漆器)

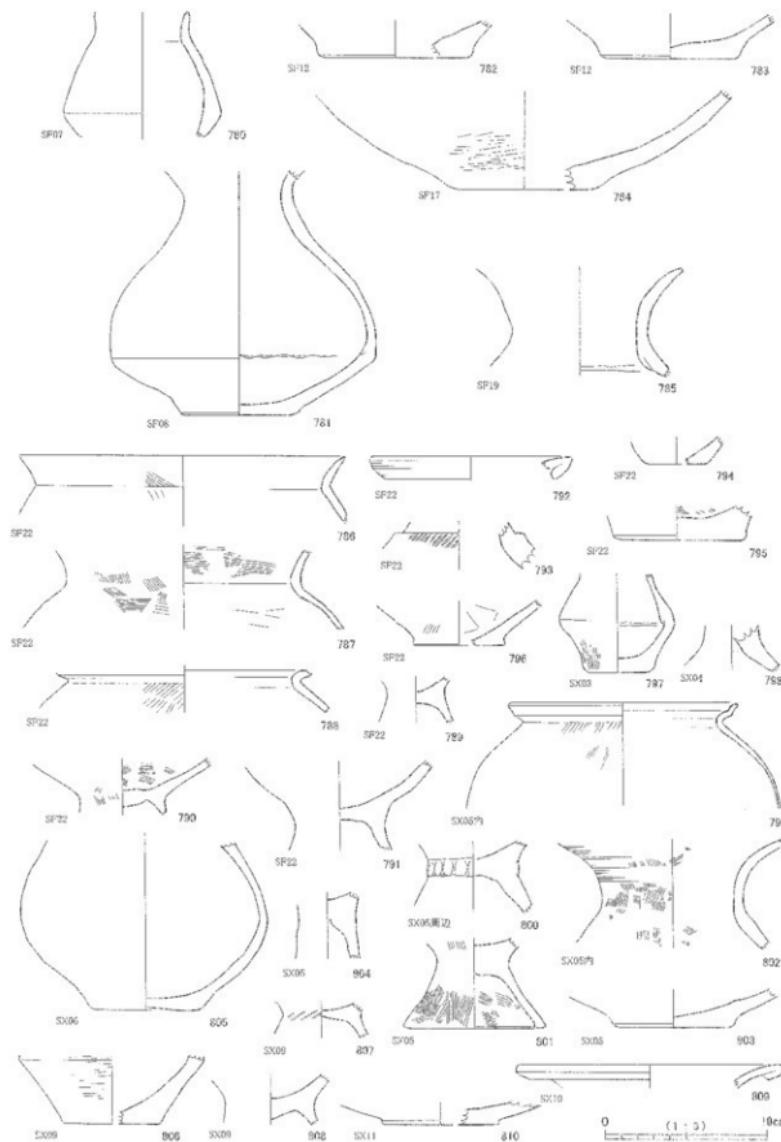




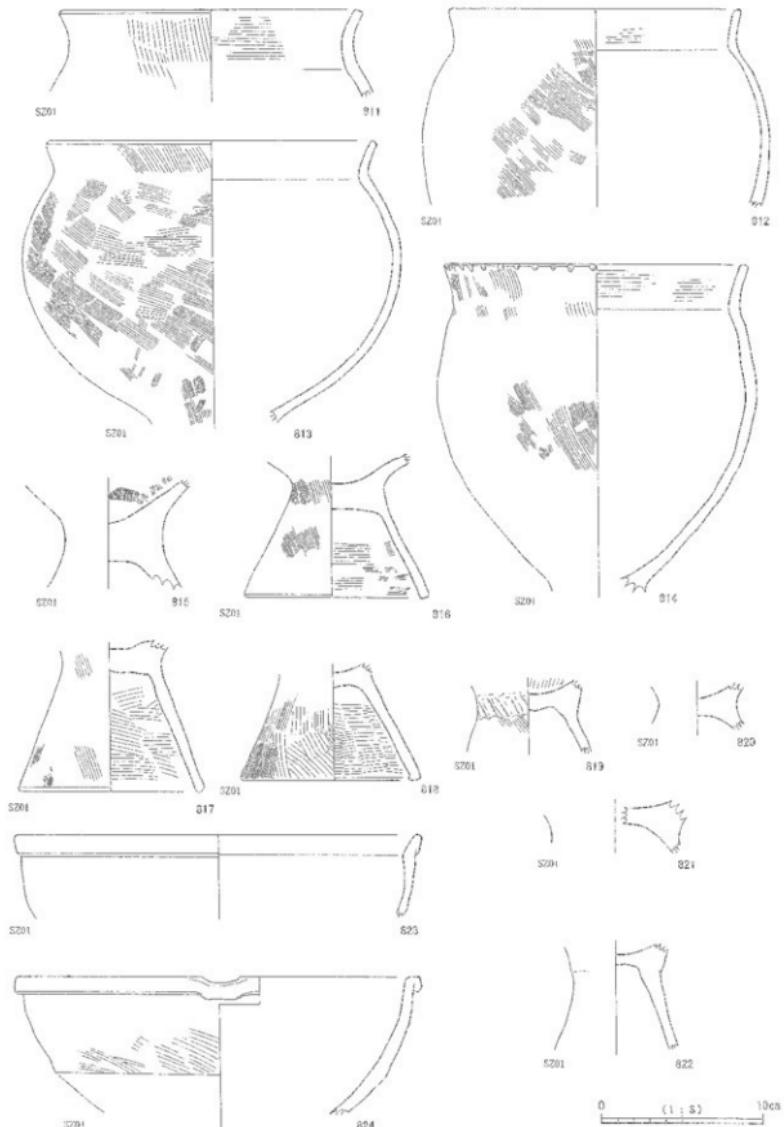
第269圖 出土土器32 (弥生土器・土器)



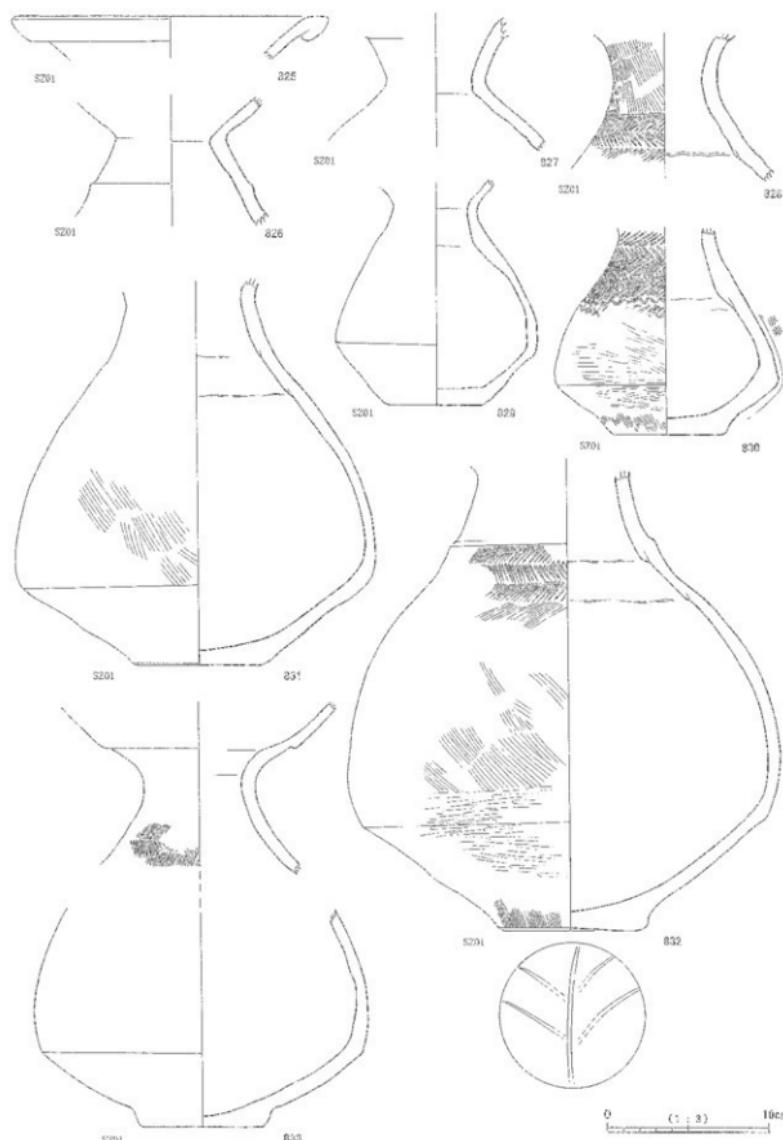
第290図 出土土器33 (弥生土器・土師器)



第291図 出土土器34(弥生土器・土鉢器)

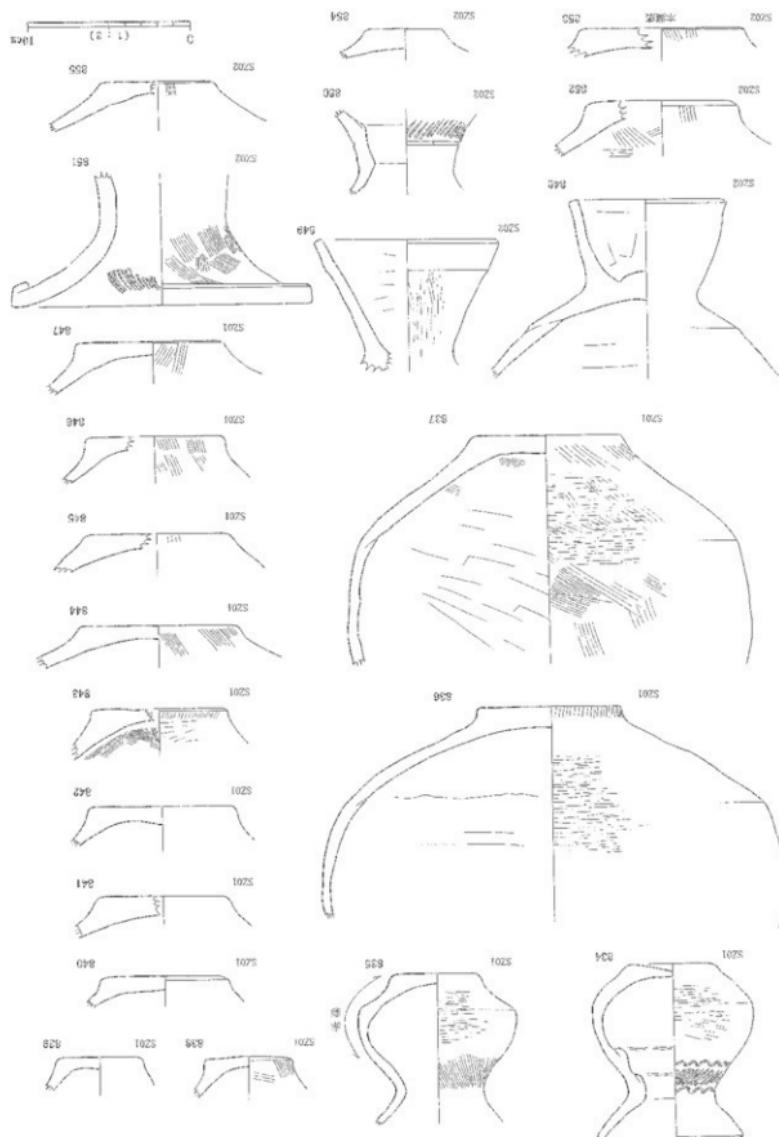


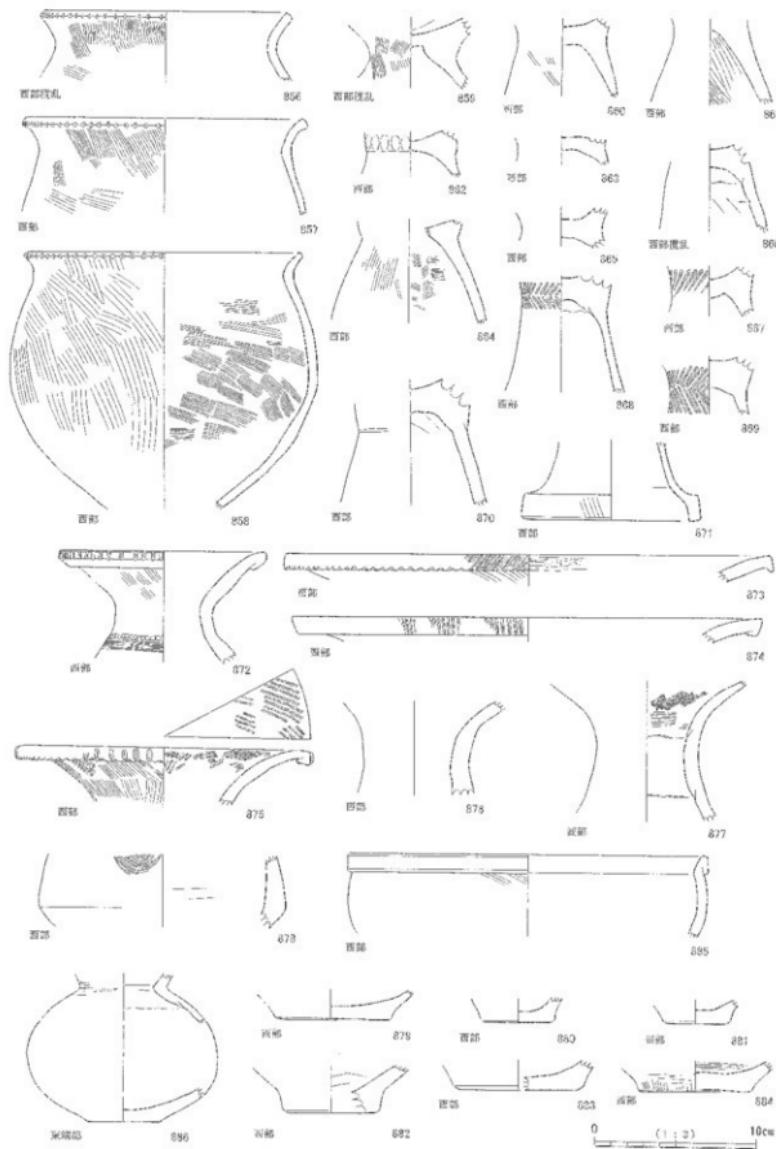
第292図 出土土器35(弥生土器・土師器)



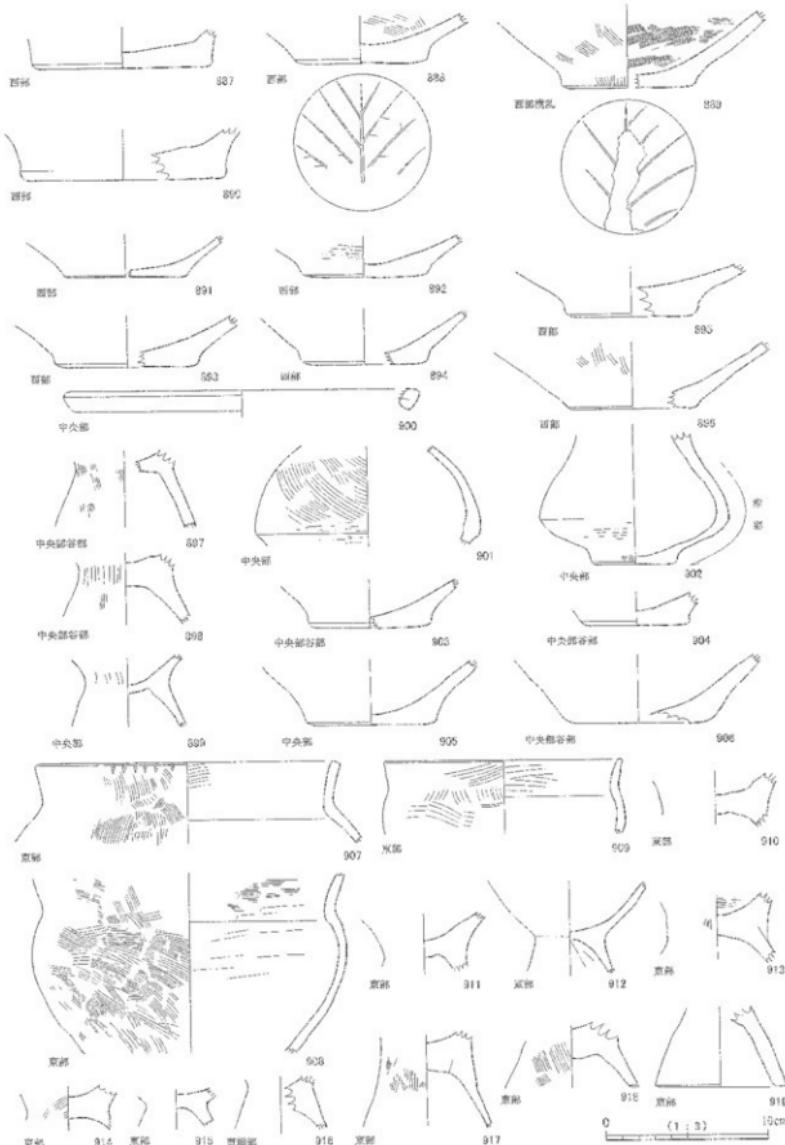
第293圖 出土土器36 (弥生土器・土師器)

第294圖 出土玉器37 (新石器時代玉器)



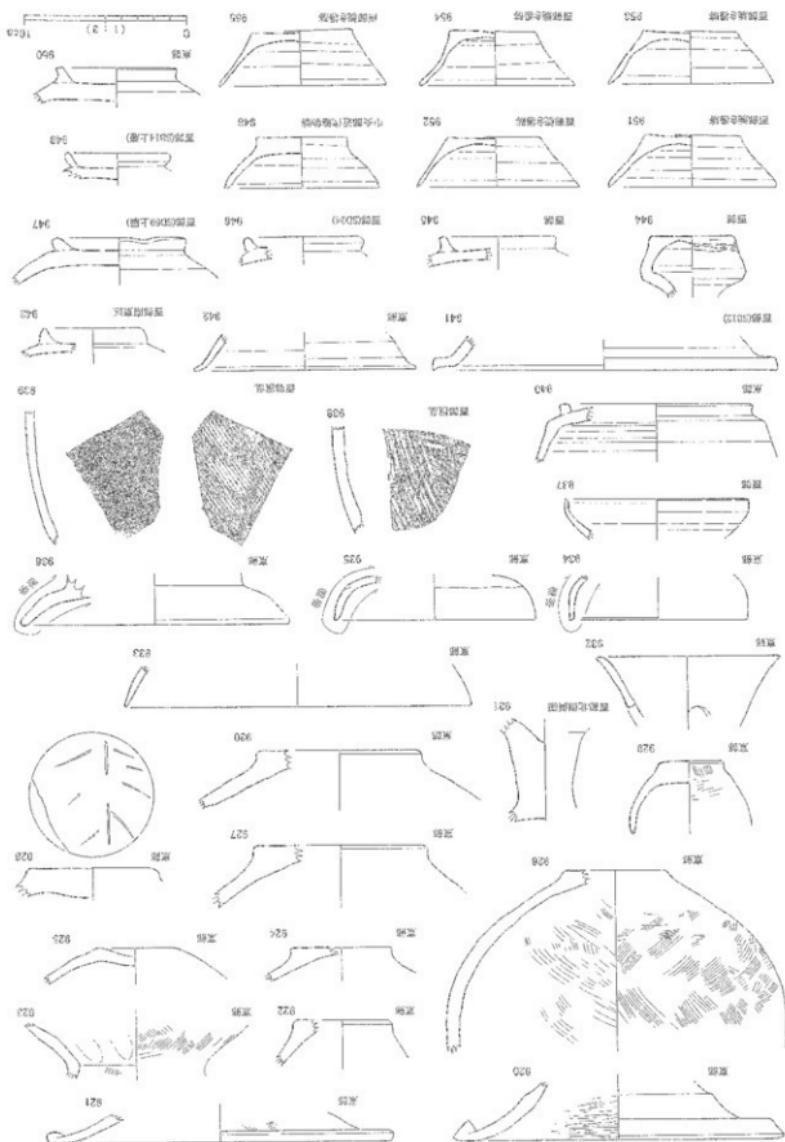


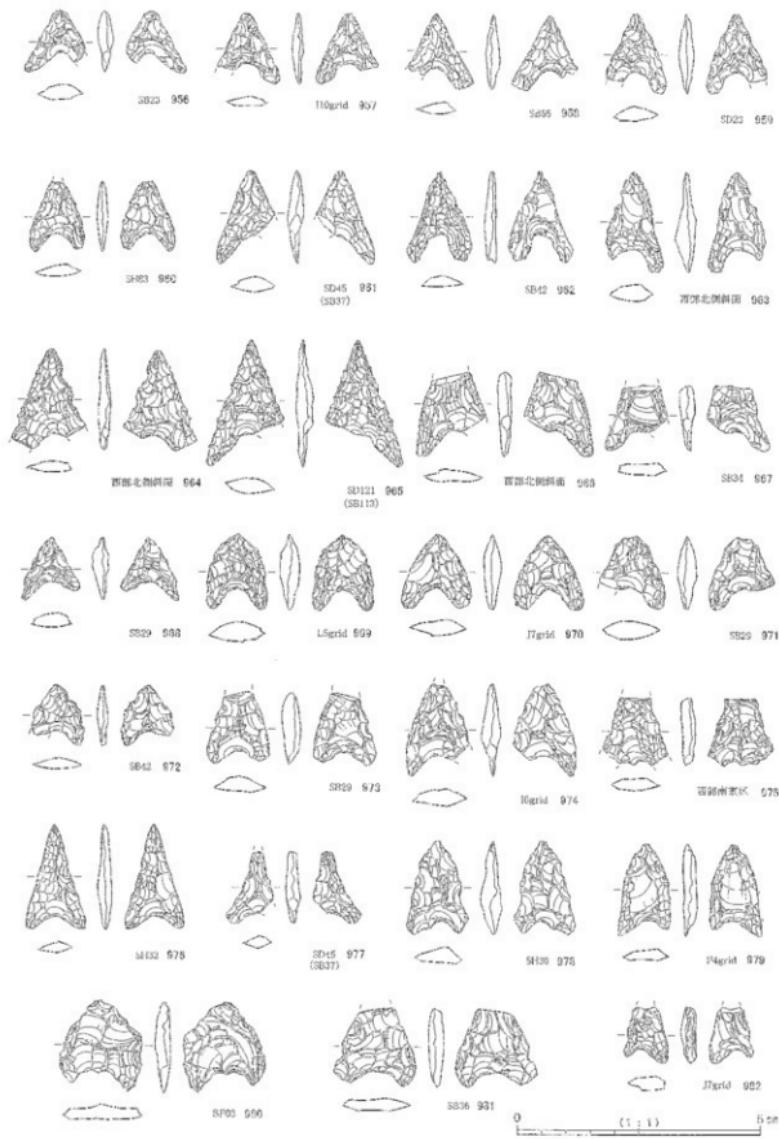
第295図 出土土器38 (弥生土器・土師器)



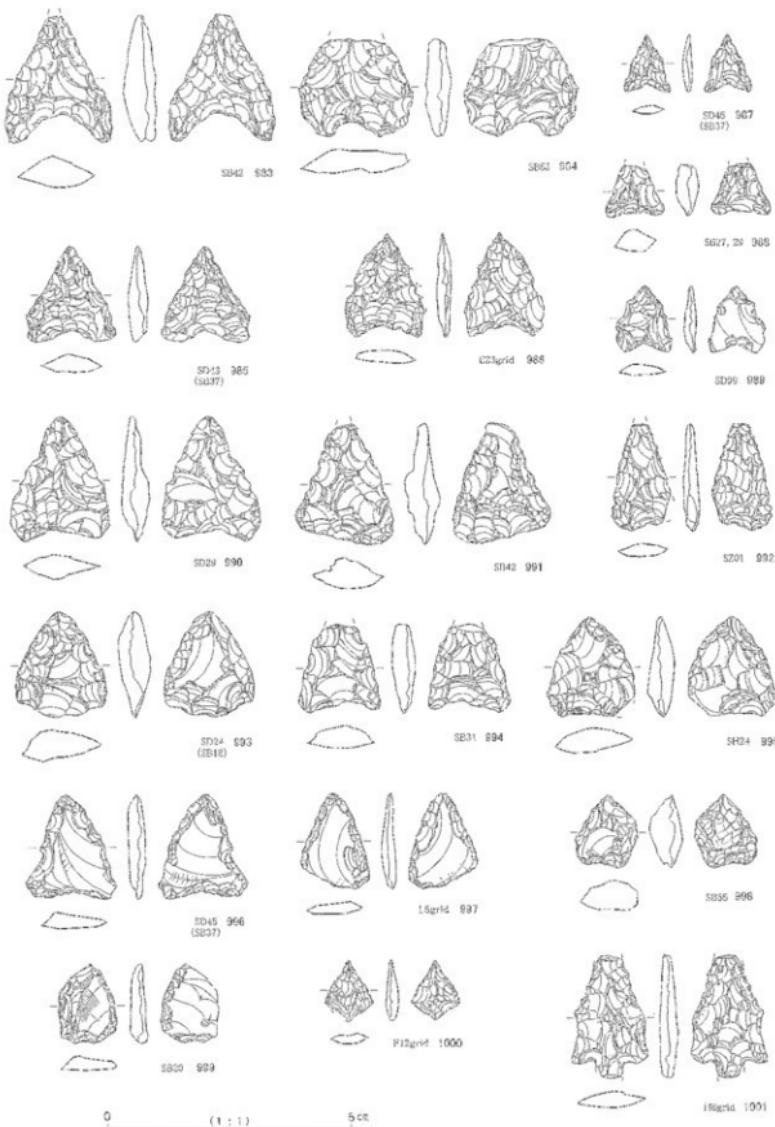
第296図 出土土器39(弥生土器・土師器)

圖297 出土工具40 (漆朱工具・漆刷・漆筆等)



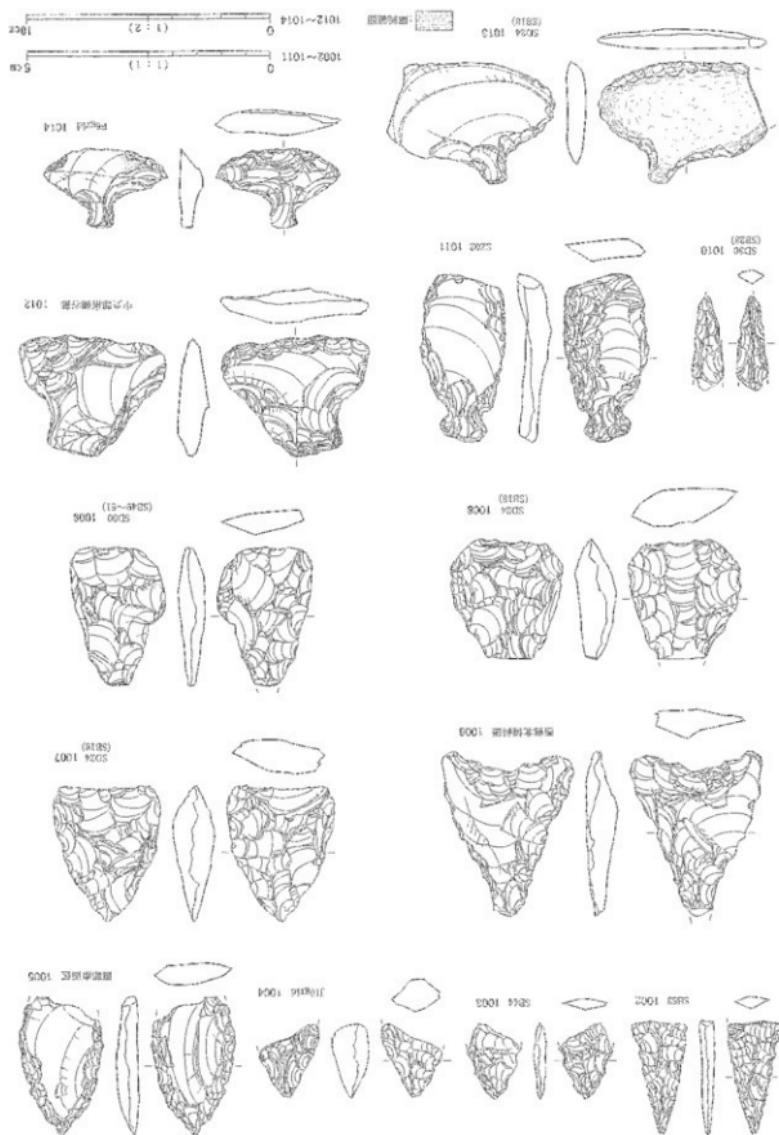


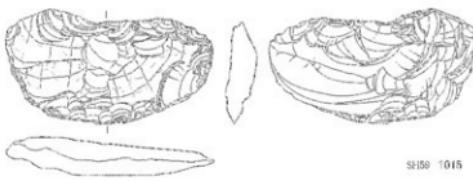
第298図 出土石器1(石縫)



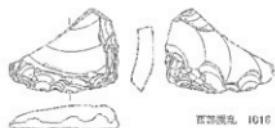
第299圖 出土石器2（石器）

圖300 圖 出土石器 3 (石刀、石鑿、石耙)

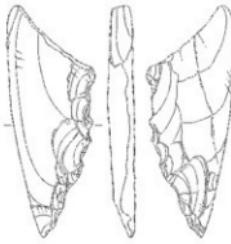




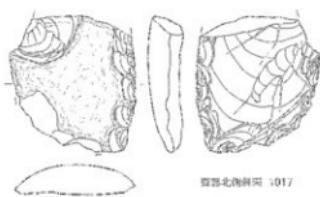
SH159 1015



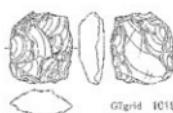
直部圓孔 1016



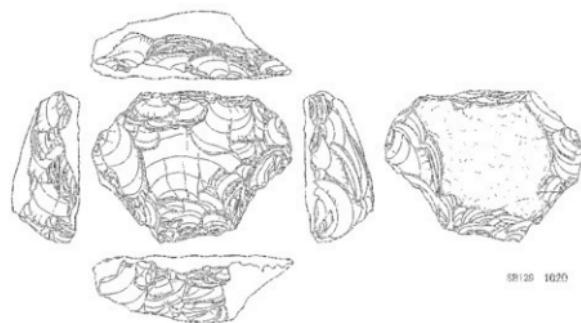
SD39 1018



腹部北側斜面 1017



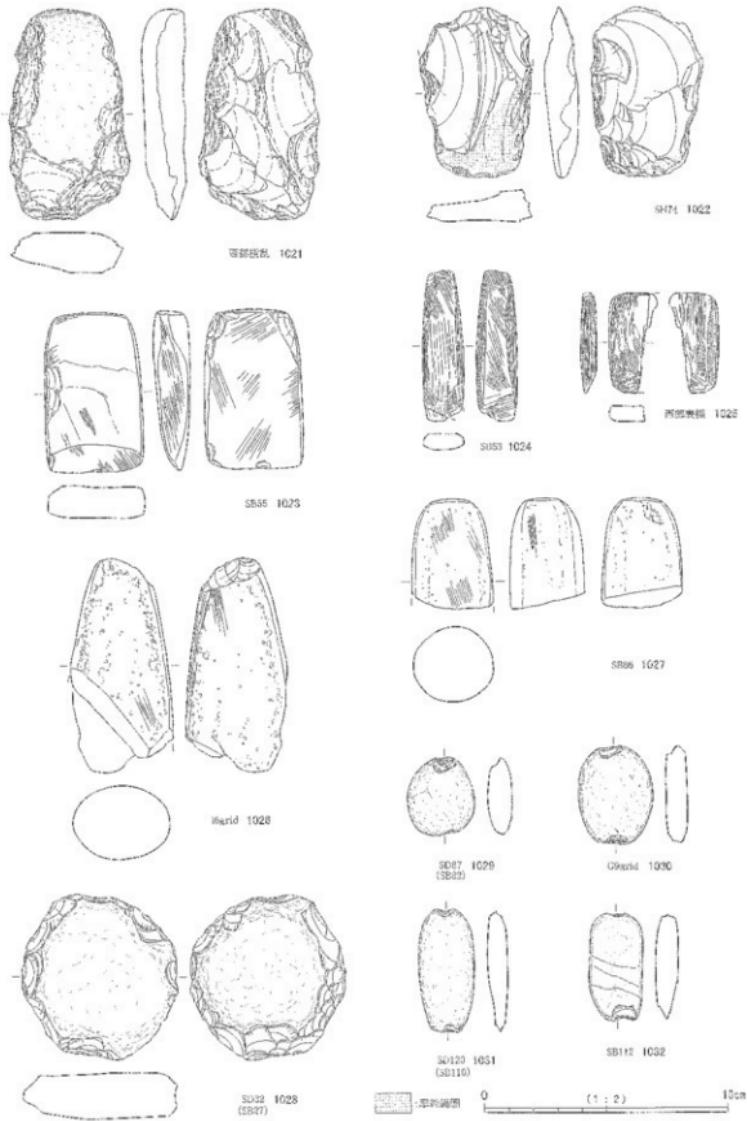
G1grid 1019



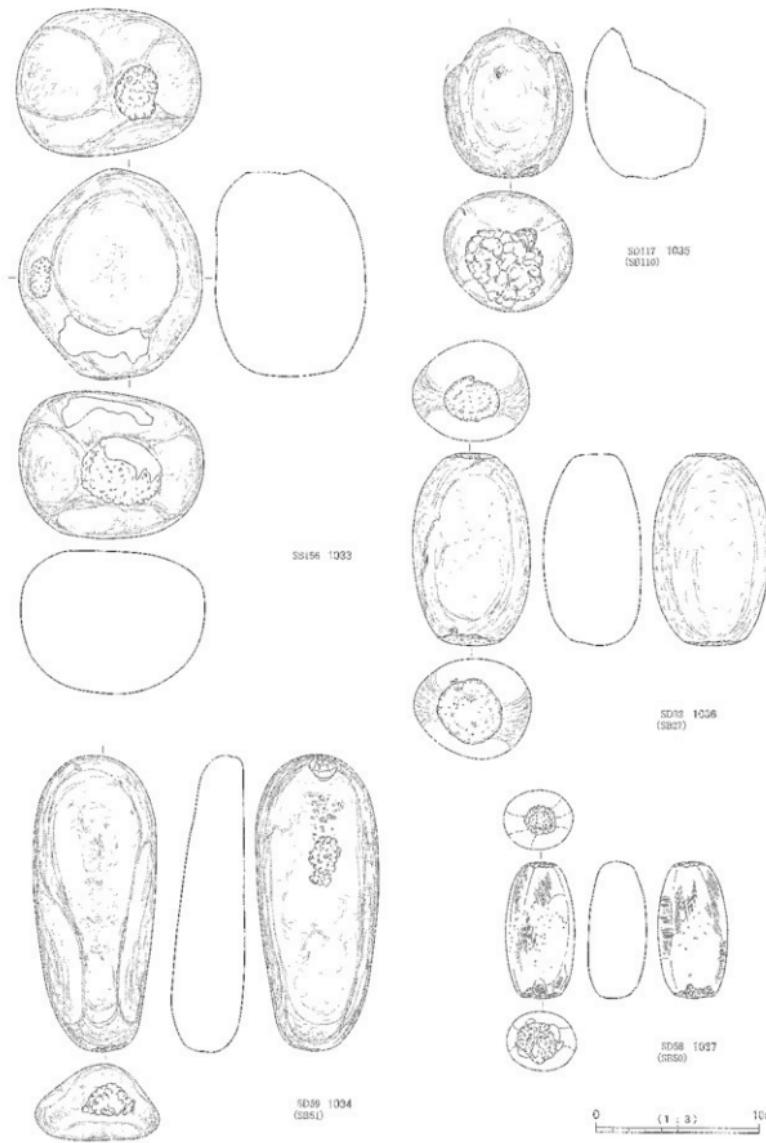
SH120 1020

0 (1 : 2) 19cm

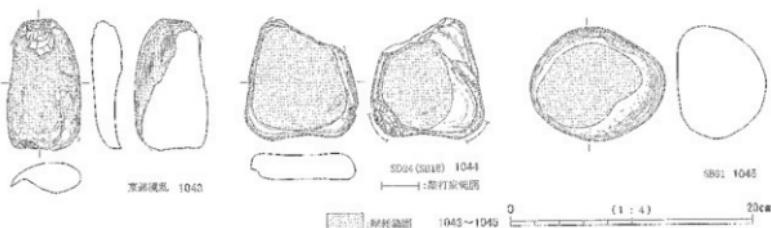
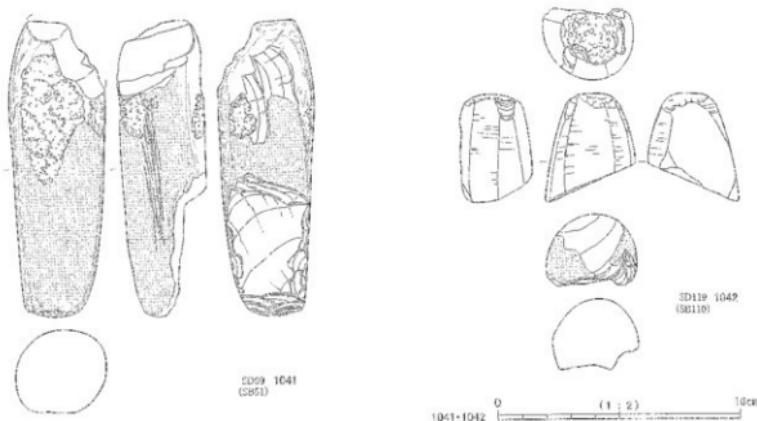
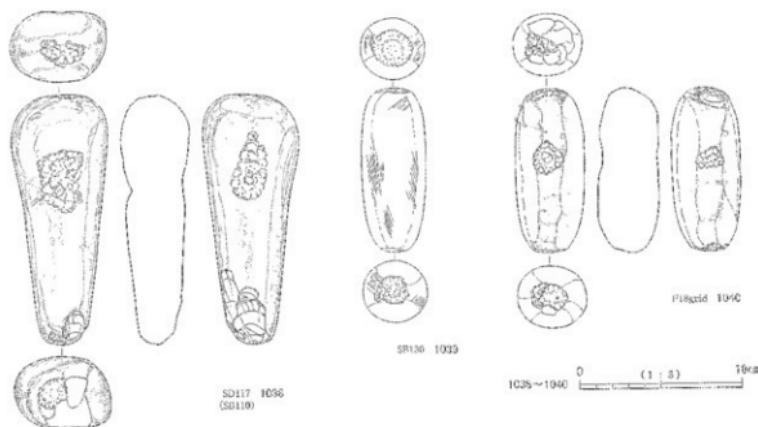
第301図 出土石器 4 (スクレイパーなど)



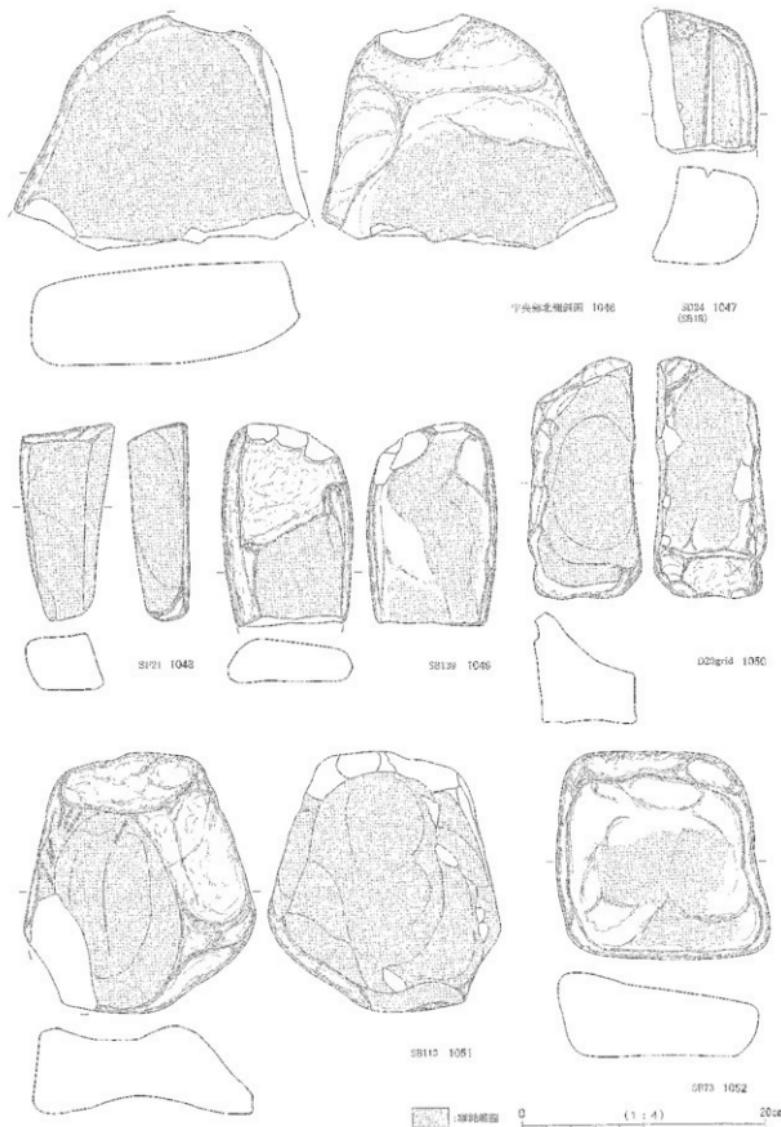
第302図 出土石器 5 (石斧・石錘など)



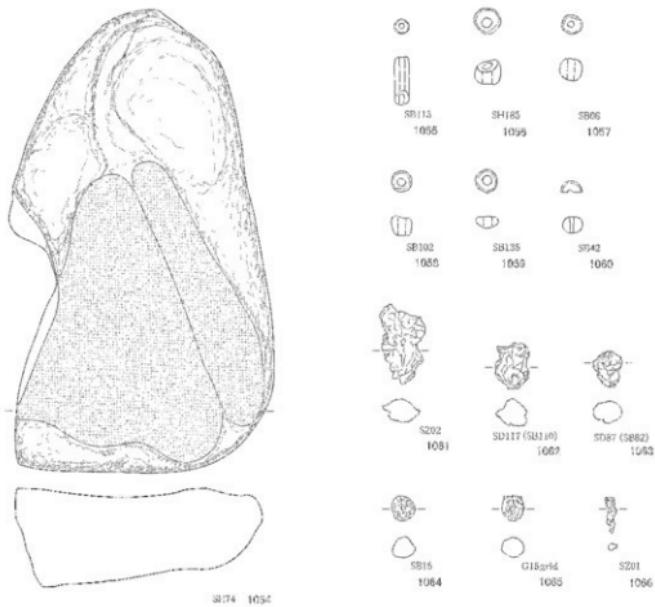
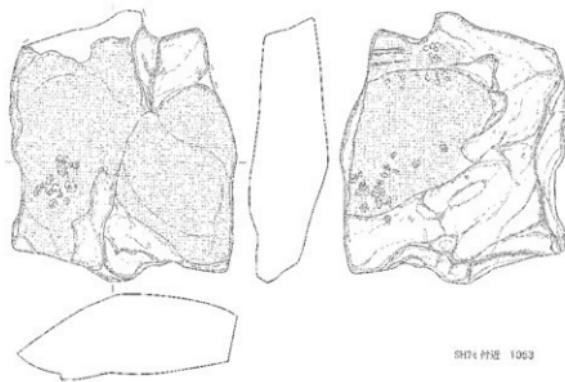
第303圖 出土石器 6 (歛石)



第304圖 出土石器 7 (敲石・磨石)



第305圖 出土石器 8 (砾石・石頭など)



第306図 出土石器9(基石など)、出土玉類、ガラス質の滓



























番号	経路番号	国際番号	出土位置	標識	台科	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	欠損	備考
1035	202		SD147(39-10)	砂岩	砂岩	(2.24)	7.95	7.49	551.7	あり	
1036	203	94	SD12(52-27)	砂岩	砂岩	11.77	7.23	6.17	762.5	なし	
1037	305	94	SD88(54-60)	砂岩	砂岩	8.32	6.29	3.97	181.4	なし	
1038	304	94	SD117(50-10)	砂岩	砂岩	14.31	5.95	4.33	471.5	なし	
1039	204	94	SD148	砂岩	砂岩	16.09	3.82	3.52	255.4	なし	
1040	204	94	SD149	砂岩	砂岩	16.09	4.30	3.85	216.2	なし	
1041	204	94	SD69(34-84)	褐色打斧石/青石	褐色片岩	(12.15)	3.95	3.63	280.9	あり	
1042	304	94	SD110(34-10)	褐色打斧石/青石	褐色片岩	(4.48)	(5.77)	2.65	80.3	あり	解剖使用
1043	304	94	東面地盤	端石	端石	(6.76)	6.30	2.71	220.0	あり	
1044	304	94	SD64(52-16)	砂岩	砂灰岩	(5.88)	9.59	2.35	225.8	あり	
1045	304		SD91	内打	砂岩	11.08	9.51	7.29	1075.8	なし	
1046	205	95	中央底流地盤	打撲	砂岩	(19.38)	(34.34)	2.25	510.0	あり	
1047	205	94	SD44(33-16)	砂岩	砂岩	(11.79)	(6.61)	3.35	195.7	あり	
1048	205	94	SP21	砂岩	砂岩	18.19	7.82	5.00	651.6	なし	
1049	305	95	SD-38	砂岩	砂岩	(16.80)	10.29	4.61	875.1	あり	
1050	305	95	SD-39	砂岩	砂岩	18.52	9.27	3.51	1856.9	なし	
1051	305	95	SD115	砂岩	砂岩	21.35	19.16	9.12	2451.1	あり	
1052	305	95	SD73	砂岩(合石)	砂岩	17.12	17.32	7.52	3324.5	なし	
1053	305	95	SD74(合石)	砂岩	砂岩	(22.29)	15.95	7.41	3319.1	あり	
1054	306	96	SD74	砂岩	砂岩	26.00	(21.66)	13.35	11664.6	あり	

( )は概算値



# 第6章 自然科学的分析

## 第1節 土壤ブロックのCTスキャン分析と炭化米のDNA分析

静岡県掛川市で発掘された上ノ平遺跡では、原野谷川右岸の丘陵上に100棟をこえる堅穴住居跡と60棟を上回る掘立柱建物跡が発見された。また、土坑と住居跡の周辺に巡らされた溝状遺構も13ヶ所が発掘され、弥生土器、土師器やガラス玉などが多数出土した。このように本遺跡は比較的大規模な集落であり、弥生時代末期から古墳時代初頭の周辺地域における拠点的な丘陵上の集落である。遺跡の最も標高の高いSB27より炭化米が出土した。この出土点は平坦部の北西端で、西側の5m先よりかなりの傾斜で落ちていく部分である。この区域は集落域の一一番奥まった比較的高い地域で、住居跡の外側を巡る溝状遺構が多く検出されており、出土地点は数本の溝状遺構と多くの堅穴住居が重なり合った区域であった(第307図)。本分析では埋蔵の状態を推定するために炭化米が密集する部分を含む土塊を取り上げてCTスキャンを行い、おにぎり状の塊が検出された。その七塊から炭化米を選別し、DNA分析を行った。本報告は炭化米を含む土塊の状態でCTスキャンを行った初めての例であり、DNA分析と組み合わせることにより当時の埋もれた状態をより詳細に把握し分析することが可能となった。

### I. 材料と方法

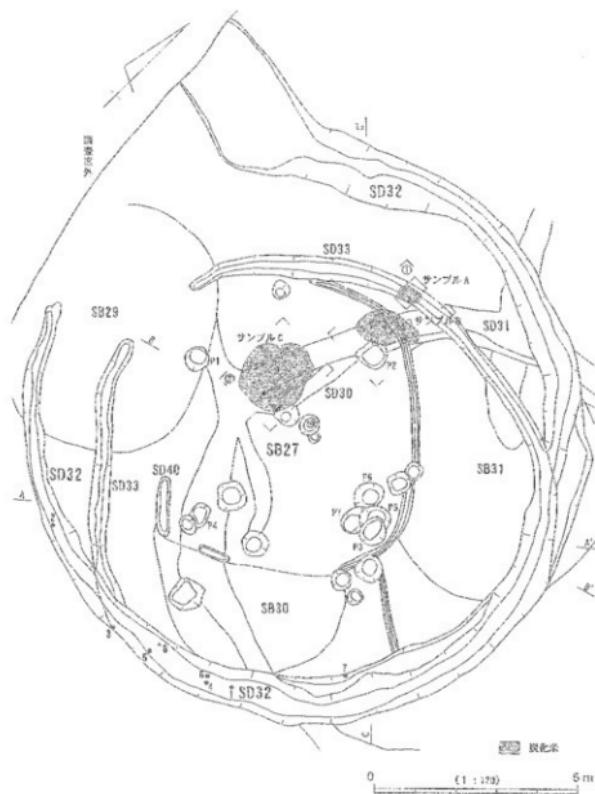
#### (1) 土壤ブロックのCTスキャン分析

炭化米が密集する部分は多数の堅穴住居跡が複雑に切り合った遺構に複数見出された。対象は最も古い住居の周溝の部分などである。周溝の覆土は下層に自然に堆積したと思われる暗褐色土と上層に人為的に埋められた可能性も考慮できる褐色粘質土ブロックと黄褐色砂質土ブロックを多く含む暗褐色土である。いずれの部分でも多数の炭化米が検出された。分析に用いたサンプルはその上層から炭化米の塊を含むように取り上げた土塊(40×60×23cm)である。この土塊は取り上げ後4分割し、ウレタンで包んだのち全体を3cm毎にCTスキャン(東芝メディカルAquilion)を行った。さらに炭化米の密集部分を3mm間隔でスキャンし、炭化米の広がりを立体的に把握した。その後土塊を切断し、炭化米ほかの遺物を回収した。

#### (2) 炭化米のDNA分析

(1)で検出した炭化米のうち破損のないサンプル18点を3CCDデジタル顕微鏡で写真撮影した。分析に用いた材料はサンプルA~Cである(第307図)。これらサンプルのそれぞれから、以下の方法によってDNA分析を行った。まず、サンプルの表面を洗浄後、粉砕のためのマルチビーズとともに1つずつチューブに入れ、マルチビーズショッカー(安井器械製)によって粉砕し、SDS法によってDNAを抽出した。なお抽出方法の詳細はNakamura1990を参照していただきたい。

これらのDNAを録型としてプライマー-CMNS-B20によるPCR増幅を行った。ここでプライマーCMNS-B20は熱帯ジャボニカに固有のDNA断片を検出するためのプライマーとして以前から使われてきたものである。PCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。遺物のDNAは通常PCR法で



第307図 サンプルA～Cの位置

は着幅されない。そこでここでは、1回目の増幅産物をテンプレートとして2回目のPCRを行う、いわゆる2段階PCRを行った。PCR反応によって増幅されたDNAは、寒天を支持体とする電気泳動を行ってDNAを視覚化させた。2つのプライマーは、熱帯ジャボニカに固有のバンドであることが確かめられている。分析の信頼度をさらに高めるため、ここではサザンハイブリダイゼーション法と呼ばれる方法を用いて、当該のバンドが熱帯ジャボニカ品種由来のバンドであることを確認する作業を行った。ここでは、現存のジャボニカ品種（タイ国産の品種Th13）由來のDNAをプローブ（釣り針の意）として用い、遺物由來のDNAにハイブリダイズするかどうかを確認した。この作業は、分子生物学の分野では目的のDNA鑑認の手段としてしばしば用いられてきたもので、バンドが真に遺物由來のものである

ことを確認するための有効な手段である。

さらに、これらのサンプルの葉緑体DNAのPS-ID領域のPCR増幅およびそれによる塩基配列の決定を試みた。PCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。先述のとおり、遺物のDNAは通常のPCR法では増幅されないことから、ここでは、1回目の増幅産物をテンプレートとして2回目のPCRを行う、いわゆる2段階PCRを行った。PCR反応によって増幅されたDNAは寒天を支持体とする電気泳動を行ってDNAを視覚化させ、DNA増幅の確認後シーケンスを行い、塩基配列を決定した。

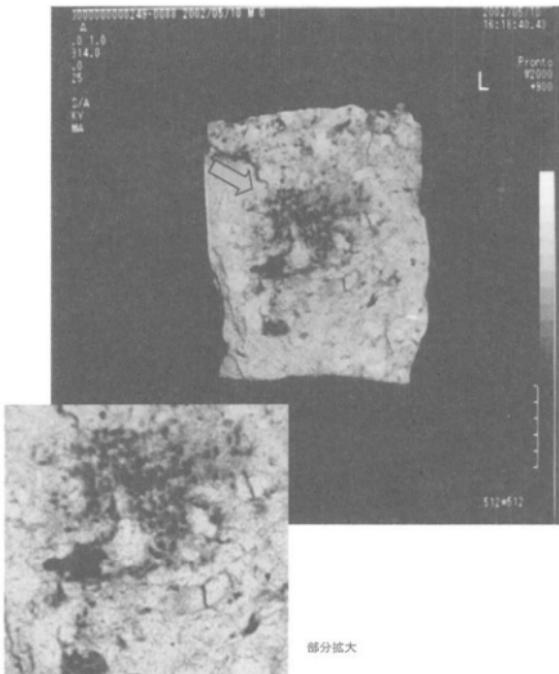
## 2. 結果と考察

炭化米は表層から2.5cmのところまでは比較的まばらに分布し、それより下部には認められなかつたが、表面から5~10cmの深さのところに炭化米と思われる黒色の粒が密集する部分が1ヶ所認められた(第308・309図)。この部分の大きさは鉛直方向に約5.0cm、水平方向に(画面に対して)約5.5cmで、SCAN画像の解析から奥行きは約3cmと推定された。土塊を、SCAN画面の位置で切断したところ(第308図)、黒い粒子は糊状を伴わない炭化米であった。また、穂軸、芒などの構造は認められなかつた。なお、炭化米の塊のほぼ中央に、0.8×1.3×2.0cm程度の、白色で占められた空間があつたが、この実体は不明である。

取り出した炭化米のうち18粒について、その1粒ずつからDNAを抽出したところ、熱帯ジャボニカを示すバンドは増幅せず温帯ジャボニカを示すバンドを持つサンプルが6粒あつた。弥生時代後期の全国の遺跡では熱帯ジャボニカが平均35%検出されていることから温帯ジャボニカのみ出土していることは注目に値する。また、今後はラセン状に解析するCTスキャンを利用して土壤中のねにぎり状の炭化米などを洗浄前に検出し、植物の形状を立体的に再現する。

## 参考文献

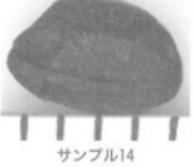
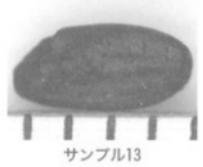
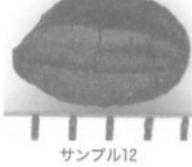
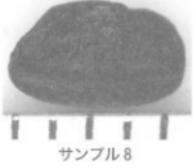
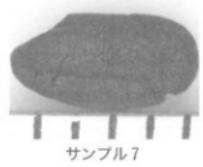
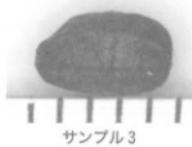
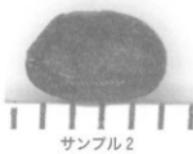
- 佐藤洋一郎 1998 「DNA考古学事始」 DNA多巻6：1-4  
1998 「DNAから栽培と農耕の歴史を探る」『遺伝52』(6)：29-33  
1999 「DNA考古学」 東洋書店  
2000 「縄文農耕の世界」 PHP新書  
2002 「DNA考古学のすすめ」 丸善ライブラリー  
中村部郎 1995 「DNAフィンガープリント法」『植物遺伝育種実験法』 岩倉書店pp113-117  
Nakamura,I. 1990 New DNA Fingerprinting Procedure.Amplified Fragment Length Polymorphism Of Hazy Association (ALPHA).Annu.Rep.Natl.Inst.Genet.41:105-106  
Nakamura,I.and Y.I.Sato 1991 Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient (AD800) by Polymerase Chain Reaction.Chinese J. Rse Sci. 5:17-5179  
Southern,E.M. 1975 Detection of specific sequence among DNA fragments separated by gel Electrophoresis.J.Mol.Biol.95:503-517



第308図 炭化米を含む断面のスキャン画像



第309図 切断面のフィルム写真



第310図 出土炭化米の3 CCDデジタル画像

## 第2節 花粉分析

花粉分析は一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて現存していない場合もある。

### 1. 試料と分析

#### (1) 試 料

試料はSB27の遺構D（サンプルA、01-155地点）と遺構B（サンプルC、01-157地点）より採取された堆積物2点である（サンプルA～Cは前節の第307図参照）。

#### (2) 分析方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村1973を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- i) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- ii) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- iii) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- iv) 水洗した後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- v) 再び冰酢酸を加えた後、水洗を行う。
- vi) 沈渣に石灰酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作成後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、倉島1973および中村1980をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類で一部が属や節に細分できる場合は、それらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村1974・1977を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。また、同時に、寄生虫卵についても計数した。

## 2. 結 果

### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、草木花粉1、シダ植物胞子2形態の計8である。これらの学名と和名および粒数を第9表に示す。主要な分類群は写真に示した。サンプルAではわずかに花粉を検出したが、サンプルCでは花粉は認められずシダ植物の胞子のみが検出された。なお、分析処理中にサンプルCにおいて堆積物1cc中から炭化したイネ果実2粒を検出した。以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

モミ属、マツ属複維管束亞属、スギ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属

[草木花粉]

イネ科

[シダ植物胞子]

單条溝胞子、三条溝胞子

### (2) 花粉群集の特徴

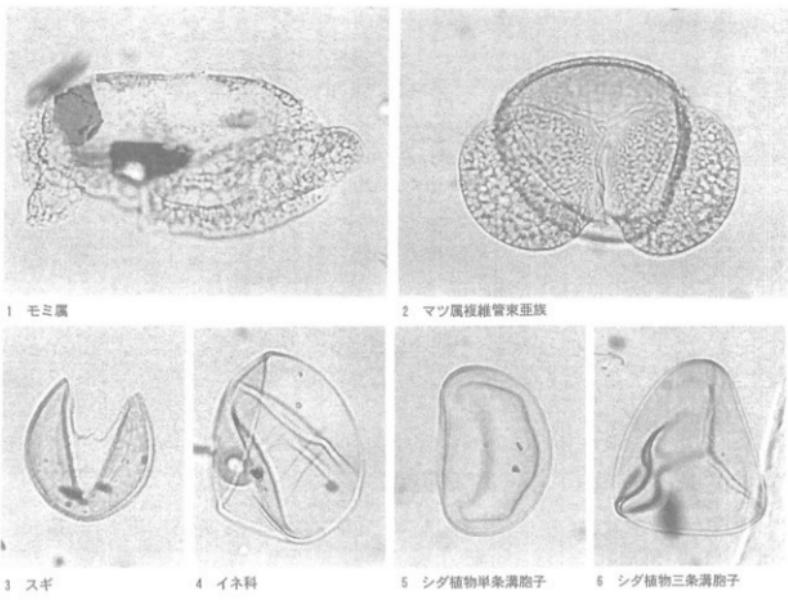
いずれの試料も花粉密度は低い。サンプルAでは樹木花粉のスギがやや多く、單条溝胞子がやや多い。サンプルCでは花粉が検出されず、單条溝胞子が出現する。

## 3. 花粉分析から推定される植生と環境

サンプルA・サンプルCの堆積時は、遺構D・遺構Bとともに花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した環境あるいは乾湿を繰り返すような環境が考えられる。遺構Dではスギ林の分布が推定され、林床に乾燥を好むシダ植物胞子の分布が示唆される。

第9表 花粉分析結果

試料分類群		サンプルA	サンプルC
和名	学名		
樹木花粉	モミ属	Abies	1 0
	マツ属複維管束亞属	Pinus subgen.Diploxylon	3 0
	スギ	Cryptomeria japonica	23 0
	シイ属	Castanopsis	1 0
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	1 0
草木花粉	イネ科	Gramineae	2 0
	單条溝胞子	Nonarboreal pollen	16 4
シダ植物胞子	三条溝胞子	Fern spore	1 1
	樹木花粉群		29 0
	草木花粉群		2 0
	花粉總數		31 0
	未同定花粉		1 0
	シダ植物胞子群		17 5
	寄生虫卵		(-) (-)
	明らかな消化液		(-) (-)



第311図 上ノ平遺跡の花粉・胞子

— 10  $\mu m$

#### 参考文献

- 金原正明 1999 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集
- 中村 純 1973 「花粉分析」古今書院
- 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』
- 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号
- 1980 「日本花粉の素微」大阪自然博物館収蔵目録第13集 1

### 第3節 プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析はこの微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山1984）。

#### 1. 試料と分析方法

##### (1) 試料

分析試料はSB27の遺構D（サンプルA、01-155地点）と遺構B（サンプルC、01-157地点）の堆積物2点である（サンプルA～Cは本章第1節の第307図参照）。

##### (2) 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析方法（藤原1976）をもとに、次の手順で行った。

- i) 試料を105°Cで24時間乾燥する（絶乾）。
- ii) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（電気分析天秤により0.1mgの精度で秤量）する。
- iii) 電気炉灰化法（550°C・6時間）により脱有機物処理を行う。
- iv) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により試料を分散する。
- v) 沈底法により20μm以下の微粒子を除去する。
- vi) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これは、ほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{ g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびミヤコザ節型は0.30である。

## 2. 結 果

検出されたプラント・オパールは、サンプルAでは、イネ、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、その他）および未分類、サンプルCでは、イネ、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第10表および第11表に示す。また主要な分類群の顕微鏡写真を第312図に示す。

## 3. 所 見

サンプルA、サンプルCともイネのプラント・オパールが検出されているが、プラント・オパール密度は1,000～1,700個/gと低い値である。このことから、これらの試料が採取された遺構そのもので稻作が行われていたことは考えにくく、両遺構ともその近辺で稻作が行われていた可能性が考えられる。なお、両試料ともネザサ節型が優勢であり、ススキ属型がみられることから、堆積当時の周辺は比較的乾いた環境であったことが推察される。

第10表 プラント・オパール分析結果1

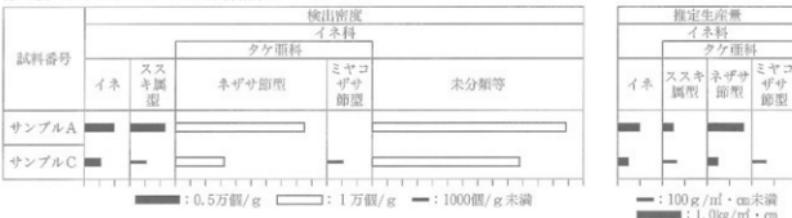
試料分類群		学名	検出密度	
科名	種名		サンプルA	サンプルC
イネ科	イネ	Gramineae (Grasses)	17	10
	ススキ属型		21	5
	ネザサ節型		167	65
タケ亜科	ミヤコザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa type	0	5
	その他	Sasa sect. Miyakozasa type	17	5
	未分類等	Others	257	194
プラント・オパール總数			480	284

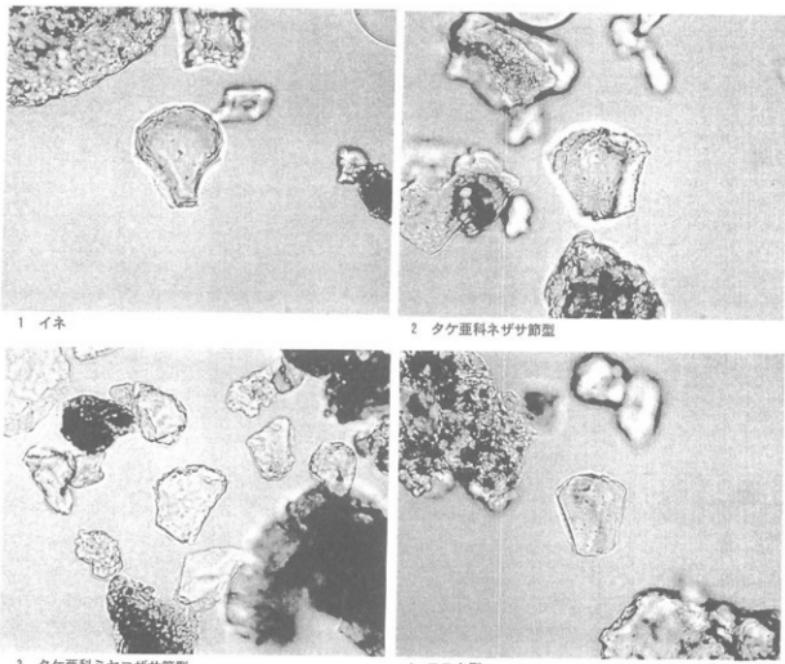
単位: ×100個/g

試料分類群		推定生産量		
科名	学名	サンプルA	サンプルC	
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.50	0.29	
ススキ属型	Miscanthus type	0.27	0.06	
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa type	0.80	0.31	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa type		0.02	

単位: kg/m<sup>2</sup>・cm

第11表 プラント・オパール分析結果2





第312図 プラント・オパールの顕微鏡写真

50  $\mu\text{m}$

#### 参考文献

- 杉山信二 1987 「タケ亜科植物の機動細胞壁體」『富士竹類植物園報告』第31号  
 2000 「植物珪藻体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社  
 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9  
 藤原宏志・杉山信二 1984 「プラント・オパール分析方法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17

## 第4節 炭化材の樹種同定およびC14年代測定・種子の同定

上ノ平遺跡（静岡県掛川市寺島上ノ平所在）は、原野谷川右岸丘陵上に立地する。発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大規模な集落であったことが判明している。今回の自然科学分析調査では、竪穴住居跡や溝跡から出土した炭化材や種実の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得るとともに、炭化材の年代測定を行って、遺構の年代についての情報を得る。

### 1. 試 料

樹種同定用試料は、竪穴住居跡から出土した8点（SB10が1点、SB73が1点、SB143が6点）である。さらに、各遺構から1点ずつ（SB143は状態のよいNo. 5を選択）の計3点を選んで、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施する。種実同定用試料は、住居跡や溝などから出土した8点である。試料の詳細はそれぞれの結果とともに表に記す。

### 2. 分析方法

#### （1）放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で行った。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。曆年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。また、北半球の大気圏における曆年校正曲線を用いる条件を与え、計算させる。

#### （2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

#### （3）種実同定

試料をシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。種実の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか2000）等と比較し、種類を同定し個数を数える。分析後の種実等は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存または乾燥剤を入れ保管する。

### 3. 結 果

#### （1）放射性炭素年代測定

結果を第12・13表に示す。測定結果は、SB10が $1880 \pm 40$ 、SB73が $1790 \pm 40$ 、SB143が $1740 \pm 40$ であ

る。

曆年較正後の結果は、SB10がAD76～211、SB73がAD135～323、SB143がAD243～377である。発掘所見では、弥生時代後期とされるが、年代測定の結果でも、ほぼ調和的な年代が得られている。

## (2) 樹種同定

樹種同定結果を第14表に示す。炭化材は、針葉樹1種類(マキ属)、広葉樹3種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ・クスノキ科)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マキ属 (*Podocarpus*) マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁は、観察した範囲ではらせん肥厚は認められない。樹脂細胞は早材部と晩材部の両方に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激へやや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

## (3) 種実同定

結果を第15表に示す。種実は、全て炭化しており、遺存状態は悪い。被子植物3分類群(木本1分類群、草本2分類群)の種実の他に、炭化材、部位・種類共に不明の炭化物などが確認された。種実は、栽培植物のモモ、イネ、マメ類が同定された。以下に、本分析によって得られた種実・葉の形態的特徴などを、木本、草本の順に記述する。

<木本>

・モモ (*Prunus persica* Batsch) パラ科サクラン属

核(内果皮)の破片が検出された。黒色、完形ならば広楕円体でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した溝がある。破片の大きさは5～17mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れている個体もみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い溝があり、全体として粗いしわ状に見える。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化し黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。長さ4mm、幅2mm、厚さ1.5mm程度。一端に胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2～3本の縱溝がみられる。

・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。全個体とも炭化し黒色を呈す。長楕円体で長さ5～6.5mm、幅3～4mm程度。焼

け彫れ、表面が崩れている等遺存状態は悪く、腹面中央の子葉の合わせ目上にある長楕円形状の孔を欠損する。子葉の合わせ目から半分に割れた1片もみられるが、合わせ目の表面は不明瞭。種皮表面はやや平滑で光沢がある。遺跡出土の炭化マメ類は、その形態からササゲ、アズキ、リョクトウなどの種類を同定する試みが行われている(吉崎1992)。一方で、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいと考えられている(南木1991、南木・中川2000など)。今回検出された種子は、遺存状態が悪いため、現時点では特定種類の比定は控え、今後の資料の蓄積を待ち検討したいと考える。

第12表 放射線炭素年代測定

試料番号			種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
試料1	SB10	床直	コナラ属コナラ並属クヌギ類	1880±40	-29.97±0.88	1960±40	IAAA-40213
試料2	SB73	床直	マキ属	1790±40	-28.53±1.00	1850±40	IAAA-40214
試料7	SB143	床直No. 5	クリ	1740±40	-30.10±0.75	1830±40	IAAA-40215

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5368年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 表記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第13表 历年較正結果

試料	補正年代(BP)	历年較正年代 (cal)										相対比	Code No.		
		cal	AD	76	-	cal	AD	136	cal	BP	1,874	-	1,814	0.069	IAAA-40213
試料 1 SB10 床直	1882± 38	cal	AD	151	-	cal	AD	176	cal	BP	1,799	-	1,774	0.182	
		cal	AD	192	-	cal	AD	211	cal	BP	1,758	-	1,739	0.149	
		cal	AD	135	-	cal	AD	154	cal	BP	1,815	-	1,796	0.114	IAAA-40214
試料 2 SB73 床直	1787± 40	cal	AD	175	-	cal	AD	193	cal	BP	1,775	-	1,757	0.117	
		cal	AD	211	-	cal	AD	260	cal	BP	1,739	-	1,690	0.482	
		cal	AD	280	-	cal	AD	292	cal	BP	1,670	-	1,658	0.086	
		cal	AD	297	-	cal	AD	323	cal	BP	1,653	-	1,627	0.231	
		cal	AD	243	-	cal	AD	342	cal	BP	1,707	-	1,608	0.968	IAAA-40215
試料 7 SB143 床直No. 5	1742± 39	cal	AD	373	-	cal	AD	377	cal	BP	1,577	-	1,573	0.032	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB RRV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用  
計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第14表 樹種同定結果

地点	番号	遺構	出土位置	遺物番号	樹種
No. 104 - 105地点	試料 1	SB10	床直層		コナラ属コナラ並属クヌギ類
	試料 2	SB73	床直層		マキ類
	試料 3	SB143	床直層	No. 1	
	試料 4	SB143	床直層	No. 2	クリ
	試料 5	SB143	床直層	No. 3	
	試料 6	SB143	床直層	No. 4	クスノキ科
	試料 7	SB143	床直層	No. 5	クリ
	試料 8	SB143	床直層	No. 6	クリ

第15表 種実同定結果

番号	遺物番号	遺構名	出土位置	種類	種類名	部位	状態	個数	大きさ
試料 9	2561	SD43		堅果種子	モモ	核	破片	1	17mm
試料10	915	SD58		堅果種子	モモ	核	破片	3	
試料11	2541	SD100		堅果種子	モモ	核	破片	1	
試料12	65	SD124		堅果種子	モモ	核	破片	5	
試料13	1443	SH60 P 5		堅果種子	モモ	核	破片	5	
試料14	1319	SB10	腐土	種子	イネ	胚乳	炭化	1	4 mm 2 mm 1.5 mm
試料15	1848	SB31	床面	種子	マメ類	種子	炭化	17	5.5-6.5 mm, 4 mm
う-16	1580	SD24		種子	炭化物	殻片	炭化	4	
								6	

#### 4. 考 察

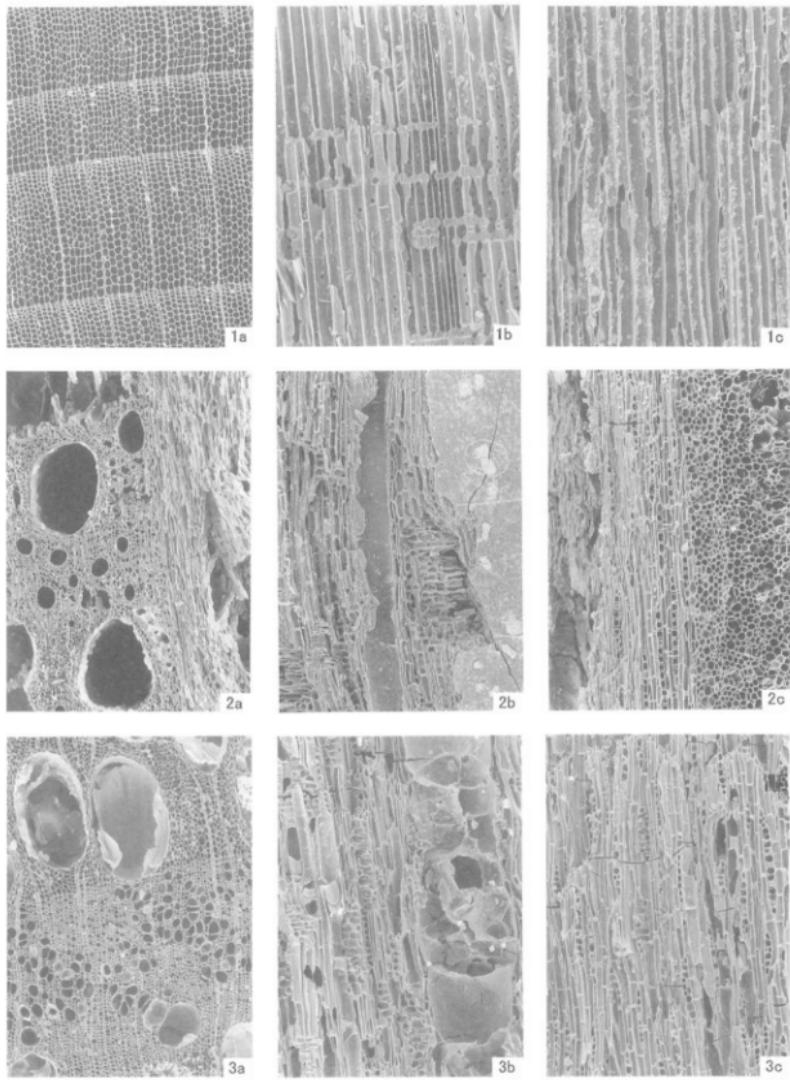
炭化材が出土した竪穴住居跡は、いずれも弥生時代後期と考えられている。炭化材のうち、SB143から出土した6点（試料3～試料8）については、出土状況が記録されている。SB143は床面が梢円形を呈し、長軸方向は南北で、中央よりやや北よりに炉跡がある。炭化材は、住居西壁付近に集中しており、軸方向が壁に平行になるものと、壁と直交する方向になるものがある。いずれも棒状を呈し、長さが50cm近い炭化材もある。この状況から、垂木等の住居構築材に由来していることが推定される。

SB143から出土した炭化材6点は、クリが4点、クスノキ科・マキ属が各1点であった。出土位置が一ヶ所に集中しているため、クリについては同一個体に由来する可能性も否定できない。したがって、SB143の西壁付近では、少なくとも3種類の部材が利用されていたことが推定される。確認された種類は、クリが重硬で強度および耐朽性に優れた材質を有する。また、マキ属も針葉樹としては重硬であり、耐水性や防虫性に優れる。クスノキ科は、多くの種類があり、得られる木材の径、長さ、強度等が異なるが、多くの種類が防虫性分である樟脑を含有している。これらの材質から、住居構築材として、重硬で強度の高い木材を中心に利用していたことが推定される。

一方、SB10とSB73から出土した炭化材については、出土状況の詳細が不明である。SB10はクヌギ節、SB73はマキ属であった。SB10から出土したクヌギ節も重硬で強度の高い材質を有する。したがって、SB10とSB73でも重硬で強度の高い木材が利用されていることが推定される。

浜松市中平遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が行われている（山内1982）。その結果では、1軒がコナラを中心クリ、カシ属、スギが混じる組成で、もう1軒は全点がクヌギに同定されている。スギを除けば重硬で強度の高い木材である。本遺跡で確認されている種類も含まれており、木材利用の傾向は似ている。ただし、本地域における弥生時代後期の住居構築材の樹種についての分析例は少ないため、今後、さらに多くの資料を蓄積し、さらに立地や住居の形態による木材利用の差異等を検討する必要がある。また、袋井市にある川田・藤藏測遺跡の花粉分析結果をみると、シイ・カシ類など常緑広葉樹を主とする組成を示している（パリノ・サーヴェイ1996）。今回検出された木材は、この花粉分析結果と一致する種類であるため、周辺の山野から採取し利用したものと考えられる。ただし、花粉化石では希にしかみられないクリが木材としては多用されているなど、樹種を選択して用いていることが示唆される。今後周辺植生に関する資料をさらに蓄積し、比較検討を行いたいと考える。

種実遺体同定の結果、住居跡の周囲をめぐる溝や掘建柱建物跡から検出されたモモや、竪穴住居跡から検出されたイネ、マメ類は、いずれも古くから栽培のために渡来した植物であり、弥生-古墳時代では多くの出土例がある（南木1991）。モモは観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。穀類のイネやマメ類は、胚乳や種子が食用される。遺構から検出された状況を考慮すると、上ノ平遺跡でこれらが利用されていたと考えられ、また周辺での栽培が示唆される。これらは全て炭化しており、共に炭化材が検出される試料もあることから、共に火熱を受けたことが推定される。



1. マキ属（試料2）

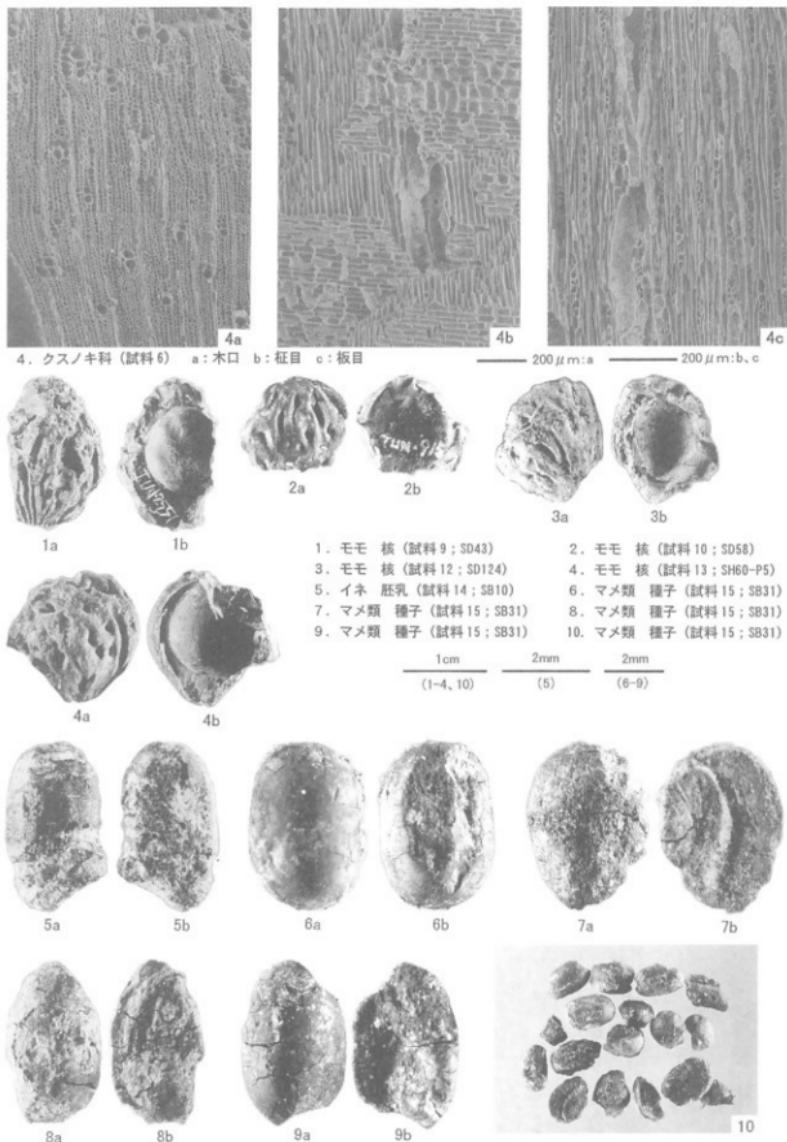
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料1）

3. クリ（試料5）

a : 木口 b : 祁目 c : 板目

— 200  $\mu$ m:2・3a  
— 200  $\mu$ m:1a, 2・3b, c  
— 100  $\mu$ m:1b, c

第313図 上ノ平遺跡の炭化材1



第314図 上ノ平遺跡の炭化材 2・種実遺体

## 参考文献

- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会
- 南木賀彦 1991 「栽培植物」「古墳時代の研究4 生産と流通I」 石野博信ほか編 雄山閣
- 南木賀彦・中川治美 2000 「大型植物遺体」「越後湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 草津湖底遺跡 自然流路 (栗津湖底遺跡III)」 遷賀県教育委員会・財團法人遷賀県文化財保護協会
- 中山至大・井之口香秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1996 「川田・藤戸湖遺跡」「二級河川宇刈川住宅地調査公共施設整備促進(小規模)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告82』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山内 文 1982 「中平遺跡出土炭化材・木材の樹種同定」「西鶴江 中平遺跡」 浜松市教育委員会
- 吉崎昌一 1992 「古代穀穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』No.355, 2-14

## 第7章 まとめ

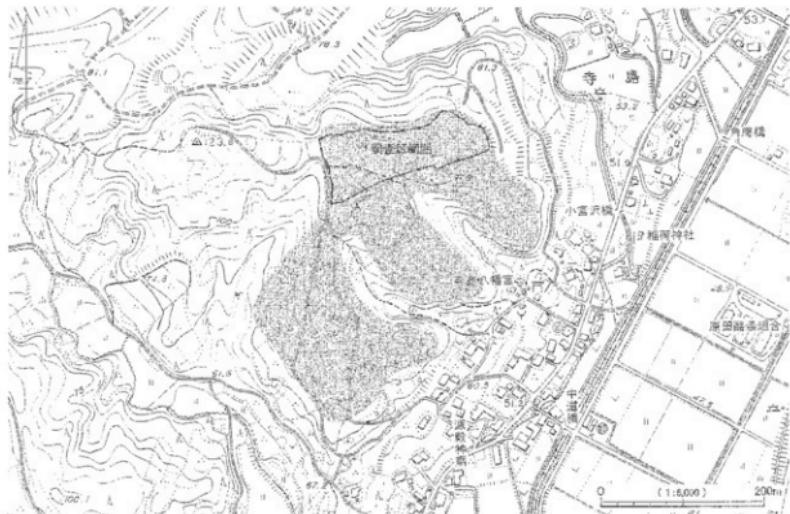
### 1. はじめに

静岡県掛川市上ノ平遺跡は、原野谷川上流域の丘陵上に立地する遺跡である。今回の発掘調査では、調査区の範囲が遺跡の北部に限定されているにもかかわらず、多くの遺構・遺物が発見され、遺跡の特徴や形成過程について把握できる調査成果を得ることができた。

調査区の範囲は、東にのびる丘陵上平坦面を中心とし、東側の斜面際、北側の斜面際までを含む。調査区内では、茶畠などによる削平の影響が広く認められる中にあって、縄文時代から近世に至る多くの遺構・遺物が発見され、遺跡形成時の地形的特徴も残されていた（第316図）。調査区の中央には、南にのびる谷地形が検出された（以下、中央谷）。調査区内における丘陵上平坦面は、その谷を境にして東西に分かれる（以下、東部と西部）。

発見された遺構・遺物の大半は、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡に該当する。調査区全体に住居跡や掘立柱建物跡などが重なり合いながら分布しており、弥生時代後期～古墳時代前期の土器などが多く出土している。その他の時代については、縄文時代の遺構・遺物と古代の遺構・遺物について特筆することができる。

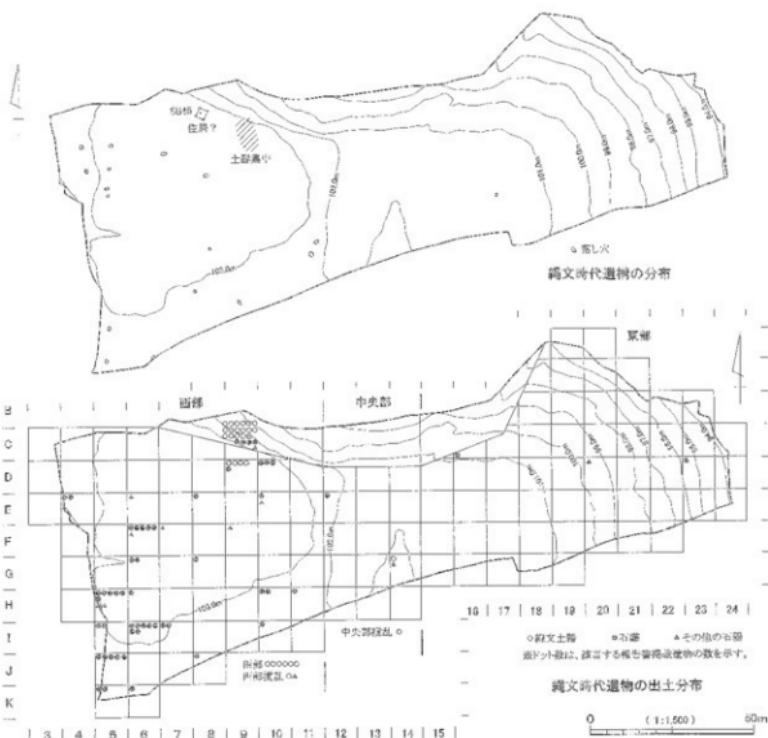
**縄文時代の遺跡形成** 縄文時代については、西部を中心として点在する十数基の落し穴が発見されており、西部の北斜面際から縄文時代中期の土器、西部の各所から石器が出土している。遺構・遺物の共通した分布傾向から、西部を主体とした縄文時代の営みを把握することができる（第316図）。



第315図 上ノ平遺跡全体図

しかし、落し穴・石礫の分布と土塁が多く出土した場所（土器集中範囲）とは露らない。落し穴の機能と土塁の役割について考えてみても、両者は決して強い関係性にあるとはいえない。したがって、土器集中範囲については、落し穴とは異なる営みがあった可能性が指摘できる。土器集中範囲の北西側では、他よりも深い炉と焼土・炭化粒を含む特徴的な壇上の主柱穴4基が発見されている（SB46）。この住居跡については、弥生・古墳時代の住居跡とは大きく異なる特徴をもつことから、縄文時代のものである可能性が指摘できる。そして、土器集中範囲については、弥生時代の住居跡や方形周溝墓が集中していることから、完全に破壊された縄文時代の住居跡などがあった可能性が考慮される。

以上のように、縄文時代中期においては、数軒の住居跡と点在する十数基の落し穴による、丘陵上の遺跡形成を把握することができる。決して主要な集落跡であるとは評価できないが、この場所が広い活動領域内における営みの一端を追っていたと判断することはできる。なお、本遺跡よりも上流域に位置する平島I～III遺跡においても、数軒の住居跡と点在する落し穴が発見されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所2005）。段丘上に立地する遺跡であり、本遺跡と類似した縄文時代中期の遺跡形成として評価することができる。



第316図 縄文時代に関する全体概要

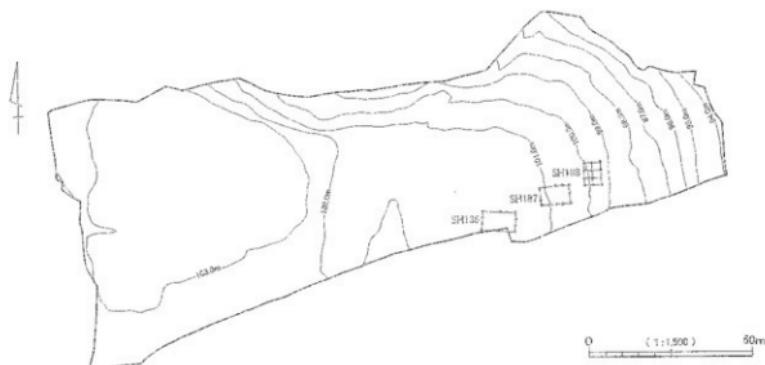
**古代の建物の可能性** 弥生時代後期～古墳時代前期の集落形成が終焉を迎えた後については、古墳時代後期～近世までの遺物が出土しているものの、その量は非常に少ない。平安時代～近世の遺物（陶器・かわらけ）の出土は、西部にかたよる。の中でも、近世のかわらけについては、西部の焼き場とした場所からの出土であり、焼却跡か火葬跡の可能性が指摘できる（第1分冊の第13図）。

古墳時代後期～奈良時代の遺物（土師器・須恵器）の出土は、平安時代以降の遺物の出土とは逆に、東部にかたよる。遺物の出土分布の違いから、古墳時代後期～奈良時代においては、平安時代以降とは異なる営みがあった可能性が指摘できる。

その東部では、 $2 \times 3$ 間や $3 \times 4$ 間の比較的大きな掘立柱建物跡が3棟検出されている（SHI35・SHI187・SHI188）。百数十棟が分布する弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物跡については、基本的に梁行1間のもので占められている。こうした中にあって、2間や3間の梁行をもつ大型のSHI35・SHI187・SHI188は、異質な存在として捉えることができる。さらに、SHI188については、總柱になる可能性があるという特徴も加わる。以上のような本遺跡における特異性を評価したとき、また、遠江の遺跡を概観したとき、このような特徴をもつ掘立柱建物跡については、弥生時代後期～古墳時代前期の集落に伴うものではなく、古代以降の可能性が考慮される。なお、遠江における6世紀～11世紀の建物跡について分析した研究（丸杉2004）によると、SHI35・SHI187・SHI188のような30～50mの建物跡は、7世紀以降に認められるようになることがわかっている。

SHI35・187・188の3棟は、重なり合う遺構の全てを切っており、最も新しい遺構として捉えることができる。そして、先述のとおり、古墳時代後期～奈良時代の遺物の出土は、この3棟が分布する東部にかたよる。以上から、断言できる根拠があるとはいえないが、東部に古墳時代後期～奈良時代の営みがあり、その時期の遺構として、SHI35・187・188の3棟の建物跡が該当する可能性を指摘することができる（第317図）。

**本遺跡の主体時期** 既に述べているとおり、本遺跡で発見された遺構・遺物の大半は、弥生時代後期～古墳時代前期に該当する。この時期の住居跡・建物跡などは、調査区のほぼ全域にわたって密集するように検出されており、弥生土器や土師器が多く出土している。弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡に限定して、上ノ平集落といつても過言ではないと考える。以降においては、この上ノ平集落について検討する。



第317図 古代の可能性が高い遺物跡の分布

## 2. 集落跡を構成する遺構

### (1) 住居跡の種類と時期・分布

住居跡は180軒以上が発見されているが、住居部分の形態と構造、周溝の有無、周溝の幅や形態などにおいて、多様な形態・構造を認めることができる。また、これらは密接しており、重複し合った状態で検出されている。出土遺物をみても、時期差を伴うことは明らかである。そこで、住居跡の構造・形態の違いと時期との関連について検討する。

住居跡の分類 本遺跡の住居跡は、住居部分の構造と形態、住居の周囲をめぐる溝（周溝）の有無、その溝の形態によって分類することができる。

住居部分については、竪穴式の住居跡と、明確な竪穴状に検出されなかった住居跡がある。ただし、本遺跡は茶畠の削平を伴うことから、後者も竪穴式であった可能性を考慮する必要がある。したがって、相対的に床面が高くなる点は指摘できるが、完全な平地式として明示できるものはない。竪穴住居跡の形態については、全般的な傾向から圓丸長方形・楕円形・方形に分類することができる。圓丸長方形と楕円形については、個体差が多く、両者の識別が困難な場合も少なくない。ただし、主軸方向に異なる傾向があり、部分的には規格的な住居跡群を確認することができる。

周溝については、周溝のない住居跡、幅の狭い周溝をもつ建物（住居）跡、幅の広い周溝をもつ建物（住居）跡に分類することができる（註1）。その一方で、周溝の平面形によって楕円形・円形・方形に分類することもできる。

幅の狭い周溝については、隅丸方形や楕円形の竪穴住居部分を伴う場合が多い。周溝は断面箱形になる部分があり、幅の変動が少ないこと、土器の出土が非常に少ないと、恒常的な溝になっていた可能性が指摘できる。住居周辺の外縁として機能した可能性などが考慮される。

幅の広い周溝については、住居部分が竪穴状に検出されなかった場合が多い。竪穴・床面・炉跡とともに、断続的な壁面や不明瞭な掘方が検出される場合があることから、完全な平地式ではなかったと復元できる場合もある。しかし、相対的に住居部分が浅くなっていることは確かである。その一方で、周溝の覆土において、内側からの土の流入が顕著であると把握できる場合が多く、周溝と住居部分との間に堤を伴う可能性が指摘できる。周溝と強固な堤によって、住居部分が浅くなったのではないかと予測される。覆土は基本的に自然堆積であり、周溝内からは多くの土器片が出土している。したがって、住居の周囲をめぐる溝として存在していたことがわかる。周溝が途切れる場合があり、出入口の存在を予測させる。さらに、途切れた端部に溜りを伴う場合があり、そこから多くの土器片が出土している。溜り部の有無によって細分することもできる。周溝平面は円形が多く、一部に方形化したものがある。

以上から、本遺跡の住居跡を下記のように分類する（第318図）。

周溝のない住居跡（竪穴住居跡）…「圓丸長方形住居跡」

「楕円形住居跡」

「方形住居跡」

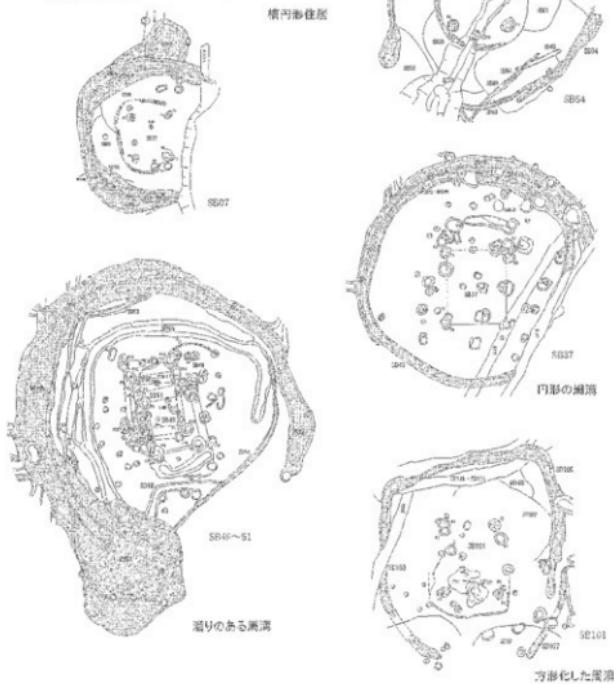
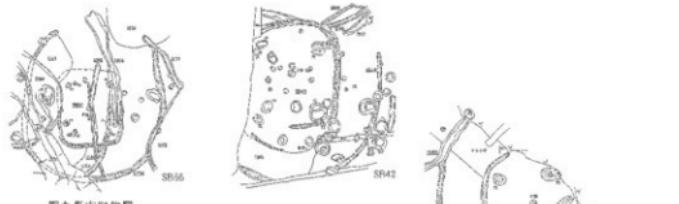
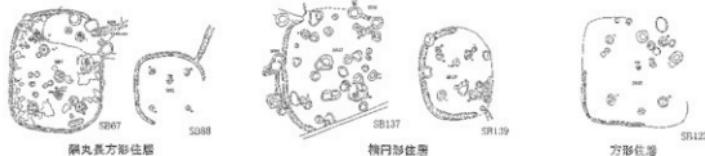
周溝をもつ建物跡…「幅狭周溝をもつ建物跡」

「幅広周溝をもつ建物跡」

\*周溝に溜り部がある場合、「幅広（有溜）周溝をもつ建物跡」などとすることがある。

\*竪穴式の住居部分がある場合、「幅広周溝をもつ竪穴住居跡」などとすることがある。

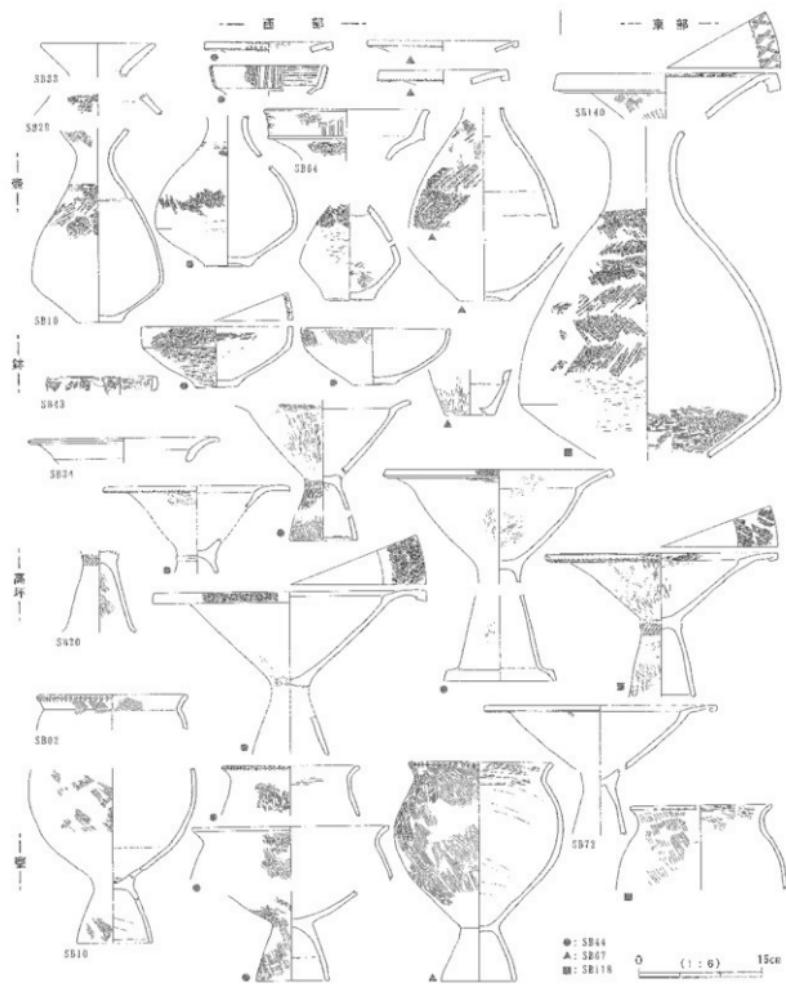
\*住居部分の形態がわかるものは、「幅狭周溝をもつ楕円形住居跡」などとすることがある。



0 (1:300) 10m

第318図 住居跡の分類

住居跡の時期 各遺構の時期は、出土した遺物の縦年的位置と遺構間の切り合い関係によって判断することができる。しかし、出土遺物が少ない遺構や切り合い関係が判然としない場合も少なくない。全ての住居跡について、詳細な時期を個別に特定することは難しい。そこで、先に分類したそれぞれの形態・構造について、時期的な傾向を把握する。なお、住居分類ごとの主な出土土器を第319図～第323図にあげた。



第319図 隅丸長方形・梢円形住居跡の主な出土土器

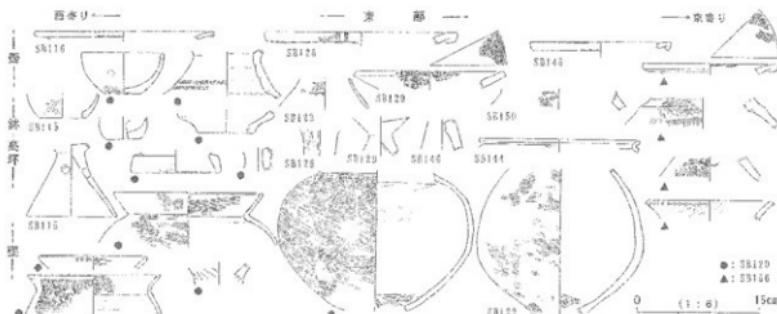
周溝のない住居跡のうち、隅丸方形・楕円形の竪穴住居跡の出土土器（第319図）には、脇部に広く縄文を施した壺などといった菊川様式古段階のものが目立ち、そこに中段階のものが加わる（註2）。したがって、この形態の住居跡の時期は、弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づけることができる。さらに、出土土器の詳細や遺構の切り合い関係をみると、楕円形の住居跡よりも、隅丸方形の住居跡の方が古い段階に位置づけることができる。以上から、集落形成初期の住居跡は隅丸方形の竪穴住居跡であり、それに続いて楕円形の竪穴住居跡に変化していったことが把握できる。

周溝のない方形の竪穴住居跡から出土した土器には、結節縄文を多用する菊川様式最新段階の土器と古式土師器が混在する（第320図）。弥生時代後期末葉～古墳時代前期に位置づけることができ、この集落の最終段階の住居跡であると把握することができる。

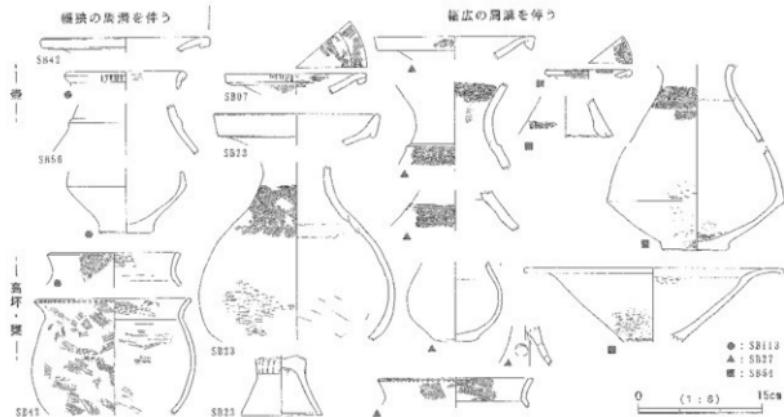
幅狭周溝をもつ建物跡は、出土遺物が少ない。菊川様式最新段階や古式土師器の出土はないが、明確に菊川様式古段階に位置づけできるものもない。遺構の切り合い関係は、隅丸方形・楕円形住居跡を切り、後述の幅広周溝をもつ建物跡に切られている場合が多い。以上から、この形態の住居跡の時期については、弥生時代後期中葉のあたりに位置づけできる可能性が評価できる。なお、幅狭周溝には楕円形住居を伴う場合が多いが、SD70だけは隅丸長方形住居（SB56）を伴う。先述した隅丸長方形住居跡と楕円形住居跡との比較を参照すると、SB56の方が他よりも古い可能性を指摘することができる。

幅広周溝をもつ建物跡については、住居部分の違いや溜り部の有無に拘らずなく、菊川様式新段階～最新段階および古式土師器の出土を多く確認することができる（第321～323図）。一部に中段階の可能性がある土器が含まれているが、重複する古い住居跡の土器が混在している可能性が考慮されるほか、住居跡の建て替えや周溝の再設定・再掘削が非常に多く、一定期間の幅を考慮する必要もある。以上から、全体的な傾向としては、弥生時代後期後葉～末葉を主とする判断ができるが、一部のはじまりが後期中葉にさかのぼる可能性、一部の終りが古墳時代初頭にまでさかのぼる可能性があると判断できる。

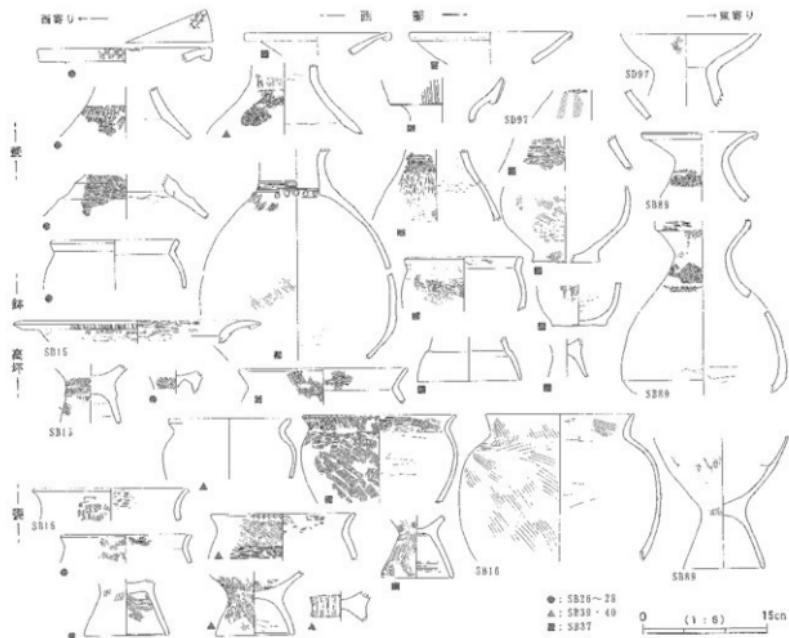
幅広周溝をもつ建物跡の中で、比較的古い土器が出土しているものとして、SB54をあげることができる（第318・321図）。楕円形の竪穴住居を伴い、周溝の平面形も楕円形を呈している。他の幅広周溝をもつ建物跡にはない特徴であり、むしろ、幅狭周溝をもつ建物跡に近い。周溝の幅をみると、西～南部は狭く、丘陵斜面のある北寄りが綱広になることがわかる。以上から、SB54は幅狭周溝から幅広周溝への過渡的な特徴を伴う住居跡であると評価することができる。



第320図 方形住居跡の主な出土土器

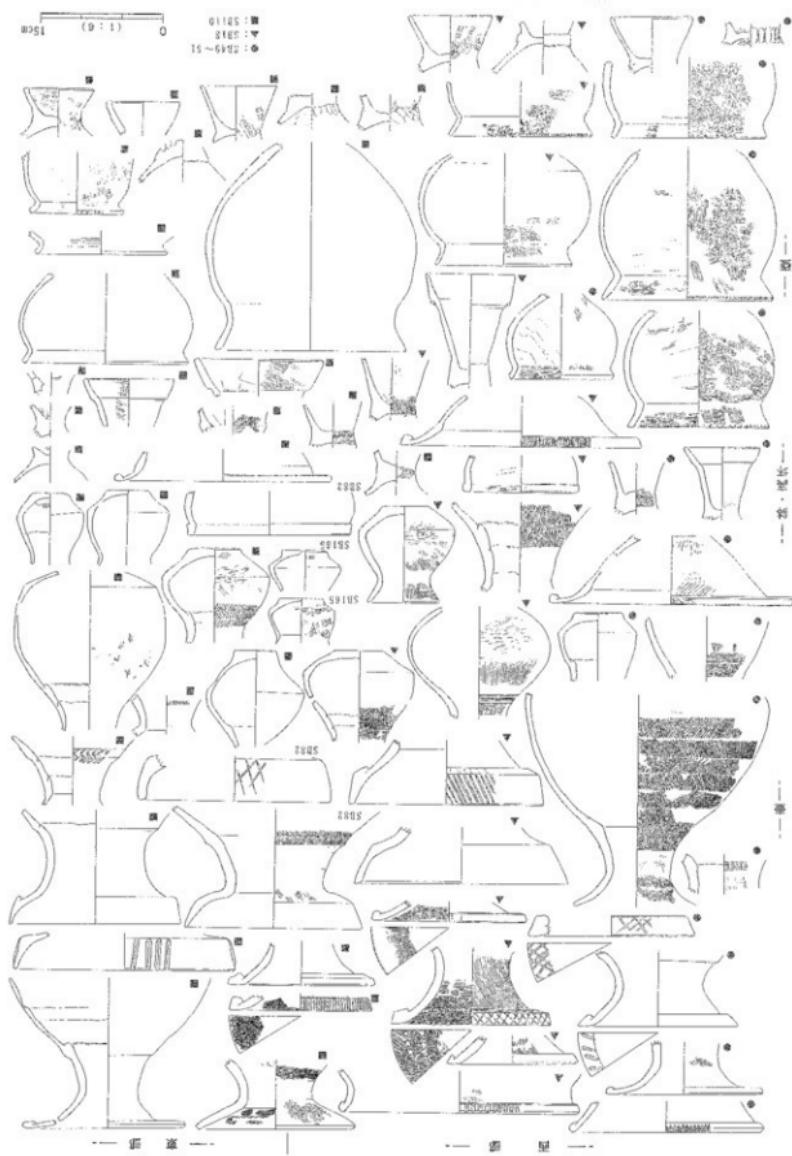


第321図 幅狭周溝をもつ建物跡、幅広周溝をもつ竪穴住居跡の主な出土土器



第322図 幅広（無溝）周溝をもつ建物跡の主な出土土器

圖323圖 錫山(有源)周易在古土壤標跡的主要出土土器



その他の幅広周溝をもつ建物跡については、出土土器や切り合い関係などから、幅狭周溝をもつ建物跡およびSB54よりも新しい住居跡であると判断することができる。そして、住居部分が竪穴状に検出されない場合が多くなり、周溝がめぐる平面形が正円化もしくは方形化するという変遷を指摘することができる。幅広周溝は、同じ場所でつくり替えている場合（幾度にも周溝が廻る場合）があり、その場合、周溝幅は広くなり、平面形は大きくなるという変遷傾向を把握することができる。ただし、別の住居跡においては、周溝幅や平面規模が時期差の指標になるというわけではない。なお、周溝から古式土師器が出土している住居跡があるが、菊川様式の土器に比べて少數の出土である。幅広周溝のとくに溜り部では、上層から中世の上器が出土する場合もあり、住居跡よりも新しい時期の土器片が混在する可能性が高いと判断できる。幅広周溝をもつ建物跡について、基本的には方形住居跡（古墳時代前期）の前段階の住居跡として把握することができる。

**住居跡の分布** 本遺跡の中で最も古い段階（弥生時代後期前葉）の住居跡は、隅丸長方形住居跡である。その分布は、第324図上段にみるとおりに東西等しく認めることができる。さらに、斜面（丘陵斜面や中央谷）に近い場所に多く、東部・西部それぞれの平坦面中央が分布の空白になっていることがわかる。分布密度と排水溝の方向によって、数軒ごとのまとまりを抽出することができることから、排水溝を長く設ける必要のない斜面寄りの範囲の中で、いくつかの場所に分かれて住居群が設けられたと把握することができる。なお、隅丸長方形住居跡の主軸方向について、比較的急な傾斜地に立地する場合を除いて、大半は北西方向もしくはその直交方向に概ね統一されていることがわかる。さらに、幅広周溝をもつ隅丸長方形住居跡（SB54）も、同じ方向を向いている（第324図下段）。先述の時期的な位置づけと合わせて、類似性を指摘することができる。

次段階（弥生時代後期中葉にかけた時期）の住居跡としては、橢円形住居跡をあげることができる。分布の特徴について、東西の差が大きくなること、平坦部中央に分布の空白があることなど、前段階と変わらない点が多い（第324図中段）。しかし、東側斜面における増加を確認することができる。一方、主軸の方向については、前段階の隅丸長方形住居跡とは異なり、南北方向もしくはその直交方向を向く場合が多くなる。なお、幅狭周溝をもつ橢円形住居跡も同様の分布と方向を示すことから、類似性を指摘することができる（第324図下段）。

弥生時代後期後葉～末葉には、幅広周溝をもつ建物跡が主体となる。住居の構造について、幅狭周溝をもつ建物を介して幅広周溝をもつ建物へと変化し、周溝がめぐる平面形については、正円化もしくは方形化の変化を把握することができる。また、住居の床面が相対的に高くなり、住居部分からのびる排水溝が無くなるといった変化も合わせて確認することができる。さらに、その分布についても前段階との違いが強調される（第325図上段）。まず、東西の均衡が失われ、西部に多く分布するようになる。そして、東部では平坦部中央にかけた範囲に分布するようになり、西部では北寄り～西寄りのほかに、調査区の南縁にも多く分布するようになる。以上のように、住居跡の形態・構造の変化と分布の変化を確認することができ、この集落の形成過程全体の中において、比較的大きな変化として評価することができる。ただし、住居跡の主軸方向については、先の段階の橢円形住居跡と大きく違わない。

最終段階（弥生時代後期末葉～古墳時代前期）の住居跡としては、方形住居跡をあげることができる。主軸方向については、先の段階の幅広周溝をもつ建物跡と大きく違わない。しかし、住居の構造について、再び周溝を伴わなくなり、深い竪穴構造になる。住居部分の形態がこれまでにない方形になることから、元に戻ったというよりも、さらなる変化として評価することができる。分布については、東部に限られるようになり、とくに東側斜面に集中するようになる（第325図下段）。この分布の特徴も、これまでのどの段階とも共通しない点である。

## (2) 挖立柱建物跡の種類と時期・分布

掘立柱建物跡の分類 挖立柱建物跡については、既に第4章第3節にて以下のように分類している。

桁行4・3間…3A・4A：桁行7.0m以上

4B・3B：桁行5.8m～7.0m

4C・3C：桁行4.3m～5.8m

4D・3D：桁行4.3m以下

桁行2間…2A：桁行6.4m以上

2B：桁行4.7m～6.4m

2C：桁行3.3m～4.7m

2D：桁行3.3m以下

掘立柱建物跡の時期 挖立柱建物跡については、出土土器が非常に少なく、伴うことが明らかであると判断できる場合が少ないことから、住居跡以上に時期の判断が難しい。

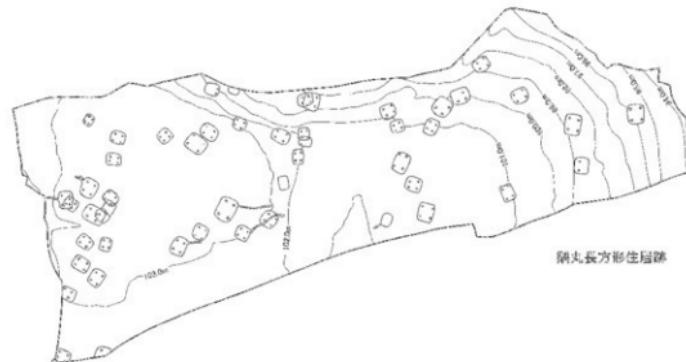
第4章第3節では、主に遺構間の切り合い関係によって、種別ごとの時期的傾向について検討している。それによれば、最も古い段階（弥生時代後期前葉）の掘立柱建物跡としては、小型の掘立柱建物跡（2D・3Dおよび4B～D）をあげることができ、その中でも、2Dが先行する傾向にある。次の段階の掘立柱建物跡として中型掘立柱建物跡である2Cと3Cがあり、続いて大型掘立柱建物跡である2A・3A・3Bが主体となる段階（弥生時代後期後葉～末葉）が把握できる。最終段階（古墳時代前期）の主な掘立柱建物跡としては、2Bをあげることができる。先述のとおり、3×4間の掘立柱建物跡については奈良時代に下る可能性がある。

もちろん、全ての掘立柱建物跡について、出土遺物や切り合い関係などが把握できるわけではないので、上記の時期的傾向に合致しないものが存在する可能性は否定できない。3Dおよび4B～Dの場合や、2A・3Aの場合などは、分布や主軸方向などによって、それぞれの同時期性を評価することができる。しかし、2Bと2C、3Bと3Cについては、分類において厳密性を求めることが難しい。全体的な傾向としては分けることができるが、それに合致しない場合も存在する可能性を考慮する必要がある。

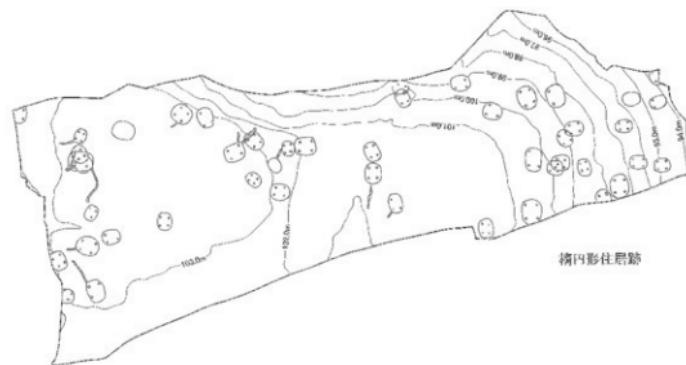
掘立柱建物跡の分布 第326・327図に、種別の掘立柱建物分布を時期的傾向に沿って示した。この順序に沿って、分布等の特徴について記す。

最も古い段階に位置づけできる2Dの掘立柱建物跡は、主軸を北西方向もしくはその直交方向に向け、東西等しく分布する（第326図上段）。ただし、西部では丘陵上平坦面の中央に集中するのに対し、東部では周縁に寄る傾向にある。3Dおよび4B～Dの分布は、圧倒的に西部に多い（第326図中段）。ただし、唯一の4Bが東部に位置する点は注視する必要がある。西部の平坦面中央に集中する点、主軸が北西方向もしくはその直交方向にある点は2Dと変わらない。

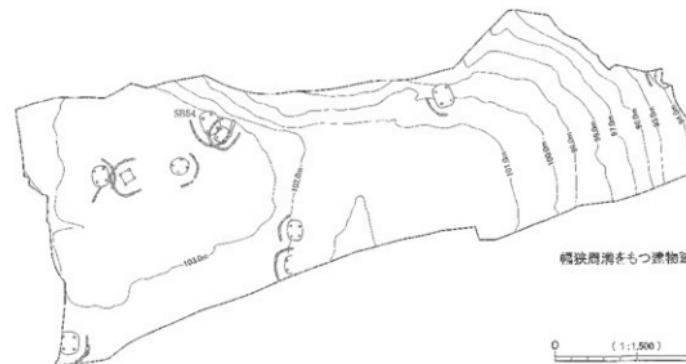
2C・3Cの掘立柱建物跡は、調査区全体に多く分布する（第326図下段）。丘陵上平坦面の中央付近に比較的多いが、東側斜面に立地する掘立柱建物跡も少なくない。主軸方向は先の段階と大きく異なり、南北方向もしくはその直交方向が主体となる。2A・3A・3Bの掘立柱建物跡は、数が少なく、基本的に丘陵上平坦面の中に立地する（第327図上段）。東部では、建て替えを続ける掘立柱建物跡が3ヶ所で把握でき、その内の1ヶ所には布振りの掘立柱建物跡がある。主軸方向の特徴は2C・3Cと類似しており、南北方向を基本とする。また、西部の分布は2C・3Cに近い。最も新しい段階に位置づけできる2Bは、東部に集中する（第327図中段）。東側斜面に分布がかかる傾向にあり、前段階の掘立柱建物分布とは異なる。西部においては、前段階と同様に平坦面に分布するが、建て替え回数の多い掘立柱建物跡が中央に位置する点が注目される。主軸方向も前段階とは異なり、南北方向より若干傾く場合が多い。



納丸長方形住居跡



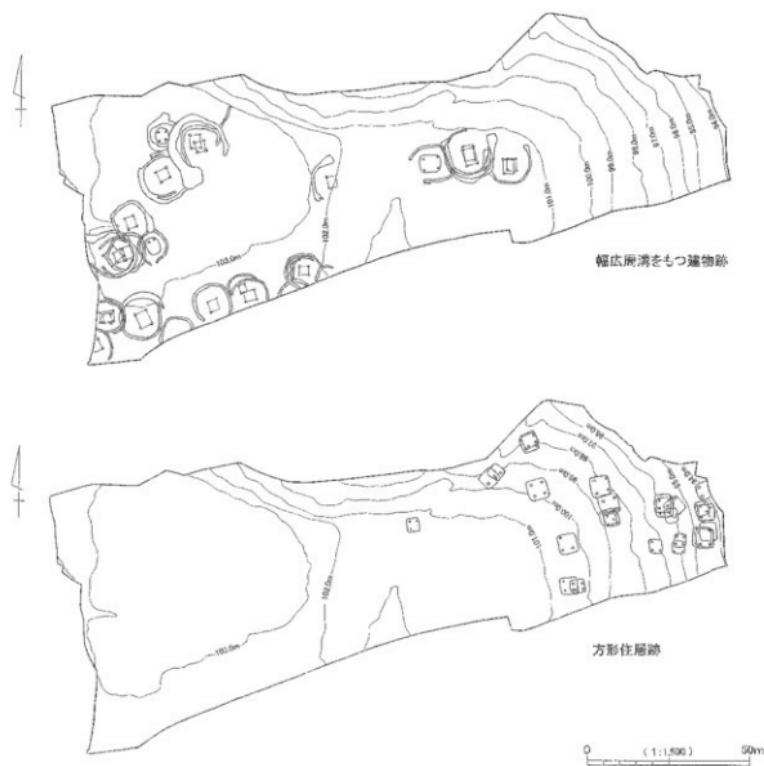
縄内彫柱居跡



縄狭間消きもつ建物跡

0 (1:1,500) 50m

第324図 住居跡の分布1



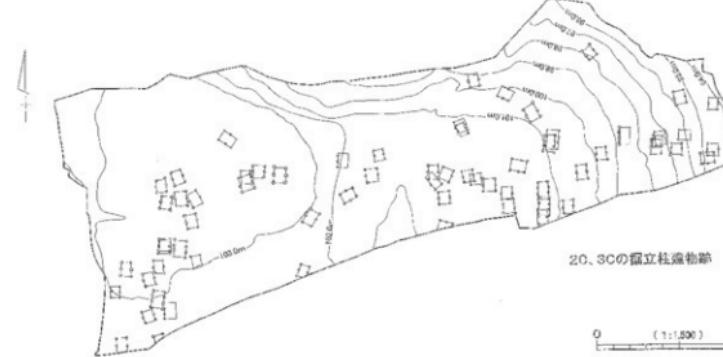
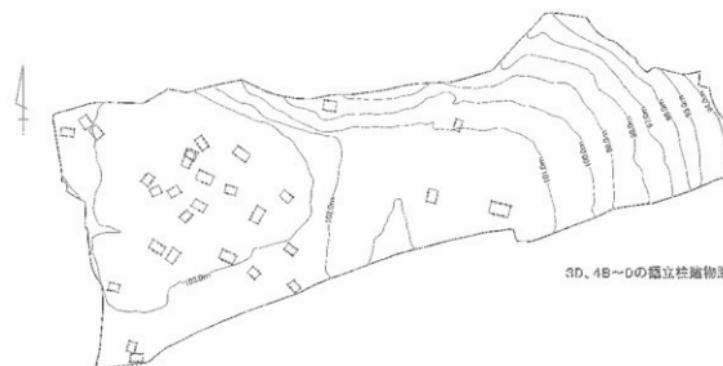
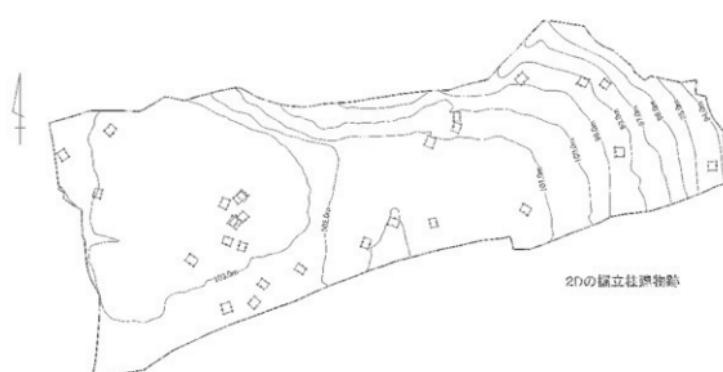
第325図 住居跡の分布 2

### (3) その他の遺構について

集落の構造や変遷を考える中で重視すべき遺構として、住居跡・獨立柱建物跡のほかに方形周溝墓と一部の土坑等がある。

方形周溝墓は西部の北側斜面において、比較的大きなSZ01と小型のSZ02が南北に隣接する（第327図下段）。切り合い関係によって、大型のSZ01の後に小型のSZ02がつくられたと判断できる。ただし、出土遺物などから、両者の時差は小さいものと把握できる。さらに、遺構の分布や切り合いから、2基の方形周溝墓は幅広周溝を伴う住居跡と同時併存すると把握でき、出土遺物から弥生時代後期後葉～末葉の中では設けられたと判断できる。

東部には、古墳時代前期の土器が多く出土しているSP21・SP22がある（第327図下段）。土坑状の遺構であり、焼土塊を伴う場合もあることから、祭祀行為の跡として把握できる可能性がある。

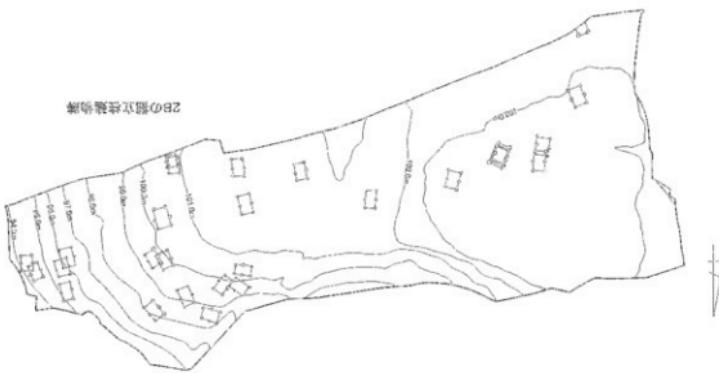


第326図 囲立柱遺物跡等の分布！

第227面 雷丘住處地圖之分布2



2Bの雷丘住處地圖



2A, 3A, 3Bの雷丘住處地圖



### 3. 集落の変遷

集落跡を構成する住居跡・掘立柱建物跡といった遺構について、形態・構造や規模から分類し、それそれぞれ異なる時期や分布の特徴について示してきた。

各種別の時期的傾向については、第328図のように示すことができる。住居跡・掘立柱建物跡のそれについて、様々な変化を経ながらつづけられていったことがわかるとともに、この集落全体の変遷について、概ね4つの段階に整理して把握することができる。

第1段階 最初の段階は、概ね弥生時代後期前葉（弥生土器編年では菊川様式古段階）に該当する。

隅丸長方形の竪穴住居と小型の掘立柱建物によって集落が構成されており、住居・掘立柱建物の主軸は南北方向およびその直交方向で概ね統一されている。住居跡と掘立柱建物跡の数は、概ね1:1である。

集落は、中央谷によって西部と東部に分かれる。西部の方が住居跡・掘立柱建物跡の数は多く、重なり合うものも多い。東部では、西部よりも分布が少なく、遺構間の差異よりも少ない。さらに、桁行2間の掘立柱建物は東西に等しく分布するが、桁行3・4間の掘立柱建物は西部に集中する。西部の方が長い期間に渡って営まれ、建て替えの中で掘立柱建物の構造に変化が生じていたのに対して、東部における形成期間は短く、西部のような変化もなかった可能性が指摘できる。

西部では、丘陵上平坦面の周縁部に住居跡が集中し、中央には掘立柱建物跡が多く分布する。一方の東部では、住居跡の分布は西部と同様であるが、掘立柱建物跡も周縁に分布し、中央は空白になっている。数軒の住居と数棟の掘立柱建物を1単位としたまとまりが抽出できる点では、東西共通している。また、住居には排水溝が伴うことが多く、その排水に関わる必要性から周囲の斜面に寄った位置に住居

が設けられ、掘立柱建物の位置については、第一の立地条件は住居に近い場所であること、の中でも、排水・除湿を考慮して住居よりも高い場所が選択される傾向にあると把握することができる。東西の掘立柱建物分布の違いについては、地形的特徴や形成期間の違いによるものと考えたい。

第2段階 後期中葉（弥生土器編年では菊川様式中段階）のあたりになると、住居は横円形の竪穴住居になり、掘立柱建物は中型（2C・3C）に変化する。さらに、住居・掘立柱建物の主軸について、南北方向およびその直交方向に変化する。

住居跡と掘立柱建物跡の数は、前段階と同様に概ね1:1である。また、住居・掘立柱建物の構造については、前段階と大きく違わない。さらに、丘陵上平坦面の周縁に住居が分布し、その内側に掘立柱建物が設けられる傾向は前段階から引き継がれている。しかし、西部では、住居跡分布の内側にある掘立柱建物跡も円弧状に分布しており、中央に空白が設けられている。そして東部では、外縁の住居跡と内側の掘立柱建物跡の分布のはかに、東斜面への住居・掘立柱建物の増大を確認することができる。東西における住居・掘立柱建物跡の分布数に大差はない。

	住居	掘立柱建物	ほか
後期前葉	隅丸長方形住居	小型建物 2D 3D 4B~D	
後期中期	横円形住居	中型建物 2C 3C	
後期後葉	横円形周溝をもつ建物	大型建物 2A 3A 3B	方形容溝渠
古墳初期	方形住居	(小型化) 2B	土坑

第328図 各種住居・建物等の時期的傾向

**第3段階** 後期後葉～末葉（弥生土器編年では菊川様式新段階）になると、住居には周溝を伴うようになり、掘立柱建物は大型（2A・3A・3B）になる。明確な竪穴住居で幅狭周溝を伴うものについては、第1・2段階にも存在した可能性がある。しかし、周溝をもつ建物が一般的になるのは第3段階になってからである。周溝幅は広くなり、溝としての機能を維持されるようになる。その一方で、住居部分の床面は深く掘りこまれなくなる。平面形については、まず円形化していることがわかり、続いて一部が方形化する。掘立柱建物には全体規模とともに柱穴の大きいものが盛行する。住居・掘立柱建物の主軸は、北より若干西に傾く方向で占められる。前段階と大きさは変わらない。

住居と掘立柱建物の数の比率は、これまでと同様の概ね1:1である。しかし、全体的に数は減少している。その一方で、住居・掘立柱建物の両方において、建て替えが多く確認されるようになる。また、周溝の存在によって、出土土器の量が増加する。

住居・掘立柱建物の分布傾向についても、前段階との違いが把握できる。西部においては、前段階と同様に、住居が丘陵上平坦面の周縁に分布し、内側に掘立柱建物跡が分布する傾向にある。住居と掘立柱建物との位置関係においては、前段階と同じ意識が働いているものと判断できる。しかし、斜面寄り以外（調査区南縁）にも住居が設けられており、前段階との違いも確認することができる。東部ではさらに前段階との違いが顕著に認められ、住居が中央付近に位置し、その周囲に掘立柱建物が展開するという、これまでにない分布を把握することができる。そして、東斜面への分布は全くなくなる。

この段階になって、幅広周溝を伴うようになり、排水溝を設けなくなるという住居の構造的転換が生じる。幅広周溝と周堤を伴う新たな構造の住居の場合、これまでのように斜面寄りに設ける必要はなく、むしろ、掘立柱建物との位置関係に問題がなければ、より平坦な場所を選んだ方が良い。分布傾向の変化の背景として、このことが関連している可能性が考慮される。また、東西における分布の違いについては、西部に布瀬の掘立柱建物跡がある点を含めて、集落内の機能的・性格的な位置づけが東西で異なっていた可能性が考慮される。

以上のように、第2段階から第3段階への過程は、住居の構造や掘立柱建物の機能における変化と運動した、集落構造の大きな転換であった可能性が指摘できる。そして、この段階の比較的新しい時期に、方形周溝墓2基がつくられる。

**第4段階** 古墳時代前期に入る時期（土器編年では菊川様式最新段階以降、古式土師器に至る時期）に該当する。住居については、周溝をもつ建物から周溝のない方形住居に大きく転換する。掘立柱建物については、やや縮小化する（2B）。

住居の分布は東部に限られ、東斜面にかけた範囲に集中する。掘立柱建物も東部に集中するが、平坦面中央寄りに立地する傾向があり、西部にも分布を確認することができる。住居・掘立柱建物の主軸については、東部では前段階と大きく変わらないが、西部では北より若干東に傾く方向へと変化する。

東部と西部とで分布や主軸方向に違いがあることから、前段階と同様に、集落内における機能や性格的な位置が東西で異なっていた可能性を指摘することができる。ただし、その違いの内容については、前段階とは逆の特徴を示す。前段階まで住居が集中していた西部は、非住居空間へと大きく転化する。その背景としては、方形周溝墓2基が関連しているのではないかと考えたい。また、建て替えを多く繰り返す掘立柱建物跡が中央に存在する点についても、東部とは異なる西部の機能的性格を反映したものと把握することができる。東部については、東斜面にかけた範囲が主要な住居の場所へと変化する。これについては、住居の構造変化と関連したものと把握できる。いずれにしても、第3段階から第4段階への過程について、住居の構造などを含む集落構造全体に対する大きな転換として把握することができる。なお、東部の住居分布範囲にあるSF21・SF22などの土坑についても、住居や掘立柱建物とは異なる機能を伴う遺構として、集落構造を把握する上で注視することができる。

拡散などといった変化が把握できる場合が目立つ（浜松市山の神遺跡、浜松市松東遺跡など）。先述の中・東遠江（天竜川以東）における低地集落についても、袋井市春岡遺跡、袋井市鶴松遺跡、菊川市川口・東原田遺跡など、後期中葉～後葉に低地の居住域が減退する場合が目立つ。以上から、後期中葉～後葉に地域的に広く低地集落の衰退もしくは再編が生じた可能性が指摘でき、そのことが丘陵上集落における低地型の住居（幅広周溝をもつ建物）の採用、上ノ平集落における後期後葉の画期につながったものと推察することもできる。

ただし、各集落遺跡の形成時期や変遷過程は、弥生時代後期を前葉・中葉・後葉（・末葉）に区分する土器編年（鈴木敏1996など）によって把握されており、決して詳細で厳密な把握であるとはいえない。したがって、同時に把握される現象について、実際に時間差がないのか、1つの汎地域的現象として評価できる有機的関係にあるのかについては、ここで述べた概観だけでは検討が不十分である。また、上ノ平集落と低地集落との関係性についても、他の要素による評価が必要である。

**出土遺物にみる評価** 後期後葉の画期について考えるための1つの要素として、台付窯の接合部をとりあげる。上ノ平遺跡出土の台付窯をみると、腹部と台部とが単純に接合している場合と、その接合部に粘土帯が巻かれている場合がある。さらに詳細にみると、粘土帯を伴う窯は幅広周溝をもつ建物からの出土に限定されていることがわかる。

この粘土帯を伴う台付窯は、弥生時代後期の西遠江（伊場式土器）に特徴的な要素であるという指摘がある（大野2004）。その指摘によれば、粘土帯を伴う頻度が高いのは浜松市南部（伊場遺跡など）の50%強であり、その周辺域（浜松市北部や東部）では40～20%、中・東遠江や関東でも確認されているが、多くの場合は数点の出土であるという。上ノ平集落においては、幅広周溝をもつ建物で約12%、その他では0%である。西遠江と同等ではないが、中・東遠江の中では比較的多い集落であったと評価できる。そして、西遠江では後期初頭から認められる特徴であるのに対し、上ノ平集落では幅広周溝をもつ建物が一般化する後期後葉になって現れるという違いが指摘できる。内遠江から上ノ平集落への影響が後期後葉にあった可能性を考慮することができる。

残念ながら、その他の土器の要素を西遠江との関連を見出すことはできない。したがって、西遠江から上ノ平集落への影響について、間接的なものでの可能性も考慮する必要がある。ただし、三河・西遠江を中心とする当時の銅鐸文化は、原野谷川中・下流域にまで広がることがわかっている。上ノ平集落における後期後葉の画期について、西遠江を含む広範囲の動向に関連する可能性を評価することはできると考える。

**古墳時代初頭の画期について** これまで述べてきた後期後葉の画期については、住居構造における変化が顕著であり、その変化に起因するような住居配置の変化は見出せるものの、それ以上の集落構造の変化は評価されない。以前と変わらず東部と西部の両方に住居と掘立柱建物が配置され、西部では周縁部に住居、内側に掘立柱建物という配置の基本が維持されている。

これに対して、古墳時代初頭の画期については、西部から住居を排除し、東部の東斜面寄りに住居域を限定させるという、集落構造の大きな変化を把握することができる。この集落構造の再編については、西部に設けられた方形周溝墓2基の存在が大きく関連するものと評価できる。2基の方形周溝墓は、その数や単発性において、集落構成員に対する単なる墓域としては異様であり、そこには階層的な要素を含めた象徴的な価値が付与されている可能性が考慮される。以上から、この画期の背景として、集落構造に反映される概念的な変革を予測することができる。なお、後期後葉の画期が銅鐸文化を基軸とした地域社会における動向と関連したものであったとするならば、古墳時代初頭の画期は銅鐸文化の終焉に伴う社会変動による可能性が考慮される。

## 5. 結語

これまで、原野谷川流域の弥生時代遺跡としては、下流域や中流域（和田岡丘陵）に大きな集落形成が把握されていた。そうした中で、この上流域において密度の濃い丘陵上集落の展開があったこと、その存在が判明したこと自体が1つの大きな調査成果であるといえる。さらに、多量の住居跡と掘立柱建物跡について分析し、集落の変遷について検討してみると、弥生時代後期から古墳時代に至るまでの幾々な社会動向を色濃く反映していることが把握できた。東西文化の境界域とも評価される遠江において、地域的な集落動向と社会変動を解明する上で極めて重要な資料であると評価することができる。

現地調査および本報告の作成にあたっては、以下の方々・期間に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木 修 天石夏実 安藤 寛 飯塚晴夫 井口智博 伊藤延男 井村広巳 岩崎しのぶ 岩本 貴  
大賀克彦 大熊茂広 大塚淑夫 大庭 宏 大谷宏治 岡村 涉 岡本茂史 加藤芳明 加納俊介  
佐藤白紀男 佐藤洋一郎 徳原和大 栄田 稔 柴田 雄 白澤 崇 鈴木悦之 鈴木一有  
鈴木敏則 鈴木良孝 竹内直文 田辺昭三 寺澤 眞 戸塚和美 中川律子 仲屋栄一  
酒井田佳男 長谷川睦 花森功仁子 平野吾郎 前田庄一 正岡大実 松井一明 松本一男  
向坂鋼二 村松弘規 山本雄一 渡井英善 渡瀬 治  
掛川市教育委員会 寺島地区自治会 原里地区自治会

### 註

- 「溝溝をもつ建物跡」の用語は、これまでの研究（岡本1997、松井2002など）によるものであり、本稿でもこれを踏襲する。ただし、その性格は層立柱の建物とは異なり、住居であったものと考える。用語・用法の詳細は本文のとおりである。
- 当地域の弥生時代後期の土器については、南川式（猿式）として把握され、古墳階・中段階・新段階に分類されている（中船1988、鈴木敷1996、笠置ほか2002など）。古段階が環状弥生時代後期前段、中段階が概ね環状弥生時代後期、新段階が概ね後葉に位置づけられ、最新段階は古式土器群を共伴することから古墳時代初期として位置づけられている。

### 参考文献

- 井村広巳 2002 「弥生時代集落の概観－西部地域：『静岡県における弥生時代集落の変遷』」 静岡県考古学会  
掛川市史編さん委員会 1992 「『掛川市史』資料編」  
岩本 貴 1995 「『鶴川式土器』における縦縫上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』  
大野勝美 2004 「刺繡形土器品考－刺繡形東北の東北を考える－」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所20周年記念論文集』  
小笠町教育委員会 2001 「『川田・東原田遺跡』」  
西本淳一郎 1997 「『周溝をもつ建物について』『鹿島文化財摘要－平成3年度』」 嘉山県文化振興事業団  
掛川市教育委員会 2000 「『鶴川・口忠跡』」  
掛川市史編さん委員会 1997 「『掛川市史』上巻」  
2000 「『掛川市史』資料編 古代・中世」  
掛川市史編さん委員会 1985 「『三沢西原遺跡』」  
佐藤由紀男・荻野谷正宏・經原和大 2002 「遠江・駿河地域『弥生土器の様式と韻律 東海編』」 木耳社  
静岡県考古学会 2002 「静岡県における弥生時代集落の変遷」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 「『領家遺跡・梅崎古演』」  
2004 「『石塚1号跡』」  
2005 「『掛川市大和田・平島の遺跡』」  
鈴木一有 2002 「古墳時代前期にかかる諸問題」『祝武宮宮遺跡』 浜松市文化協会  
2004 「『坊ヶ跡遺跡にみる弥生・古墳移行期の発達層』『坊ヶ跡遺跡』」 浜松市文化協会  
鈴木敏則 1996 「『遠江・駿河（後期）』『YAY!』 弥生土器を語る会」

- 鎌木敏洞 2002 「西遠江の古式土師器－堀町御器式」 平野亞都先生追贈記念論文集『東海の路』
- 中島裕夫 1988 「いわゆる「堀川式」と「飯田式」の再検討」『軒鏡』2  
1991 「東遠江における後期弥生土器變化と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期や弥生土器』  
1997 「東遠江の古式土師器」『静岡県史研究』13
- 西井 実 2004 「石畠1遺跡における弥生墓葬」『石畠1遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 長谷川聰 2001 「弥生時代墓葬としての領家遺跡」『領家遺跡Ⅱ・御嶽古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 袋井市教育委員会 1981 「袋井市一色荒田遺跡」  
1991 「鶴池ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書」  
1992 「鶴松遺跡V」  
1995 「小山角田遺跡」
- 松井・羽 2002 「堅穴住居と掘立柱建物－静岡県下における低地墓葬の建物構造と墓葬イメージ－」『静岡県における弥生時代墓葬の変遷』 静岡県考古学会
- 松井文季 2002 「掛川市上ノ平遺跡」『静岡県における弥生時代墓葬の変遷』 静岡県考古学会
- 丸杉俊一郎 2004 「古代遠江国における巡撫研究の基礎的整理」『財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所20周年記念論文集』
- 森可教育委員会 1995 「静岡県津町 船田の遺跡」
- 森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編一 効古

# 写真図版



北からの遠景（▲：遺跡の位置）

図版 2



1 全景（南西から）



2 中央・西部の全景（北東から）



1 SB49～51（周溝を伴う住居跡）周辺（南から）



2 SH111（布壙りの掘立柱建物跡）（南東から）

図版 4



1 SZ01・02 (方形周溝墓) (南から)



2 赤彩のある土器片 (511・544)



3 玉類 (遺物の配置は図版95に対応)

図版 5

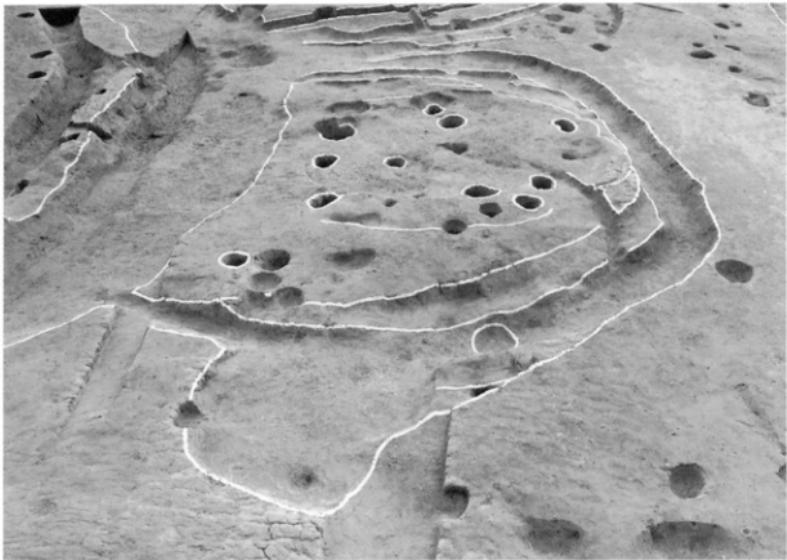


調査区全景（合成）

図版 6



1 調査区西側遺構集中部（俯瞰）



2 SB07・SD04~06 (北から)



1 SB11・SB12 (西から)



2 SB15・SD18~20 (南東から)

図版 8



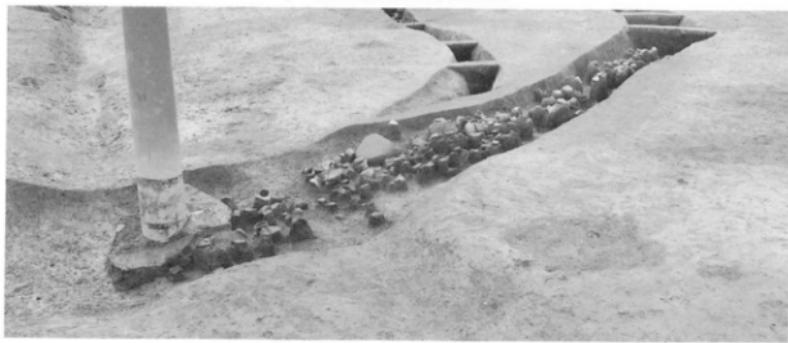
1 SB16・SD81・82・SH85・86（北から）



2 SB18（西から）



1 SD24遺物出土状況（南から）

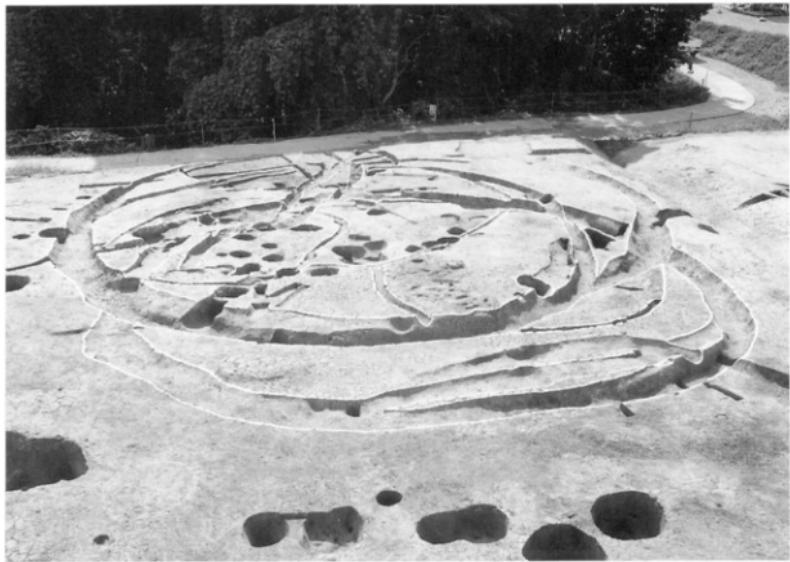


2 SD24遺物出土状況（東から）

図版10



1 SB23・SB25・26（東から）



2 SB26～31・SD30～33（東から）

図版11

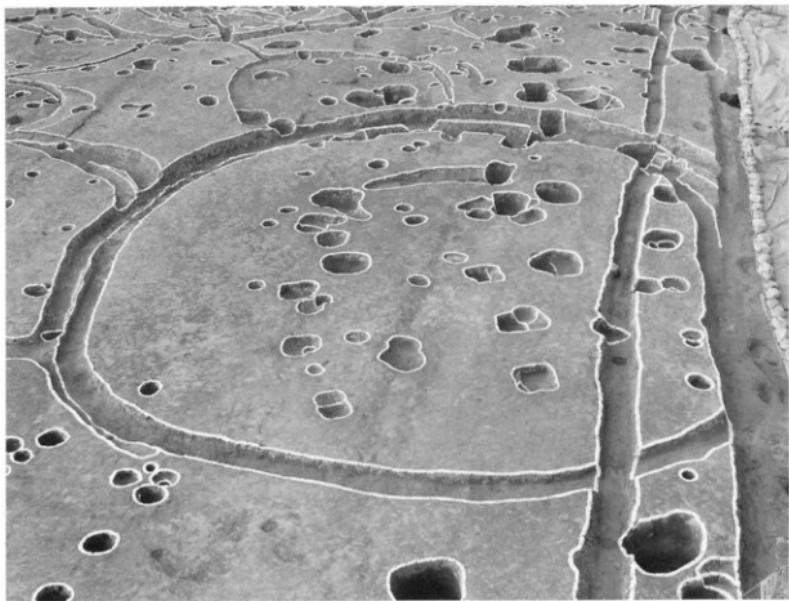


1 SB26~31・SD30~33（南から）



2 SB27炭化米出土状況（南から）

図版12



1 SB37・SD43～45（南から）



2 SD43遺物出土状況（東から）



3 SD45遺物出土状況（南から）



1 SB39・40・SD46・47 (北東から)



2 調査区南西部 (南東から)

図版14



1 SB42・SD49（南から）



2 SB42炉跡検出状況（東から）



1 SB49~51・SD56~59 (北西から)



2 SB49~51・SD56~59 (俯瞰)

図版16



1 SD57遺物出土状況（南から）



2 SD57遺物出土状況（東から）



3 SD57遺物出土状況（東から）



1 SB54・56・SD70・73・74（南から）



2 SB54・56・SD70・73・74（東から）

図版18



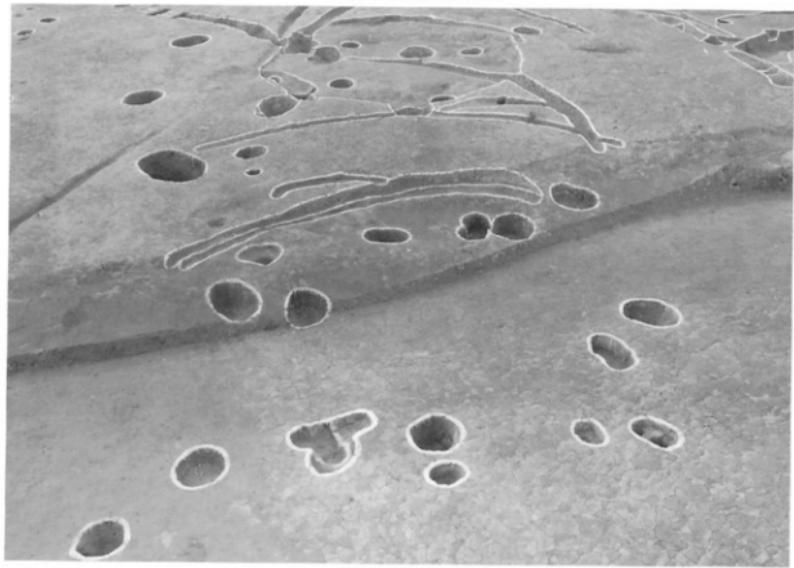
1 SB52・SD61 (南から)



2 SB69・70・SD84・85 (北から)



1 SB82・SD87 (南西から)



2 SB87・SD91 (東から)

図版20



1 SB89・SD97～100（西から）



2 SD100遺物出土状況（西から）



3 SD100遺物出土状況（北から）



1 SB90・SD96 (北西から)

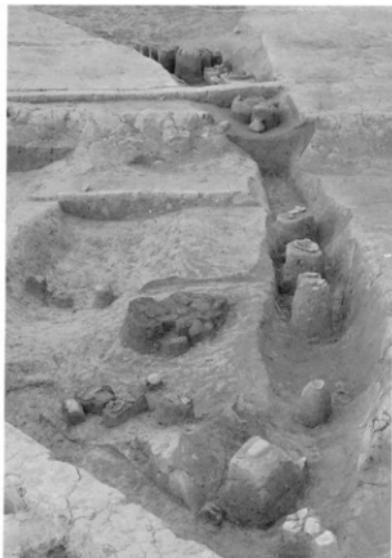


2 調査区中央部 (俯瞰)

図版22



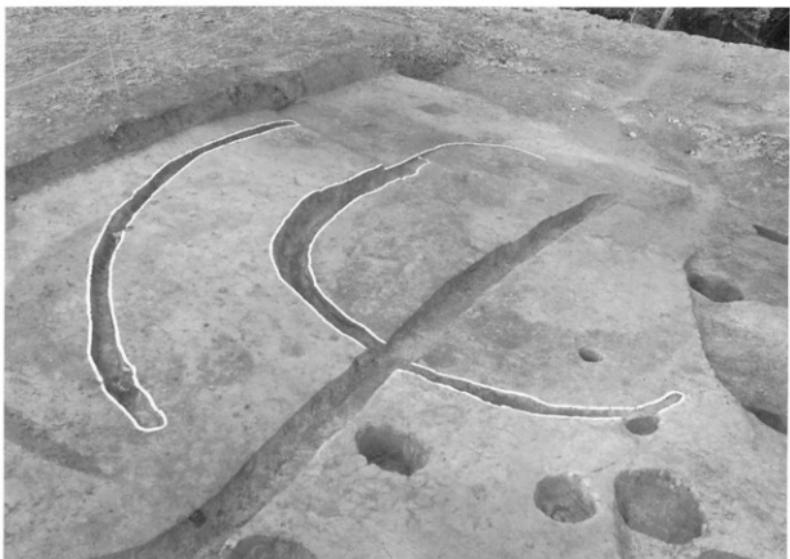
1 SB110・SD116～120（南から）



2 SD120遺物出土状況（南から）



3 SD120遺物出土状況（南から）



1 SB113・SD121 (南東から)



2 SB126・127・SD123・124 (北から)

図版24



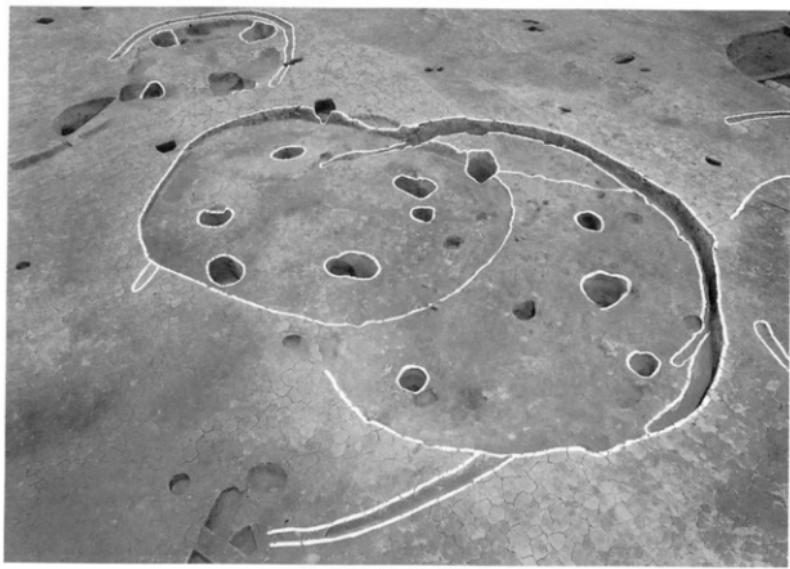
1 SB163・164・SD125（南東から）



2 SB01（東から）



1 SB02・03 (西から)



2 SB04～06 (南西から)

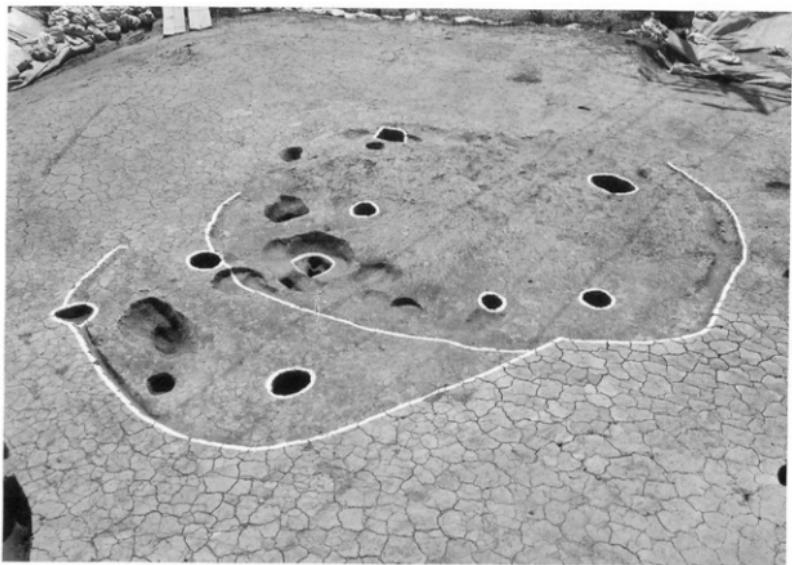
図版26



1 SB10 (東から)



2 SB10炭化材検出状況 (東から)

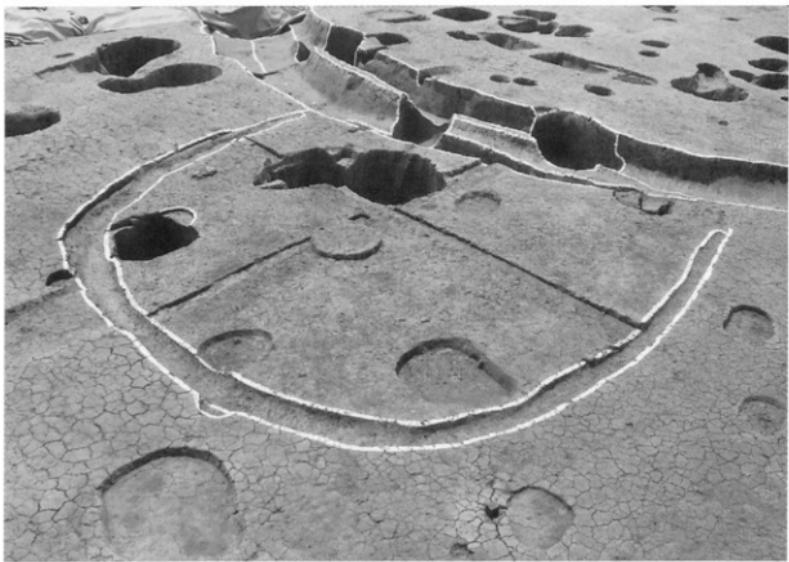


1 SB13・14 (東から)



2 SB29床面検出状況 (南から)

図版28



1 SB34床面検出状況（北西から）



2 SB43 (東から)



1 SB44遺物出土状況（北西から）

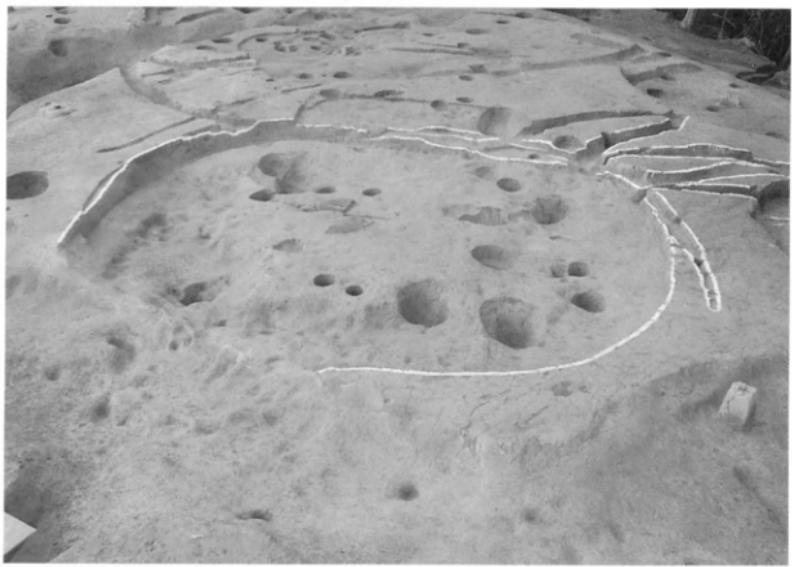


2 SB47（東から）

図版30



1 SB53 (北西から)



2 SB55 (南東から)



1 SB59 (南東から)

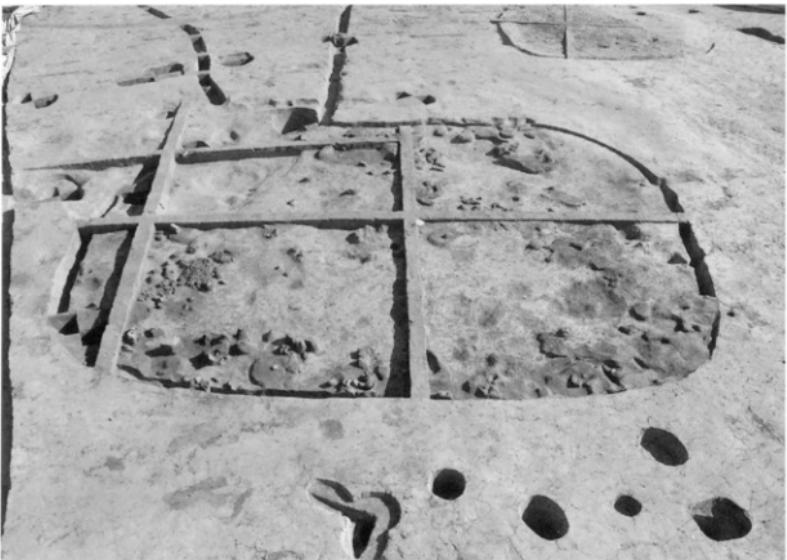


2 SB62 (南東から)

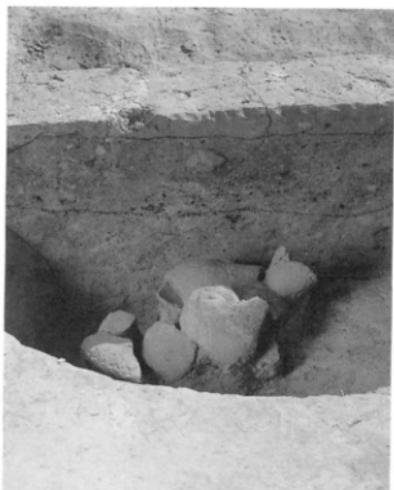
図版32



1 SB67（西から）



2 SB67炭化材検出状況（西から）



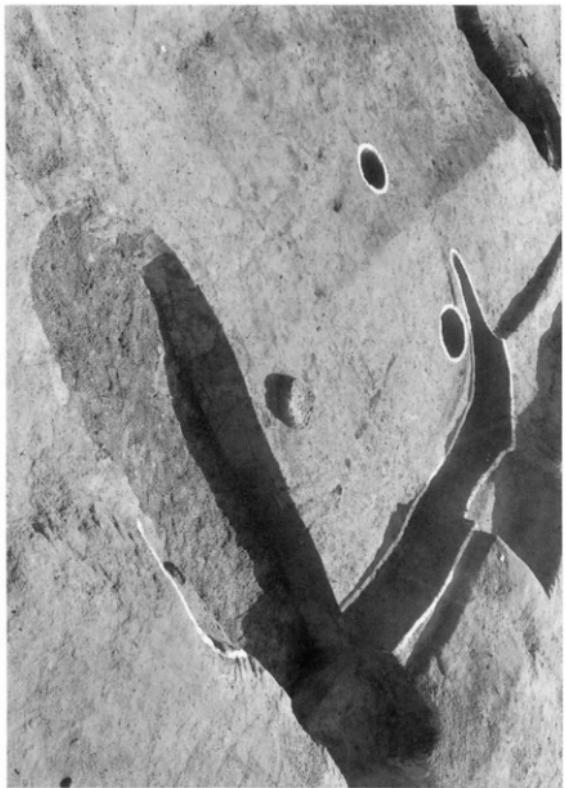
1 SB67貯藏穴内土器出土状況（西から）



2 SB64（南から）



3 SB65（北東から）



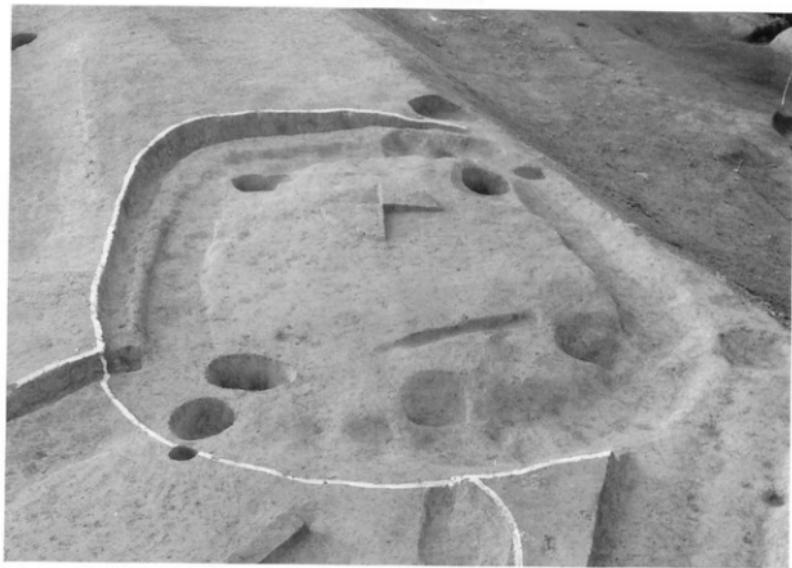
1 SB71 (西から)



2 SB72床面検出状況 (西から)



1 SB73・74 (北から)



2 SB76 (東から)

図版36



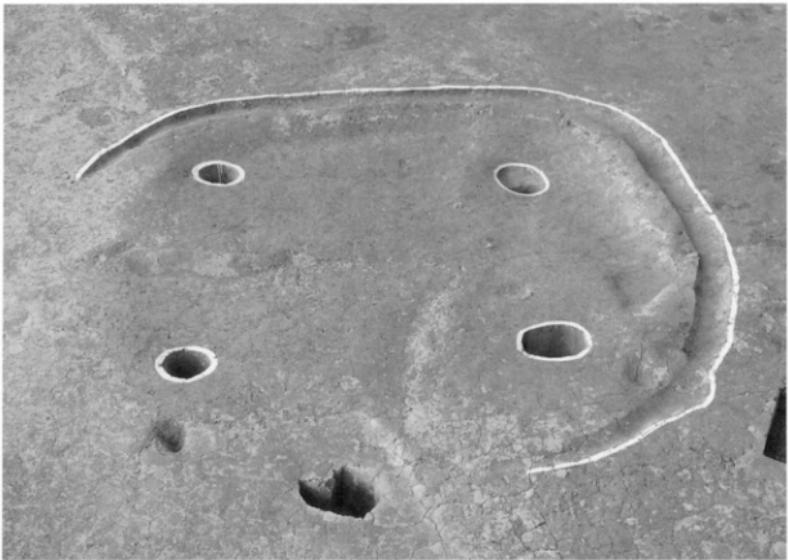
1 SB75~79 (南東から)



2 SB81 (南西から)

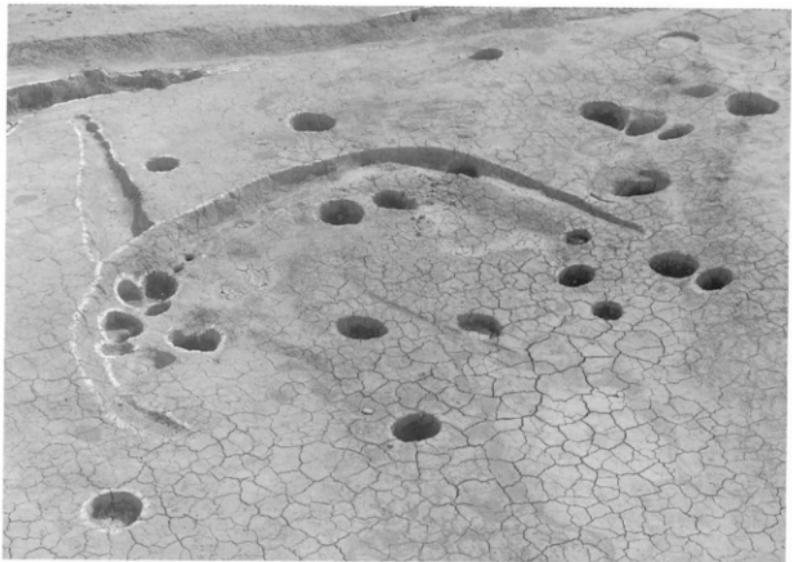


1 SB86 (南から)



2 SB88 (南東から)

図版38



1 SB94 (南西から)



2 SB95・96 (東から)



1 SB97 (西から)



2 SB106 (北から)

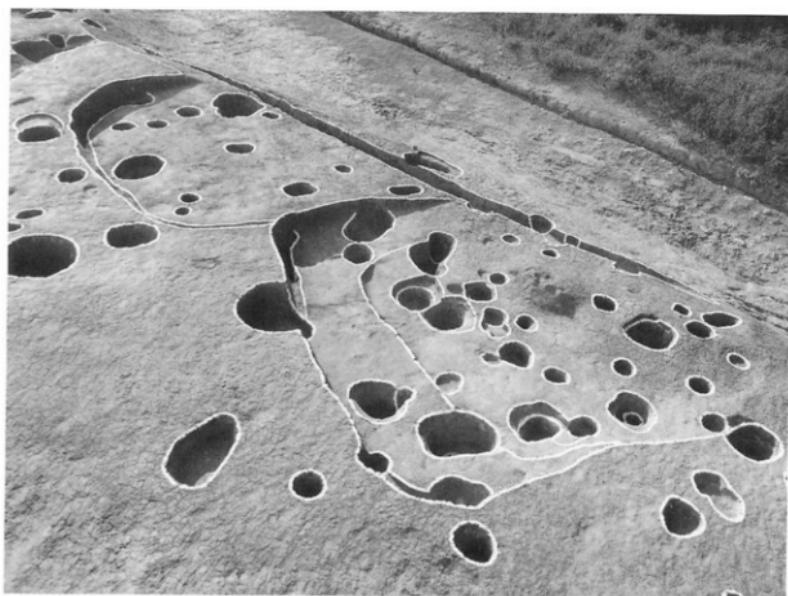
図版40



1 調査区北東部（俯瞰）



2 SB114～117（北から）



1 SB118～120（南東から）

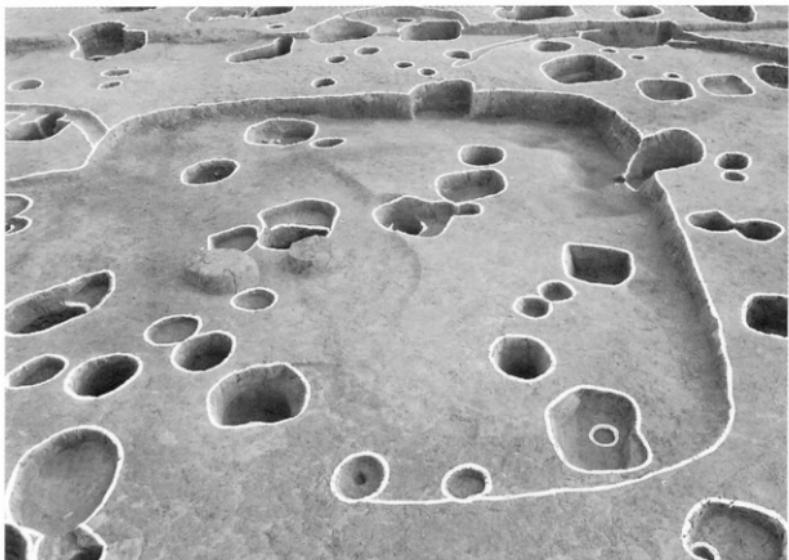


2 SB118遺物出土状況（南から）



3 SB118遺物出土状況（東から）

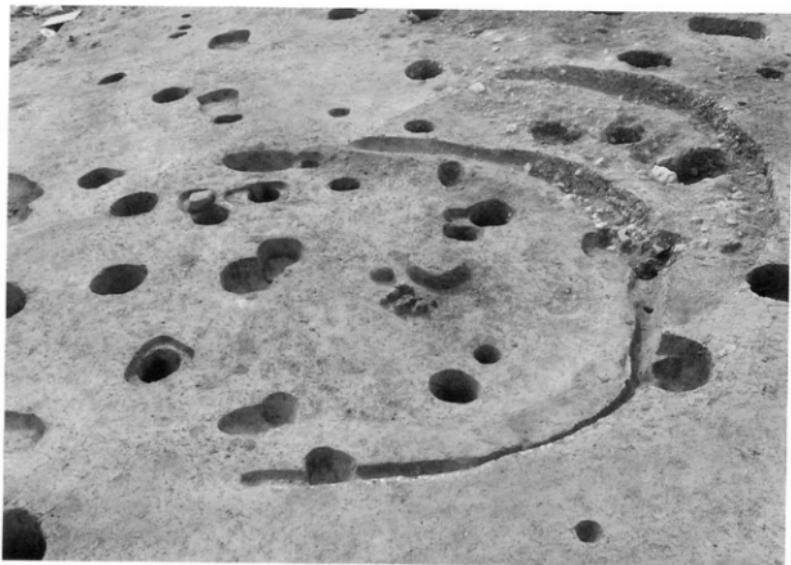
図版42



1 SB122 (北から)



2 SB128~130 (北から)

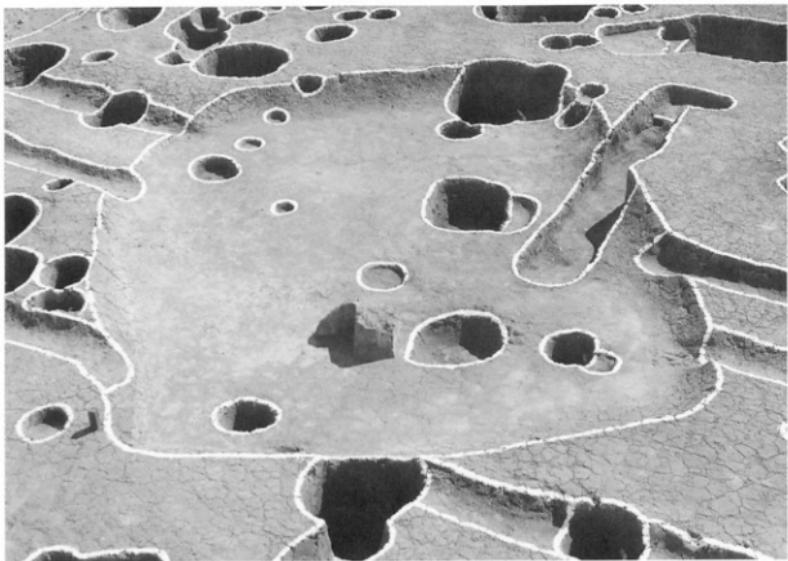


1 SB133・134 (北から)



2 SB135～137 (東から)

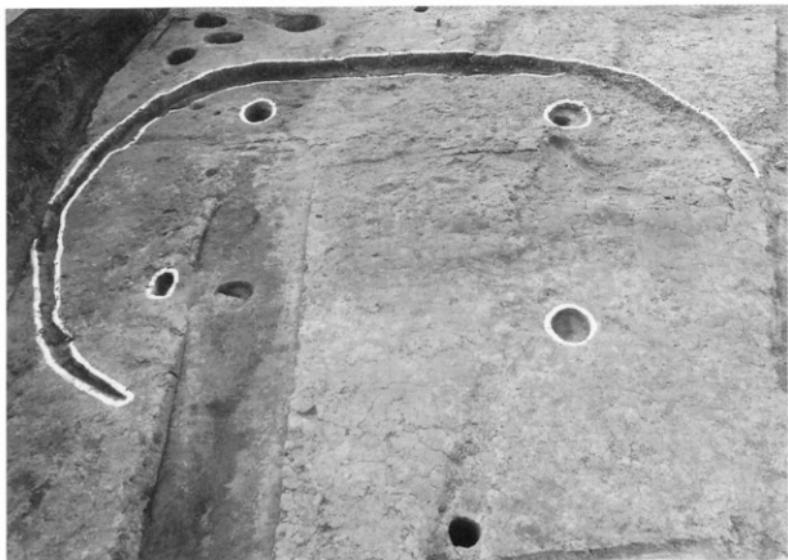
図版44



1 SB138 (北から)



2 SB139床面検出状況 (東から)

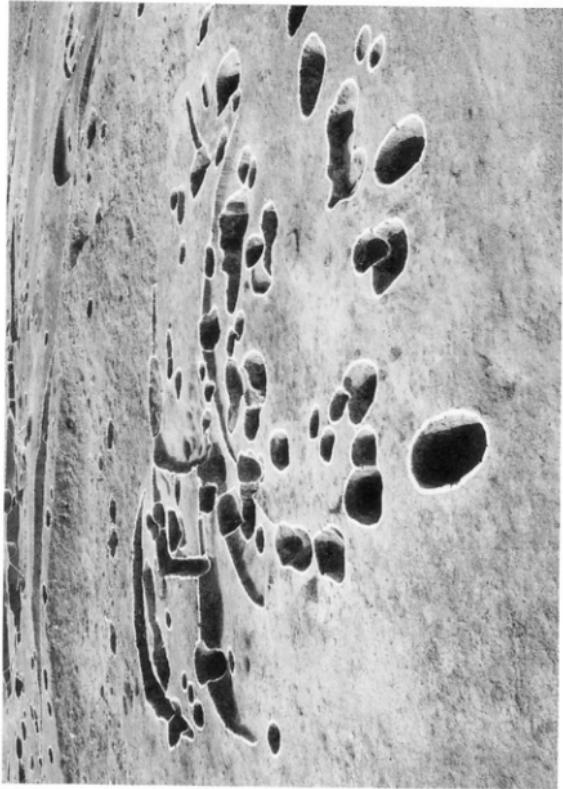


1 SB143 (東から)



2 SB143炭化材検出状況 (北から)

図版46



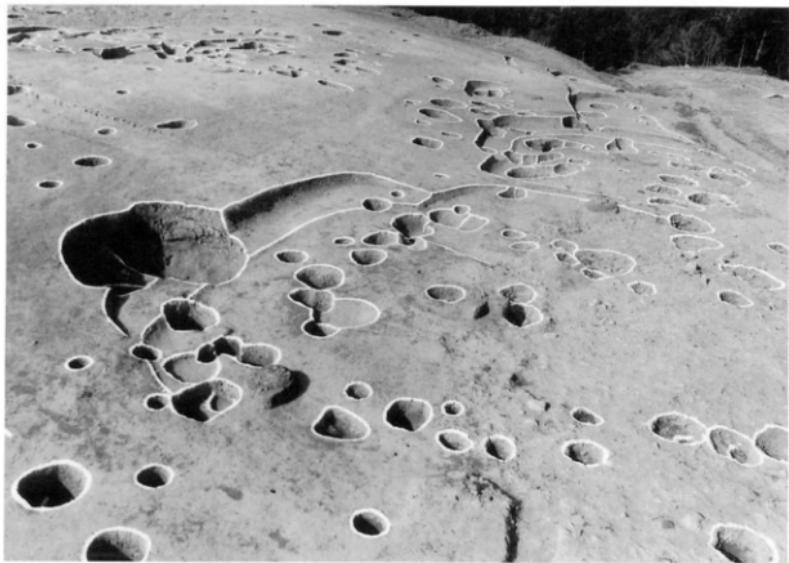
1 SBI45~151 (東から)



2 SBI55・156 (南から)



1 SB157・158 (南から)



2 SB160～162 (南から)

図版48



1 SH01~05 (西から)



2 調査区北西部 (俯瞰)



1 SH17~21 (南東から)



2 SH23・25~27 (北から)

図版50



1 SH45~47・50・51 (南から)



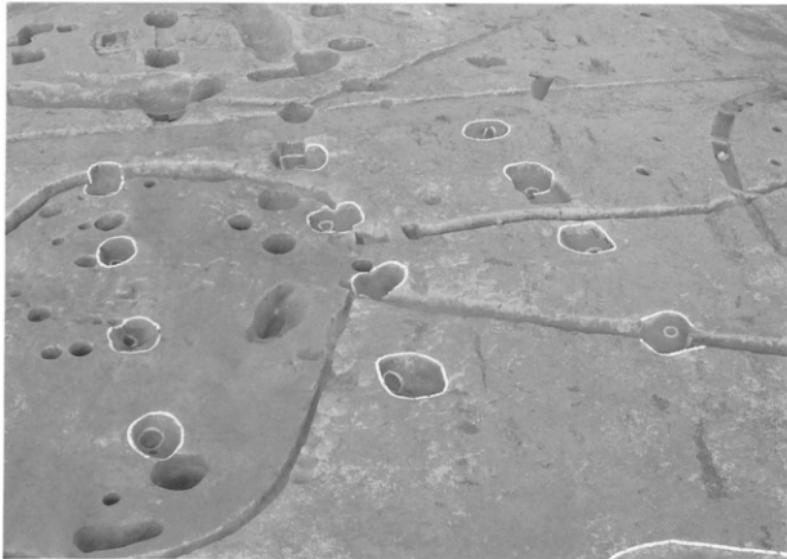
2 SH48・49 (南から)



3 SH56~59 (南から)



1 SH60・61 (南から)



2 SH66 (南から)

図版52



1 SH72~75 (南から)



2 SH77~80 (北から)

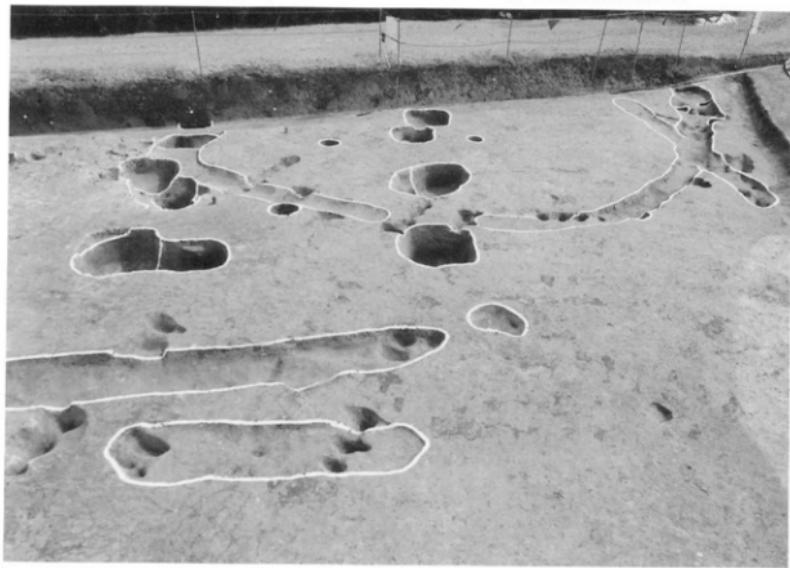
図版53



1 SH81 (北西から)



2 SH88・89 (北西から)

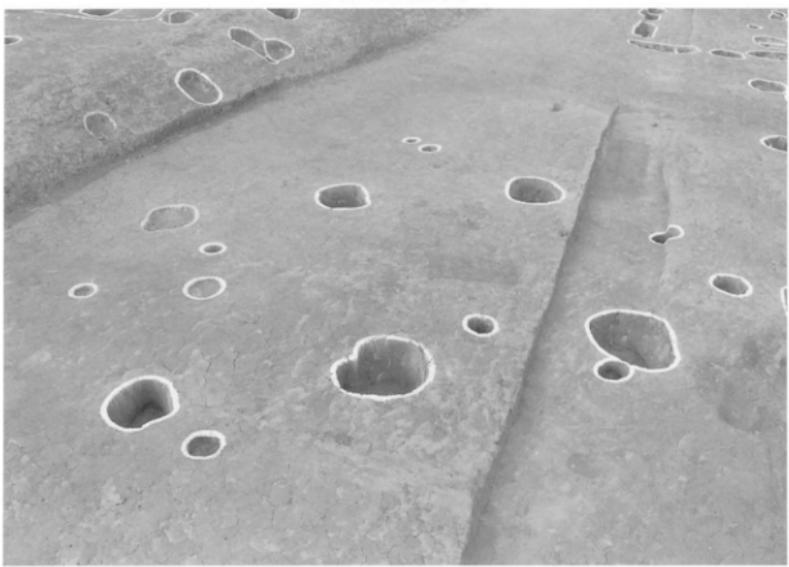


3 SH82・83・SD77・78・80 (北から)

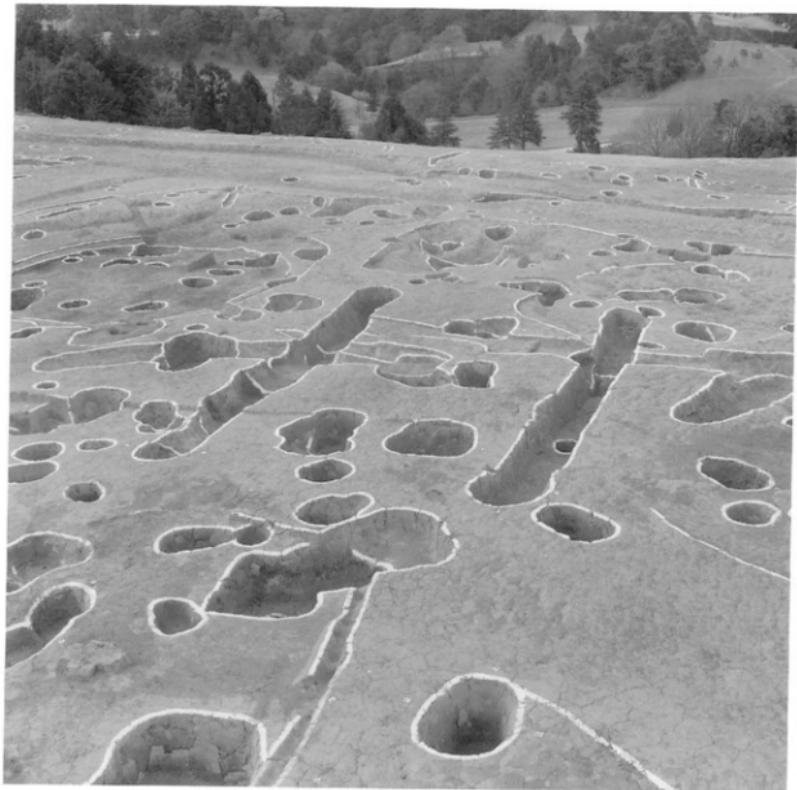
図版54



1 SH92 (南東から)



2 SH98 (南から)



1 SH111 (南から)



2 SH111根固石出土状況 (北東から)



3 SH111土層断面 (東から)

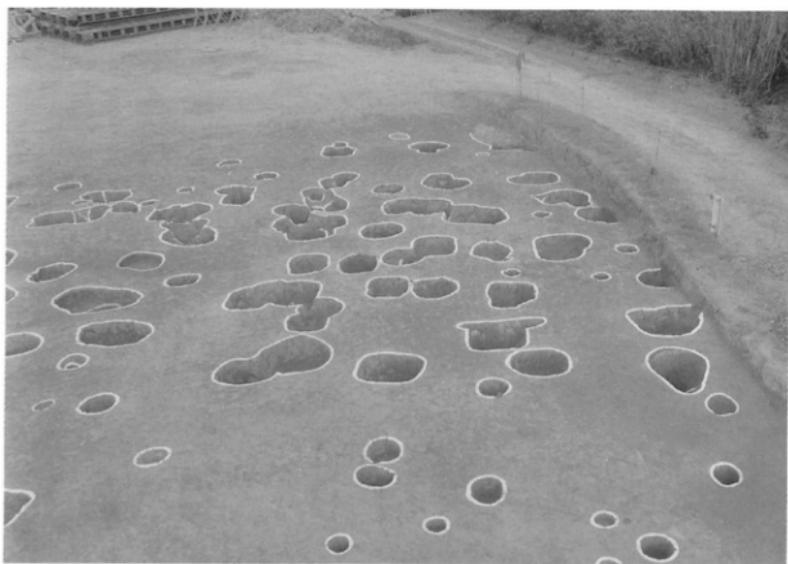
図版56



1 SH118~120 (北から)



2 SH141・143・144 (東から)



1 SH127～135 (西から)



2 SH127～135 (北から)

図版58



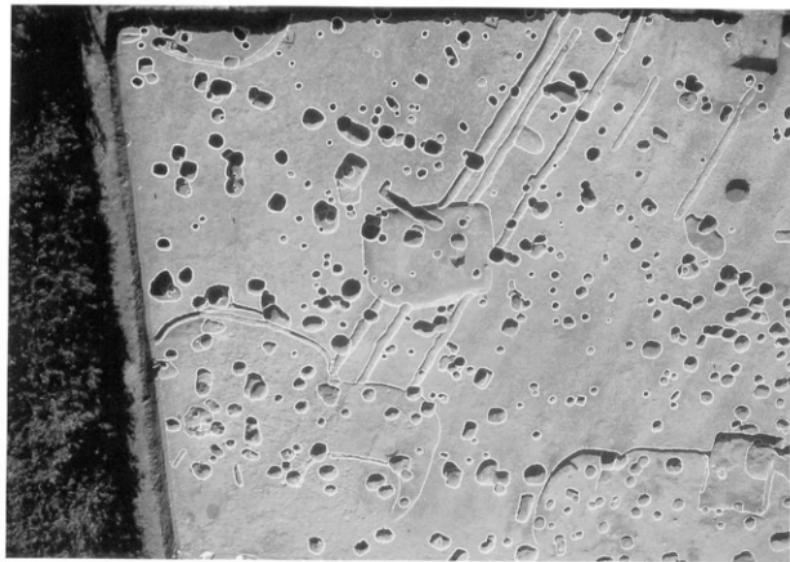
1 SH146・147 (北から)



2 SH148 (北から)

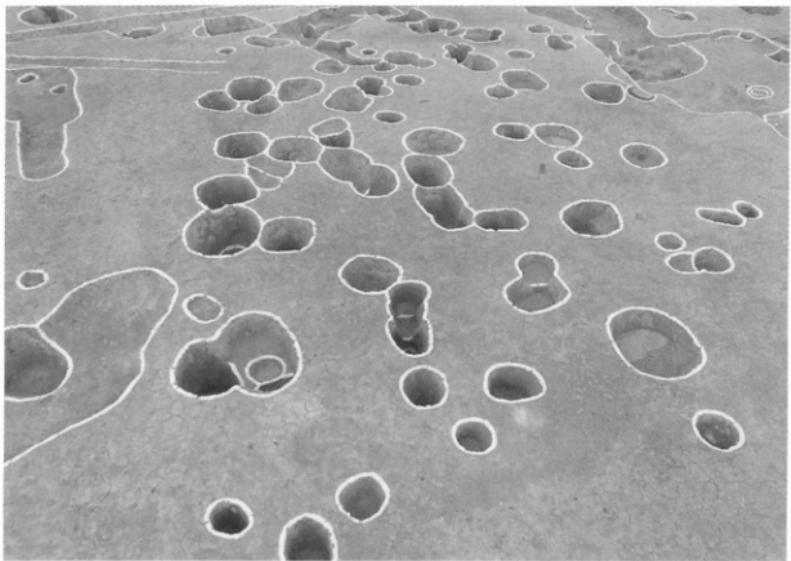


1 SH150・183 (南から)

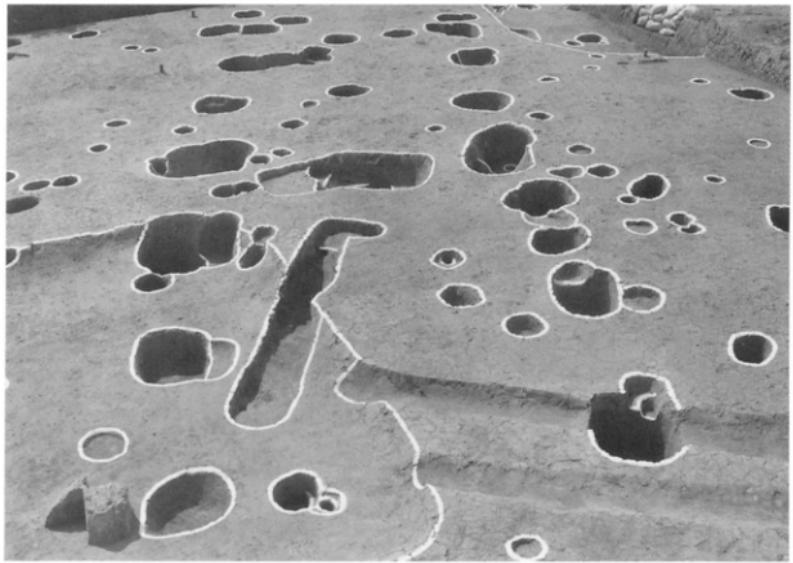


2 調査区南東部 (俯瞰)

図版60



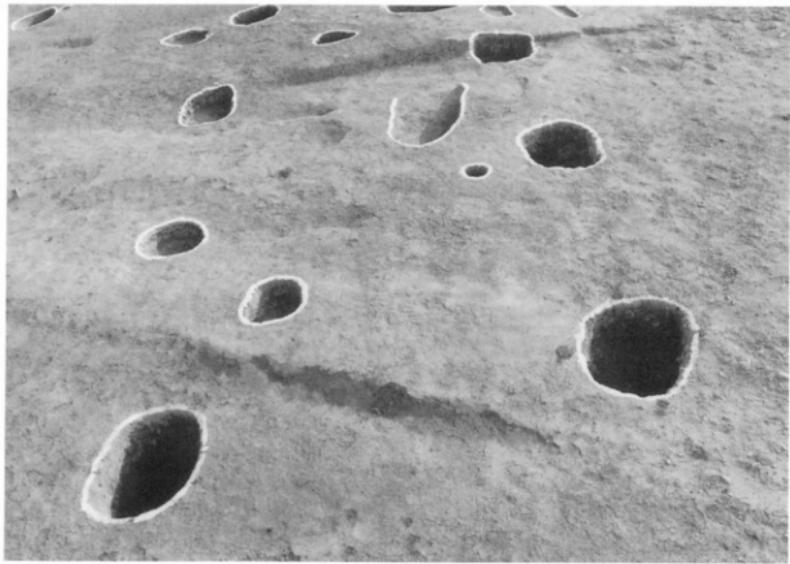
1 SH155・156 (南から)



2 SH159・161 (北から)



1 SH166~168 (北から)

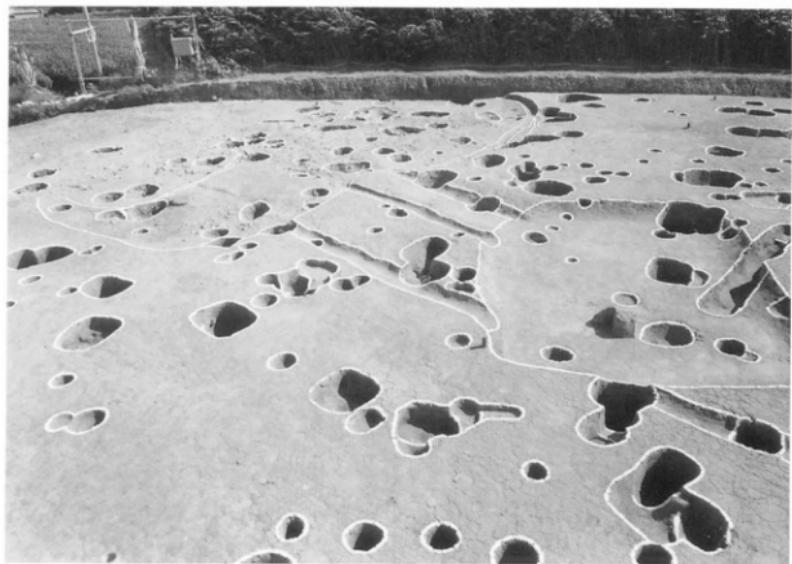


2 SH169 (北から)

図版62



1 SH178～180 (北から)



2 SH187 (北から)



1 調査区北部（俯瞰）



2 SZ01・02（南から）

図版64



1 SZ01遺物出土状況（北から）



2 SZ01遺物出土状況（北から）



3 SZ01遺物出土状況（南から）



4 SZ02遺物出土状況（西から）



1 SF21遺物出土状況（北東から）

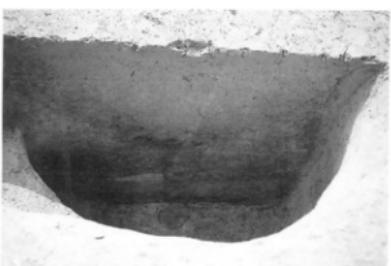


2 SF22遺物出土状況（東から）

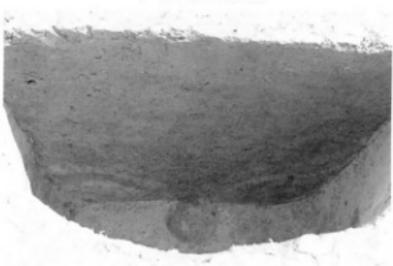
図版66



1 SF01半切状況



2 SF02半切状況



3 SF04半切状況



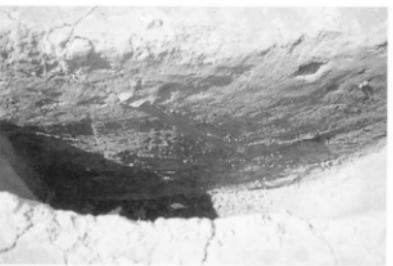
4 SF08遺物出土状況



5 SF15半切状況



7 SF14 (南から)



6 SF16半切状況



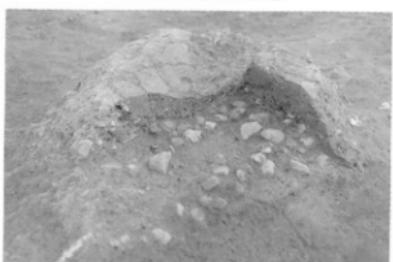
1 SX01半切状況（西から）



2 SX05遺物出土状況



3 SX04（東から）



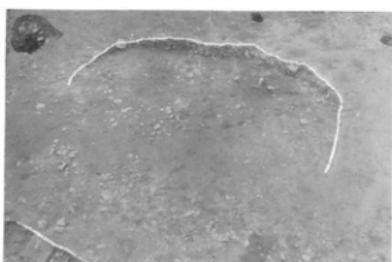
4 SX04炉跡土層断面



5 SX06遺物出土状況（北から）

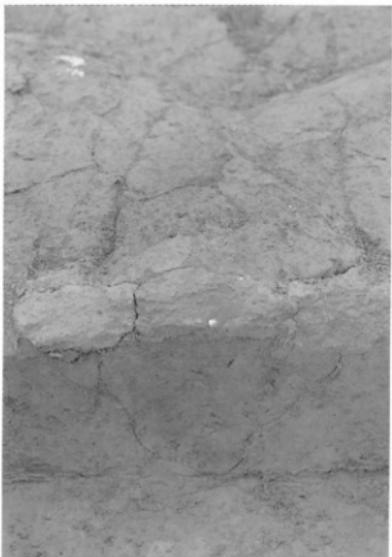


7 焼き場跡遺物出土状況（東から）



6 SX07（東から）

図版68



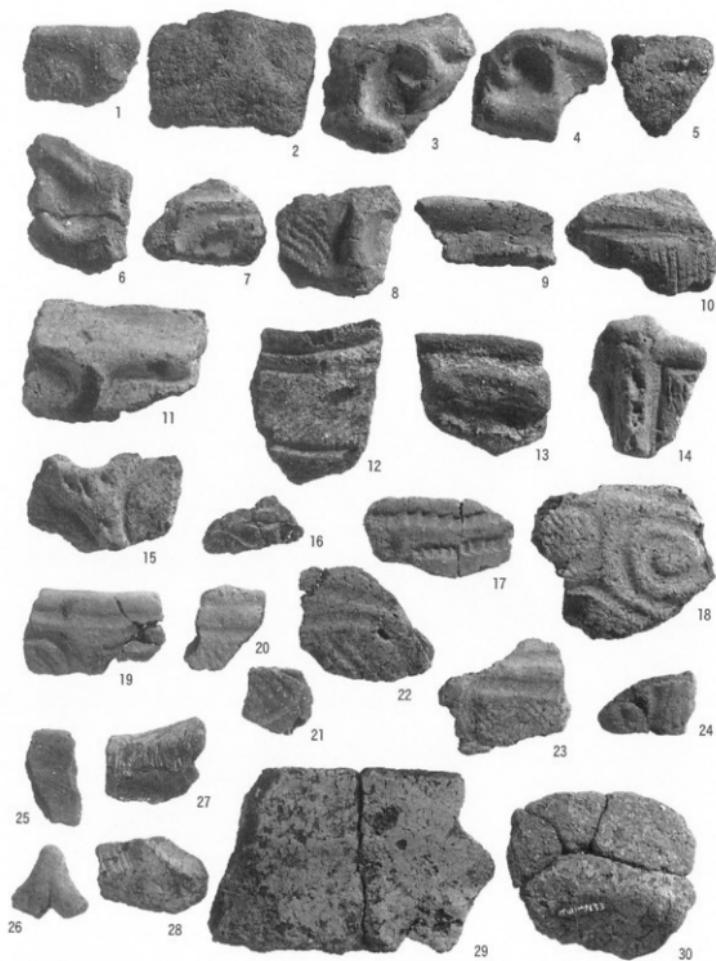
1 SD93暗渠部分土層断面（東から）



2 SD28鉄掘削痕検出状況（西から）



3 SD97遺物出土状況（南東から）



出土土器 1 (縄文)

図版70



47

41



55

85

77

37



46



40

50



56



73

出土土器 2 (弥生～古墳)



83



88



98



102



99



110



100



103



105



126



115



118



116

図版72



出土土器4 (弥生～古墳)



150



151



152



188



198



197



199

出土土器 5 (弥生～古墳)

図版74



出土土器 6 (弥生～古墳)



261



265



262

272



271



277



281



284



285



275



292



294

図版76



283



308



317



310



315



319



320

出土土器 8 (弥生～古墳)



出土土器9（弥生～古墳）

図版78



363



364



365



371



370



381



383



373



382

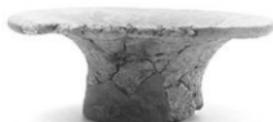


376



374

出土土器10（弥生～古墳）



385



386



389



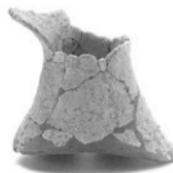
392



393



394



395



396



397



399

図版80



416



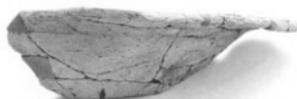
418



420



451



436



455



450



423

449



469

出土土器12（弥生～古墳）

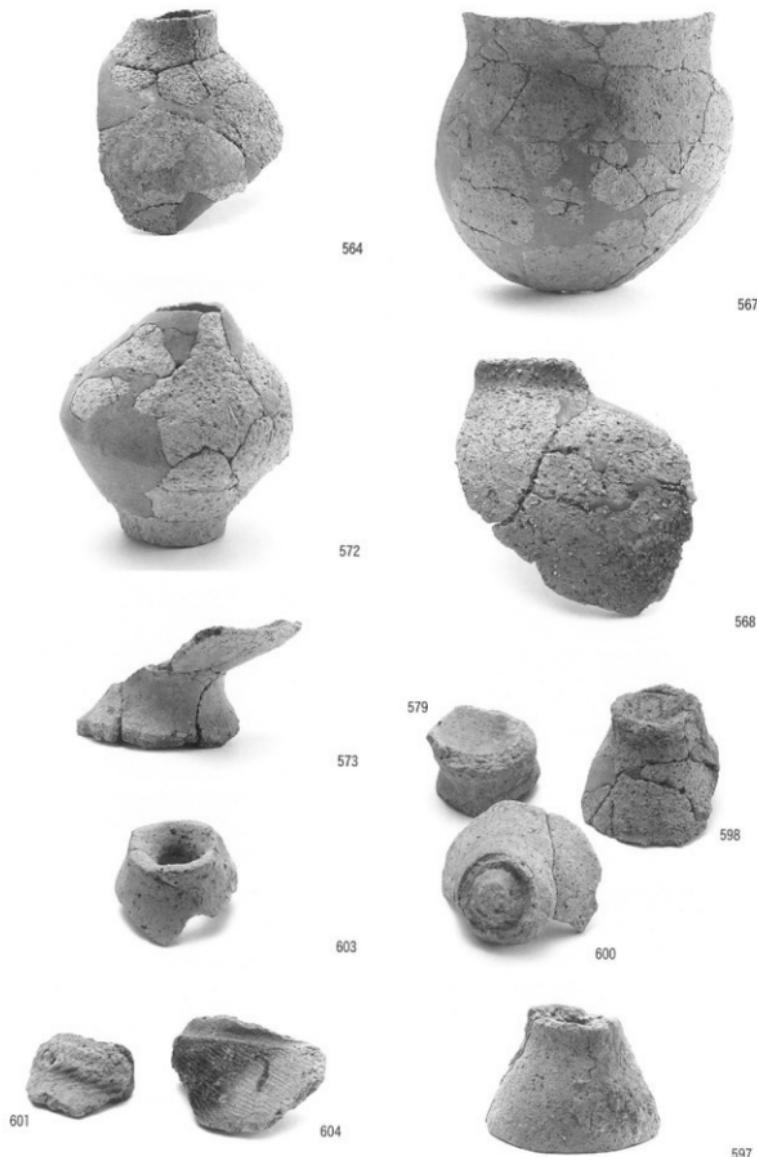


出土土器13 (弥生～古墳)

図版82



出土土器14 (弥生～古墳)



出土土器15（弥生～古墳）

図版84



出土土器16 (弥生～古墳)



出土土器17（弥生～古墳）

図版86



653



646



657



647



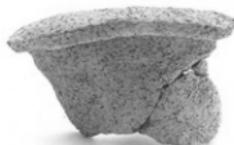
660



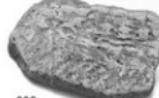
692



662



680



693



677



684



702



711



712

出土土器18（弥生～古墳）



713



725



737



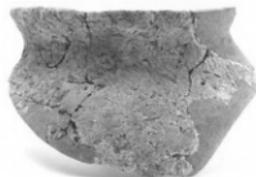
755



739



743



757



756



773



772



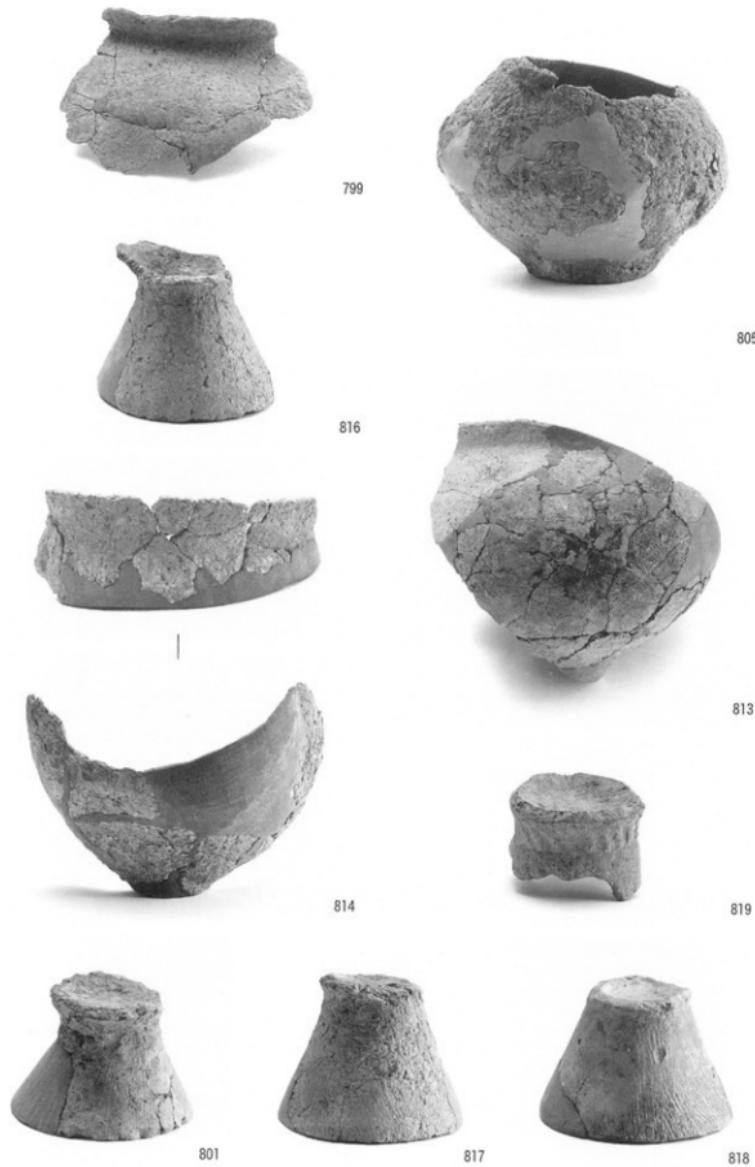
759

出土土器19（弥生～古墳）

図版88



出土土器20（弥生～古墳）



出土土器21（弥生～古墳）

図版90



824



828



829



832



831



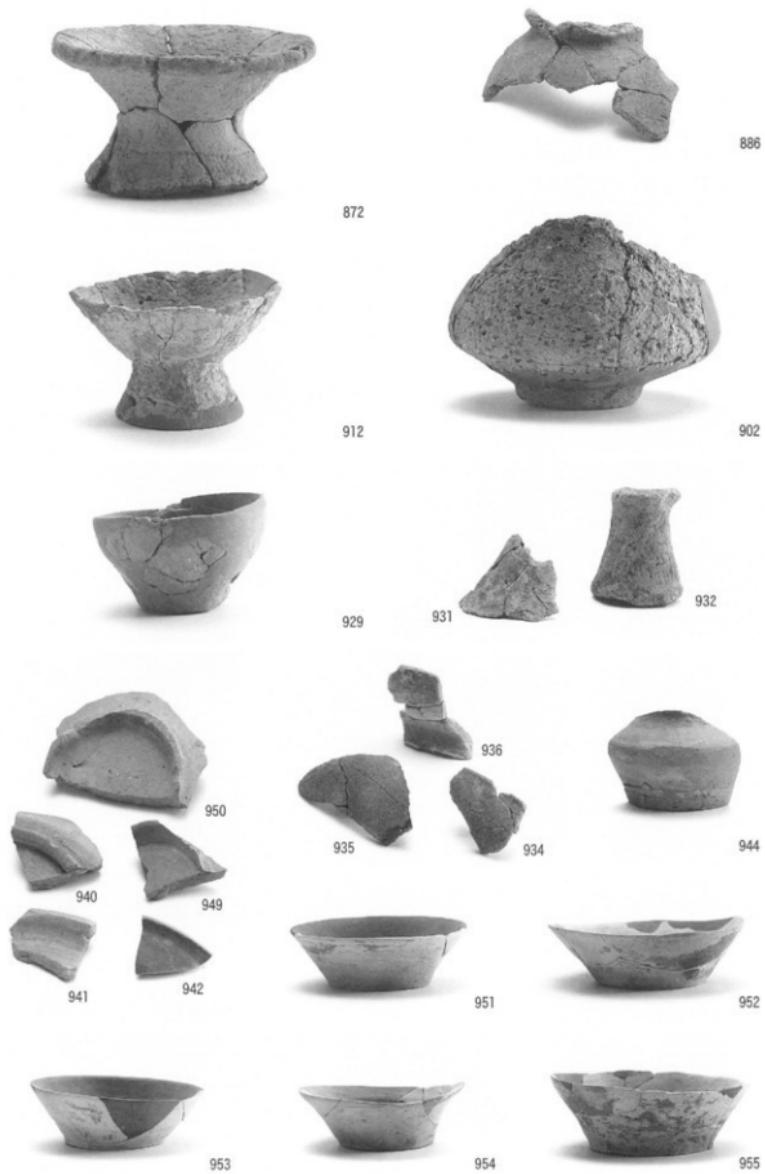
833

出土土器22（弥生～古墳）

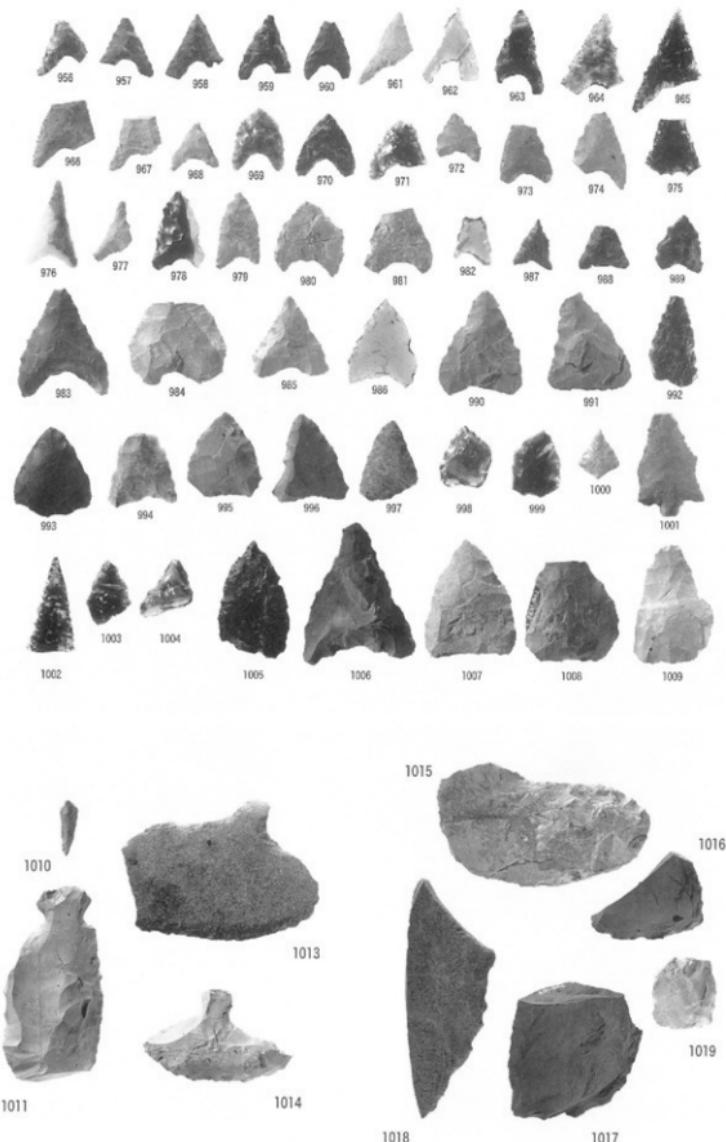


出土土器23（弥生～古墳）

図版92

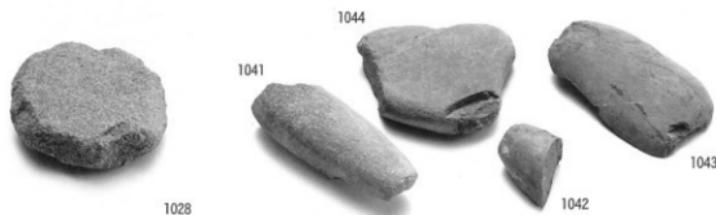


出土土器24 (弥生～古墳、その他)



出土石器 1

図版94



出土石器 2



1051



1046



1053



1054



1050



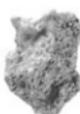
1049



1052



1061



1062



1063



1055



1056



1057



1064



1065



1066



1058



1059



1060

出土石器3、ガラス質の滓、玉類

# 報告書抄録

ふりがな	うえのたいらいせき						
書名	上ノ平遺跡						
調査名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	掛川市-2 (第2分冊)						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第187集						
編著者名	田村祐太郎(編集)、株式会社ジエネティック、パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷町23-20 TEL 054-262-4261 (代)						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	経緯度(世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因	
上ノ平遺跡	静岡県掛川市 上ノ平	22213	31 北緯 東経	34° 49' 45"	137° 57' 21"	200004~ 200203 13,900m <sup>2</sup>	道筋建設(第二 東名建設に伴う 埋蔵文化財発掘 調査)
所取遺跡名	種別	主な年代	主な遺跡	主な遺物		特記事項	
上ノ平遺跡	集落	縄文時代中期	住居跡1、土坑(落し穴) 17	縄文土器、石器51、石錐 1、石錐4、スクレーパー 4、模形石器1、石核1、 石斧2、円盤形石器1		狩猟と生活の 痕跡	
	聚落	弥生時代後期 ~ 古墳時代前期	要穴住居跡140、周溝をも つ建物跡44、掘立柱建物 跡177、土坑など4、小穴、 洞、方形周溝墓2	弥生土器、土器窓、石器 3、石斧5、石錐4、敲 石10、麻石3、甕石8、 石皿1、管玉1、小玉5		遺構密度の高 い居住域跡	
	聚落	古墳時代終末期~ 奈良時代	掘立柱建物跡3	土器器、須恵器		建物設置の可 能性	
	散布地	平安時代~ 鎌倉時代		灰釉陶器、山茶碗			
	散布地	江戸時代		かわらけ			
要約	<p>原野谷川上流域の丘陵上に立地する、弥生時代後期前葉から古墳時代前期に亘る集落跡である。調査は、遺跡の北端を対象とする。調査区内の地形は中央の谷をはさんで東西に分かれる。</p> <p>弥生時代後期前葉に、排水溝をもつ傾丸長方形の堅穴住居跡と小型の掘立柱建物によって集落がはじまる。弥生時代後期後葉になると、住居は周溝をもつ建物が主体となり、掘立柱建物は大型化する。古墳時代前期になると、住居は方形の堅穴住居跡になり、住居域が東部に推定されるようになる。古墳時代中期に西部に設けられた方形周溝墓2基との関連によって、聚落構造が変化したものと推測することができる。</p> <p>遺跡の広さや遺構数・密度、形成過程の長さなどから、原野谷川上流域における主要集落として位置づけることができる。また、周溝をもつ建物や大型掘立柱建物などは、丘陵上の集落としては特徴的であるといえる。さらに、住居構造や墓陪葬品における変遷過程や、布振りの掘立柱建物跡や灰石英の管玉などから、原野谷川流域を超えた社会的動向との関連を把握することができる。</p>						

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第187集

## 上ノ平遺跡

第二竪名施設104・105地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市－2（第2分冊）

平成20年3月31日

編集・発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL (054) 262-4261㈹  
FAX (054) 262-4266

印刷所 横本印刷株式会社  
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210  
TEL (0548) 32-0851㈹

